

一般人・イン・フロントライン

全緑小隊

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

6 / 27 活動報告更新しました、小説本文が更新出来ず申し訳ありません。今後の更新についてとなります。

最早何番煎じやも知れぬドルフロ小説です。

一応転生タグは入れておりますが、どちらかと言うとタイムトラベラーが近いかと思えます。

昔某所にてSSっぽいを書いてはおりましたが、今回超久々の執筆（ついでにこちらでは処女作）となります、というか間が空きすぎて最早初執筆と同様です。

遅筆、稚拙、ペースバラバラとあんまりな点ばかりですが、生暖かい目でご覧いただければ幸いです。

ちなみに序盤はシリアスめですが、後々暴走する予定ですので悪しからず。

※タグは後々増えていったりします

# 目次

## 序章―一般人、平和とオサラバー

一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ	1
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ2	6
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ3	10
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ4	13
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ5	17
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ6	20
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ7	24
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ8	27
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ9	31
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ10	35
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ11	39
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ12	42
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ13	47
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ14	52
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ15	57
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ16	61
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ17	65
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ18	69
―一般人、死地より脱す―	
一般人・イグジット・フロントライン	73
一般人・イグジット・フロントライン2	78
一般人・イグジット・フロントライン3	83
一般人・イグジット・フロントライン4	88

一般人・イグジット・フロントライン5

二章―一般人、基地へ行く―

一般人・イン・メイビーセーフティ

一般人・イン・メイビーセーフティ2

一般人・イン・メイビーセーフティ3

一般人・イン・メイビーセーフティ4

一般人・イン・メイビーセーフティ5

一般人・イン・メイビーセーフティ6

一般人・イン・メイビーセーフティ7

一般人・イン・メイビーセーフティ8

一般人・イン・メイビーセーフティ9

一般人・イン・メイビーセーフティ10

一般人・イン・メイビーセーフティ11

一般人・イン・メイビーセーフティ12

92

98

102

106

110

114

118

124

128

133

137

141

145

序章―一般人、平和とオサラバ―  
一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ

「この中に入ってなさい。指揮官が貴方の処遇を下すまでね」  
「んなつ!？」

冷たい言葉のあとに、負けず劣らず冷たく重い金属音が背後で鳴り響く。

青年が文句を言おうと振り向くと、既に言葉の主は鍵を掛け終えて踵を返すところだった。

「おいっ、待てよ！ 何だよ、俺が何をしたって言うんだよ!!」

青年は離れ行く背中に叫ぶが、一瞬たりとも気に止められる事もなく、その人は黄緑色のツインテールを揺らしながらその姿を消すのだった。

「……なんだよ、これ」

暗い暗い、部屋の中。

無機質な壁と鉄格子に囲まれた中で、彼は呟いた。

「何なんだよ、これ」

理解が追いつかないままに、彼はもう一度呟いたのち、己の腕を見やる。

その両腕は鈍色の枷によって戒められており、不快な重さとぐちゃぐちゃになった思考に青年は立っている事も嫌になる。

「俺は犯罪者かっつての、くそっ……」

苛立ちのままに毒づく、青年は座れる場所があるかと狭い牢屋の中を見回す。

だが椅子のような真つ当に腰掛けられる物はアチコチ罅の入った便座のみ、他は薄汚れたボロ布の敷かれたベッドのような物だけだった。

「うわ、ハエが集ってる……。ベッドは……とりあえず何もいない、

か」

羽虫の舞う便器からなるべく離れるようにし、青年はベッド擬きの隅へと座り込む。

「はあー……つくそー、ほんと一体何だって言うんだよ。そもそも、ここどこなんだよ」

ため息と苛立ちを隠すことなく言葉に出しつつ、青年は混乱しつばなしの考えに整理をつけるべく、とりあえず自分が何故こんな状況に置かれてしまったのか、それを思い出す事にした。

「……つつつても、数日ぶりに会社から出て、のんびり家まで歩いてたらいきなり立っていられないような凄い地震が起きて、しゃがんで頭を抱えてたら、気付いたら何でか荒野のど真ん中において」

日の沈みかけた無機質な街中のビル群が一転、車や建物の残骸が散らばる荒涼とした日の下に変ったのだ。

場所は愚か、時間帯すらアベコベで混乱しっぱなしだった青年は、まさか今の地震で全てが崩れてしまったのかと戦慄しながら誰かいないかと辺りを歩き回った。

そして、その辺りを歩いていた紅いコートの女性に声を掛けた……そこまでは良かった、だが。

「いきなり銃突き付けられるなんて、今時日本じゃドラマでもあり得ねーよ。しかも拳銃ならともかく、あんなやたら長い猟銃みてえな奴をさ。あんなん持ってどこに狩りしに行くんだよ、猟友会かなんかかっつての。しかもこっちの言葉にも聞く耳持ちゃしないし……そもそも街中で堂々持つとか銃刀法違反じゃねーのか？」

青年は慌てて敵意が無いことを伝えるが、女性は意に介さず青年を拘束するとそこから数キロほど離れた基地の建物にまで青年を強制連行したのだ。

「指揮官？って呼ばれてたけか、あのヤロー……人の所持品むしるだけむしって牢屋にぶちこむとか、ふざけてんのか。周りの奴らはいいつの言うことに従ってたし、実際偉いやつなんだろーな。すっげえやたら偉そうにしてたけど……あーやだやだ」

連れてかれた部屋にいた男の顔を思い出し、ため息と共に毒を吐ききった青年は俯き加減に己の手枷を眺める。今でもまだ、彼には今のこの状況を納得出来ないでいた。

「意味わかんねーよ、第一地震が起きたと思っただら場所も時間も変わったなんて、アニメや漫画じゃないつてのに。何で俺みたいな一般人がこんな目に遭わなきゃならねーんだよ。」

もしかしてどっかに拉致られた？ いやいや有り得ねーよ、俺ずっとあの場に居たんだぞ、拉致られたら分かるだろうしそもそもあんなどころに放置されるとかそれこそ有り得ないわ」

口から出るままにブツブツと自問自答を続けていた青年だったが、扉の開く音が聞こえてその口を閉じる。

荒れ地で彼を捕縛した紅コートとも、先程牢屋に案内……もとい押し込めた緑髪ツインテールとも違う、片眼を銀髪で隠した妙な格好の女性がやってきた。

「出る」

女性は牢屋の鍵を開けると、感情を感じさせない、だが鋭い視線を向けながら今しがた自分が通ってきた背後の扉を親指を立てて示す。

そのぞんざいな扱いに青年の中にまた苛立ちが募るが、彼女の右手に収まっている得物を見て、素直に従う他ないと彼は諦めて立ち上がる。

今までであった女達が持っていたどの銃よりもごつく、重そうなそれを顔色一つ変えずに持っている辺り、到底自分の敵う相手ではない……と、内心青年は嘆息する。

そして、この扱いからして自分の状況が好転するようには、彼にはとても思えなかった。

「……着いてこい」

そんな様子の彼に、表情にほんの僅かに憐憫の色を滲ませた彼女ではあったが、すぐにそれを消すと青年が着いてきている事を確認しながら歩き出すのだった。

「あー、面倒だから単刀直入に聞く。お前どこからきた？目的はなんだ？」

青年が部屋につくなり、高そうな椅子にどっかりと座り込んでいる男が部屋中央に置かれたこれまた高級そうな机に足を乗せたまま、面倒臭いといった表情を隠すことなく青年に向ける。

肩に掛かった深紅のコートは、青年が荒野で出会った女性が纏っていた物とはまた別物のように見えた。

「どこから、つて……さつきも言っただろ!?会社出たらいきなり地震が起きて、そしたらこんなどことも分からん場所にいきなり放り出されてさ！むしろどこだよここ、俺が知りてえよ！」

「あーあー分かった分かった、煩いから落ち着け、全く」

大きなため息をつきながら手で制するような仕草を見せると、男は顎で何かを指し示す。

その方向には、先程牢屋に送られる前に一度この部屋に来た際に回収された青年の所持品が作業机へと並べられていた。

「部下に念のため調べさせたが、この地域一帯において直近にはつきりと感じられるような地震の起きた形跡は皆無だ。当然俺らもそのような地震は全く感じなかった」

「んな、馬鹿な。……でも」

男の言葉に青年は思わず呟く。

しかし、何となく予感はしていたのだ。あれほど建物が倒壊しそうな大地震が起きた直後だというのにも関わらず、出会う人々に慌てた様子は一切見当たらず、逆に壊れた車や崩れた建物は何年、何十年も前に既に破壊された様相だったのだから。

「あと、貴様から押収した荷物を調査させてもらった。通信端末については現在解析中だ、そのうち結果が出るだろ……で、身分証明書『らしき』もの等々調べてはみた、が。おい」

「ほらよ、ボス」

「部外者の前ではせめて指揮官と呼べよ……まあいい」



サングラスをかけ、煙草らしき物を加えた女性を嗜めると、自分を指揮官と呼んだ男は受け取った資料に軽く目を通してから青年の前に放り投げた。

「字体からして恐らく極東……ニホンの物と推察される、だが現行のデータベースからは判別不能だ」

「判別不能、って俺はその日本の人間だよ！っつーか言葉だっけ通じてるし、そもそもここは日本じゃないのかよ!?!」

青年は思わず食って掛かった。ここまで普通に言葉が通じていて、それでここが日本ではないとは到底信じがたかった。

だが。

「何を言っている。ニホンは何十年も前に消えた。ニホンだけじゃない、東アジアを始めとした多くの国がコーラップス汚染と第三次世界大戦で姿を消した」

「……は？」

返ってきた言葉は、青年の想像を遥かに越えるものだった。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ2

青年の頭を、鈍器で強かに殴られたかのような衝撃が襲う。それだけ、指揮官の男に今宣告された言葉が信じられなかったのだ。

「例え貴様が本当にニホンの人間だったとして、それを証明する術はない。貴様の持っていた何れの代物も、我々にとって宛になる物とは成り得なかった」

「嘘だろ……何だよ、それ。何かの冗談だろ、そうだと行ってくれよ」  
「嘘も冗談も何もいっていない。何なら今の『2061年』の世界地図でも見せてやろうか、ん？」

「……は、は、は。2061年で。40年も、以上の、あとの世界ってなんだよ……」

思わずその場にへたり込む青年。ここは青年が数時間前までいた場所とは全然違う所、しかも自分がいたはずの場所は、国は、何十年も前に消えてしまっている、そんな衝撃的な事を受け入れられるはずも無かった。

「これ、何かの悪い夢だろ、夢なら覚めてくれよ……」  
「現実逃避したくなる気持ちも分かるがな、諦めろ。何ならつねるか殴るかしてやろうか？」

「いらねーよ……それに覚めたら覚めたでどうせ仕事漬けの日々に戻るだけだし。今のこの状況よかマシだろうけどさ」

ギロリと目で指揮官を睨み付ける青年だが、その瞳には力も光もない。そして、その視線はすぐに床へと落ちるのだった。

「まあ、それはそうだろうな。……で、絶望に浸っているところ悪いが」

「……何だよ」

「今の貴様は身元不明の不審人物だ。そんな人間を置いておけるほどにこの支部に……グリフィンに余裕はない。ましてや貴様が人類人権団体や反戦団体、テロリストの手先の者でないとも限らんからな、危険過ぎる」

「は……はああ!?!ちよ、ちよつと勘弁してくれよ!」

指揮官からの思いもよらぬ言葉に思わず青年は顔をあげる。いくら自身が唐突に天涯孤独の身となってしまうとはいえ、いきなり危険人物呼ばわりされる謂れはない

「ごちとら知りもしない世界に、未来に放り出されてどうしようもない状態だつてのに、なんでそんな扱いされなきゃならないんだよ!!」  
「残念だが貴様の身の上など知ったことじゃない。そもそも過去から飛ばされてきた、とどうやって証明するんだ? 貴様のデータなど存在しないというのに」

「そ、そんな、血も涙もない事を……」

青年の言葉を聞いた指揮官は、唐突にくつくつと笑い出す。

「血も涙も、か。くくつ、残念だが、俺以外の今この部屋にいる奴は実際血も涙もないぞ」

「いや、そんな言葉遊びはどうでもー」

「こいつらは人間じゃない、人形だ」

「……えっ」

この日、最大のショックが青年を包む。

それこそ軋む音の聞こえそうな動作で青年は助けを求めるように指揮官の側に立つ女性らへと顔を向ける。

だが、誰一人として否定の言葉を口にする者はいなかった。それどころか、サングラスを掛けたそれこそ言うなればマフィアの風体を成した女性は自分の得物を自分の脚に向けると、

「いい機会だ、よく見とけ」

「ちよつ、まつ」

青年が制止する間もなく、その引き金を引き絞った。途端に響き渡った銃声と凄惨たる光景を想像した青年は思わず顔を背けたが、悲鳴も呻き声も何一つ上がらない状況に流石に視線を元に戻す、と。

「き、きか……い……?」

「言つたら、人形だつて。正確には戦術人形、戦闘向けの人形だ」

銃弾が抉った皮膚の下には肉のようなナニカこそ見えはするが

真つ赤な血が溢れ出すことはなかった。

代わりに飛び散ったのは少々濁った茶色の液体、そして裂けた肉らしき物体の奥には骨の代わりに鈍く光る機械部品が顔を覗かせていた。明らかに、人のそれとは異なる光景、異質な現実。

周りの者達も、誰一人顔色一つ変えるものはいなかった……表情を引き攣らせている指揮官を除いて。

「おいトンプソン、お前いきなり何してくれてんだ」

「百聞はなんとやら、真実を知らしめる為には実際に見せた方が早いだろ」

「あのな、だからってフルオートでぶっぱなすんじゃない！弾だってタダじゃねえしガツツリ修理しなきゃならんだろうが！」

「ハッハッハ、これはすまない。ま、これでこいつも現実をはつきりと思いつたことだろう」

怒れる己の指揮官をいなす様に笑うと、トンプソンと呼ばれた女性はその足で何処かへと歩き去って行く。

去り際に、視線を少し青年に向けたが、特に何か言うでもなくその姿は消えていった。

「全く……あいつにも困ったもんだ。優秀な奴なんだがな」

「ほ、本当に……人間、じゃなかった」

「だから言っただろうに。まあ、その様子じゃこちらの言葉をハツキリと信じて貰えただろうが」

その言葉には、青年も頷く。自分自身に銃をぶっぱなす、それも何発も連射して痛くも痒くもありません、そんな姿を見せられれば流石に信じる他なかった。

「で、でも、それでもいきなり出て行って言われても、どこに行けば」「知らん、自分で何とかしろ……と言うのは簡単だが、いきなり斬って捨てるのも中々に気分が悪い。危険団体に拾われてこちらの敵になられても厄介だ。だから、これから少々テストをしようと思う」「テスト？」

「ああ。そのテストに合格すれば、貴様をこの支部にて面倒を見てやらんでもない」

「ほ、本当か!？」

降ってわいたような提案に食い付くように青年は立ち上がる。その様子を見て指揮官は薄く口角を吊り上げる。

まるで、獲物が餌に食い付くのをまっていたかのように。

「嘘は言わんさ。俺はここの指揮官だ、その程度の権限は持ち合わせている」

「よ、良かった……そ、それで、そのテストっていうのは？」

周りの人形達が、ほんの一瞬顔をしかめたのを気付かないままに、指揮官から出された条件を青年は真面目に聞いた。

その、指揮官から提示された内容とは。

「ま、分かりやすいことだ。とりあえず今から戦場に向かってもらう」

「……なんだって?」

無茶振りだった。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ3

「……」

「顔色が優れないわね、汗の量もかなり多いわ。震えてるようだけど寒いのかしら？」

「いや、こんな装甲の鎧着させられて寒い訳がねーだろ。これはあれだ、単なる武者震いだ」

「あら、強がつちゃって。怖いなら怖いって言えばいいのに」

「うるっせえ、分かってたたら一々突っ込むんじゃねえ！それにあの指揮官とやらにも何度も言ったけどさ、俺マジで一度も戦闘経験ない一般人なんだぞ!?!それをいきなり戦場真っ只中に突っ込んで敵を倒してこいだなんて、いくらなんでも無茶苦茶だ！怖くないわけないだろ!!」

司令部から程離れた上空を一機の輸送ヘリコプターが飛行する。その中で、やや顔色の青い青年は亜麻色の長い髪を青いリボンで纏めた女性に向けて溜め込んでいたであろう怒気を吐く。

その彼の姿は先程まで着ていたラフなジーンズとジャケットのそれではなく、カーキ色の重厚な装甲を幾重にも纏った鎧。座る青年の横には、同じ色のフルフェイスヘルメットと人の背丈程もあり鎧の装甲よりも更に分厚く横幅も広い重装盾、そしてそれらと比べるとかなりチャチにも思えるハンドガン……のような何かが置かれていた。

「あら、そんな重装備してて怯えることも無いんじゃない？鉄血装甲人形兵『AEGIS』……を模した鎧、だったかしら、それを着けるんだもの。いや、鉄血の奴は正規軍のそれを模した奴だったかしら？」

「んなのどっちだっていいよ。これ貸してやるからぶっ倒してこい、って……本当に大丈夫なのかよこれ。ちゃんと弾丸を防げるのか？」

青年が正に今装着している装甲鎧は、指揮官が部下の人形に台車で運ばせてきた代物だった。

盾も含めるとトータル重量は100キロを超えており、常人であれば歩くどころかまともに立つ事すら難しい程の物であるのだが、指揮官曰くこの装甲鎧は特殊なパワードスーツに装甲を着けてありそのスーツが身体の動きを補助してくれる、との事。

実際、半信半疑の青年が着込んで歩き回る事は出来たし、輸送へりにも自力で乗ることが出来た。人形もそうだけど相当なトンでも技術だなおい、とまたも青年が驚く一幕となったのだ。

輸送へりに乗る際にミシミシと聞こえた事の方がむしろ青年には恐ろしく思えたが。

「さあ？そもそも指揮官が何でそんな代物を持っていたのかは気になるけど。どうせ自分達で使うことはないし」

「……おい、嘘でもいいから大丈夫だって言ってくれよ、一気に不安なってきたんだけど」

「大丈夫でしょ」

「軽いなおい」

「そんなことよりも、それが渡された武器なの？」

顔をしかめて抗議する青年の事などどこ吹く風といった様子で、女性青年の横に置かれた銃器へと目を向けた。

「そんなこととて……まあいいや。そうだよ、これを渡されたんだけどさ？あんたらが持つてるようなゴツい奴じゃなくてこんな変な形した銃で倒せるのかよ、相手だって人形なんだろう？」

青年はそのハンドガンみたいなそれを手にとって眺める。

重く黒光りするそれは一般的に銃と呼ばれる形とはやや違う、長い銃身の後方上部に異形のマガジンが搭載されたものだった。

「へー、M110じゃない。そんな変わり物のハンドガンがあっただなんて驚きだわ」

「変わった銃じゃなくて強い銃を寄越せよ！あの緑髪ツインテールの奴、何の嫌がらせだよ!？」

この銃は、青年を牢屋に押し込んだあの少女が指揮官に青年用の武器を持ってくるよう言われた際に、武器庫から持ってきた物だった。

「あー、なるほどね……あの子ならその銃選も納得。でも、その武器の選択はそんなに悪いものじゃないと思うわよ」

「あ？何でだよ」

「あら、M110の説明聞かなかったの？貴方が初心者だって言うのなら、ある意味ピツタリだと思っただけね」

そう言うと、女性は青年の手から銃を取る。

「普通ね、銃ってのは装弾数は大体2,30発くらい、多くても50発いくかないかくらいしかないの。中には100発いくような物もあるにはあるけど、一般人の貴方が使える代物なんて精々ハンドガンが関の山でしょ」

「……簡単に説明受けただけで複雑な機構の武器を使えるようになったら苦労はしねえよ」

女性の指摘に、青年も渋々頷く。全くの素人が何の訓練もなく初見であっさりと高火力の銃を扱えたら誰も戦争で苦労はしないだろう。

「その点、そのM110は銃の中では比較的操作のしやすいハンドガンでありながら圧倒的な装弾数を誇るわ。このマガジンタイプは……恐らく100発のタイプね」

「マジかよ、なにそれすげえ」

「装弾数が多いということは弾切れになるのが他の銃に比べて遅い、攻撃をはずしてもそれが致命的にはなりにくい、マガジン交換というハッキリした隙の発生回数が少ない。その分戦闘中の重心変化が大きいのは欠点だけど、その重装甲を着た状態での重心なんて微々たるモノでしょうよ」

「な、成る程……」

青年は銃を受け取りしげしげと眺める。変な銃寄越しやがってこのヤロー、という考えは最早どこかへと消え去り、あいつそんな事まで考えて選んでくれたのか、スゲーという感想に切り替わっていた。

実にチョロい……単純な男である。



## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ4

「まあそもそもとして、それが撃てないからって流石にどうのこうのは無いでしょ。指揮官もテストだと言ってたし、実際に戦場にてどう動くのか？どう考えるのか？それを見たいのではないかしら。なにせこんな状況だもの、本当に安全な場所なんてどこにもないんだから」

「……その言葉には安心すりやいいのか、それとも絶望すりやいいのか」

何とも言えない表情を浮かべる青年に、本当にこの人は今の今まで一度も紛争に、戦いに巻き込まれた事のない人なんだなと彼女は再認識した。

本来は守られるべき立場の弱い人間、銃どころか刃すら持たされた事のない者がいきなり戦場に放り込まれる、その心情は如何とするか。

「ま、少なくとも死ぬことは無いから安心なさい。緊張してもいい結果は産まれないわ」

「……そ、そうだよな！ほんとにいきなり戦場に、死地に追いやるはずないもんない！」

アツハハハ、と笑う青年を尻目に、女性は口を動かす事も声に出す事もなく、己の疑似思考回路モジュールの中で呟いた。

『これが、普通の指揮官だったら……だけどね』

ただ、その指揮官の考えは分からなくとも彼女としては目の前の人間を戦地にただ放り込むのを良しとはしなかった。

戦いの為に生まれた戦術人形がその戦いに関与出来ないならば、少しでも戦う者の為にフォローを。故に彼女は、可能な限り非力な人間である青年の緊張を解そうと務めたのだった。その言葉が、例え真実でなかったのだとしても。

「さて、もうすぐで作戦エリアよ。準備はいい？」

「うう、準備も心構えもできてねーよ……っていうかやけに着くまで早くないか？まだ30分も経ってないぞ」

「言ったでしょ、テストだって。むしろ遠いところでは何か緊急事態が起きたとき駆け付けられないでしょ」

「た、確かにそうだけども」

俄に表情を固くする青年に、女性はため息をつく。いくらテストとはいえ、ここまでガチガチでは出来るものも出来なくなってしまうだろう。

「緊張するな、とは言わないわ。事はなるようにしかならないもの。でも貴方には武器がある、身を護る装甲もある。死ぬことはないし、おもつきしやってみなさい」

「……あんがとな。あと、戻ったらあのツインテールの子にもお礼言わなきゃな」

「それは死亡フラグだからやめなさい」

「ぶふっ、死亡フラグとか言わんでくれ!?!つたく……」

少しだけ吹き出した青年は横のヘルメットを被り、腰に手榴弾のような物をいくつかくりつけ、盾と銃を構える。夜間戦役時によく見掛ける装甲兵そっくりの彼の姿に、女性は再度疑問を抱く。

鉄血の運用する装甲兵の中身は人形であり、人形が装甲鎧を着るのではなく最初から装甲兵として作られる為に、例え装甲兵を撃破・鹵獲したとしてもその装甲鎧を使える訳ではない。つまり、青年が纏う装甲鎧は最初から人間が着る事を想定して作られてあり、実際正規軍が運用している物はそうなっている。

「だとしても、指揮官は本当にどうやって、どこからこんな物を」

「っておい、なんか変な機械……小型の多脚戦車っぽいのが見えるんだけど、何だあれ、タ○コマ?」

「いやタ○コマって何よ」

女性が窓から覗くと、青年の降下予定エリアの飛行場付近には確かに鉄血製多脚戦車『PROWLER』の姿が何台か見えていた。チカ

チカと赤色に光るガンカメラと小型の銃を輸送ヘリに向けているようだ。

「あれは鉄血の雑魚戦車よ、ぶっちゃけその装甲があれば物の敵ではないわ」

「雑魚……って言ってもいやちよい待ってくれ、あの辺ってもしかして俺が降ろされるエリアじゃなかったけ？」

「そうね」

「そうねじゃねーよ！え、いきなり敵に包囲された状態から始まるの?!難易度高すぎやしないか?!」

「大丈夫よ、あいつらは雑魚だから」

焦る青年にそう嘯くが、彼女も内心はあまり宜しくない状態だと踏んでいた。表向きはテストという話になってはいるが、あれは間違いなく鉄血が前線にて運用している機械兵だ。それがこんなグリフィン支部の目と鼻の先でのさばっていると、相手方は前線をかなり押し上げて来ているとしか考えられない。

『だから、この人を放り込んで雑魚とはいえ敵を制圧?そんなの、人形にやらせれば簡単なのに、なぜ』

「ちよっおいいいいいい、撃つてきたぞあいつら?!いくらなんでもテストにしちゃ過激過ぎんぞ!最早実地試験じゃねーか!!そもそもほんとにテストなのかこれ!!」

「煩いわね、分かっているわよそんなこと。このヘリはあんな豆鉄砲程度じゃ墜ちない程度には装甲着けてあるし、窓も防弾ガラスで出来るから落ち着きなさい」

カンカン、と硬質な音がヘリ内部に響き渡り、青年が悲鳴のような叫びを上げる。これしきの事で何を弱音を吐いてるのかと女性は半ば呆れ返るが、そもそも銃で撃たれた事のない彼にとってはこれでも十分異常事態でありむしろ冷静さを保ったままの彼女の方がおかしく見えた。

「いやいや落ち着いていられるか!いくらなんでも限度があるわ、俺が平和ボケしてるからって!」

「自分で平和ボケとか言うのもどうかと思うけどね。パイロットさん、そのまま予定地点行つて」

パニック状態一步手前の青年にツツコミしつつ、女性はパイロットへ指示を出す。パイロットもこの程度の状況には慣れっこなのか、動じる事もなく機体を指定の地点まで進めていく。輸送ヘリは荒れ地のど真ん中、やや開けた場所の上空で移動を停止、扉を開けて降下体勢に入る。だが、PROWL<sup>敵</sup>ERの数も増えており、軽く数えるだけでも10機以上が輸送ヘリに向けて射撃を行っていた。

「んー、こりや結構相手も本気ねえ……着陸は難しそうよ、飛び降りるしかないわ」

「いや、お前、それこそ本気で言ってるの?」

「当たり前でしょ。撃つてきてるのが雑魚だから良いものを、もつと上位の鉄血兵が相手だったらまずここでホバリングなんて不可能よ、下手したらあつさり蜂の巣ね」

「……あーあー、テストだから出来るって事ねちくししようめ」

「そういう事。まあ高さ5メートルつてどこかしら、飛び降りられない高さじゃないわ」

「ぐぬぬ、くそう……分かったよ」

ようやく覚悟を決めたのか、青年は扉の縁に立つ。重装甲のお陰か強烈な風に煽られることもない。左手に盾を、右手に銃を構え、

「やってやる、やってやんよ!行くぞクソツタレ!!」

そして、青年は飛び降りた。

「……頑張りなさい」

無事着地したのを見届け、腕の中の白獣を撫でながら彼女が呟くと同時に輸送ヘリのドアが閉まり、グリフィン支部の方へと飛び去っていった。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ5

「……ふん、渋っていた割には思ったよりあっさりとは決断したな」

グリフィン支部の基地の一室、真紅のコートを纏った男が机に足を乗せて座りながら呟く。机の周囲には多数のモニターが配置され、それぞれいくつかの映像をリアルタイムで描画していた。そのうちの1つ、一番大きな物には飛行する輸送ヘリが映し出されており、その機体の側方にはカーキ色の装甲を全身に纏った人影が現れる。

「ここでの会話を見るにもう少し黙々をこねるかと思っておりますが……FALが上手く彼を宥めたようですね、指揮官」

「我が儘ばかり言われても困る。あいつに手間も金も時間も掛ける余裕は無いし必要もないからな」

隣にたった赤コートの女性の言葉に鼻を鳴らして返し、指揮官と呼ばれた男は机に置いてあったグラスを傾ける。琥珀色の液体が流し込まれる様を見て、女性はやや眉を顰めた。

「指揮官、あまり日中からアルコールを飲まれるのもどうかと思いませんが」

「別に問題はない。今日はこれといって出撃もない、やらなきゃならん仕事もない。なんならリーエン、お前も一杯やるか？」

「遠慮しておきます」

やんわりと拒否しておきながら、リーエンと呼ばれた女性は輸送ヘリの映る画面へと視線を向ける。先程までそのヘリの中から聞こえてきた二人のやりとりは途絶え、吹き荒ぶ風の音のみが画面側に設置されているスピーカーから漏れるのみだった。

「……」

「どうしたキャリコ、いつになく真剣だな」

じつと画面を見つめていた緑髪ツインテールの少女に、片目隠れ不思議コーデの女性が語り掛ける。

「別に。……ただ、折角私が武器を選んであげたんだから、ろくでもない戦果だったら承知しないわよ、つて思ってただけ」

「へえ、キヤリコがね。んー……？あぁ、あいつの持つてる妙な形の奴か」

「変な形しててワルかったわね！私の系譜の銃よ!?!」

「あー冗談だよ冗談、そういきり立ちなさんな」

ふん、と鼻を鳴らすと、キヤリコと呼ばれた少女は再び画面を見据える。その目には大きな自信と僅かな不安、そしてどこか案ずるような色が見え隠れしていた。

「ちゃんとあんたの事考えてその銃を選んであげたんだもの、きちんとやりなさいよ。……頑張って」

小さく呟いたその視線の先で、カーキ色の鎧騎士が降下していくのだった。

「うおわああああああつ、とおおう!?!」

そんな思いは露知らず、何とも情けない叫び声をあげながら落下した青年はずうん、と重い音を響かせて何とか着地に成功する。装甲ヘルメットのグラス部分から辺りを見回すと、既に飛び去った輸送ヘリへの攻撃を諦めたらしい多脚戦車達が早々に銃口を青年の方へと向けていた。

「ぬおわっ早速かよっ!!」

慌てて盾を構え直し、銃のトリガーを引き絞る。パン、と思つたよりも小さな音が響くと、前方にいた多脚戦車PROWLERの足の一本が砕け、体勢を崩して倒れる。銃を向けることもできずガタガタと揺れるそいつを見て、

「い、意外に脆いんだなおい……つてうわわっ!?!ぼーつとしとる場合じゃねえ!」

一発で崩れ落ちた事に思わず啞然とした青年であったが、他の機体の攻撃が盾や鎧のあちこちに当たった衝撃で我に返る。M110を

先程撃破した一体の側にいた機体に向け、何度も引き金を引いて何とか二体目を撃ち倒したところで青年はその方向へと走り出す。銃声に混じってガシャガシャと耳障りな音が辺りに響き、背中には弾丸の当たる衝撃と硬質な音が響き渡る。

だが、彼の耳にはそれほど大きく聞こえなかった。まあそもそもそんな音を聞いている余裕は無かっただろうが。

「重くはないけどつ、やっぱ走りにくっ！でもこれが無かったら多分普通に蜂の巣だし、しゃーねーかクソツタレ!!」

動かなくなつた多脚戦車PROWLERの側をズシズシと走り抜けると、前方に敵の姿が見えなくなつたのを確認して青年は後方へ向き直つた。背面にカンカン当たつていた銃弾が今度は前面へと当たりだす。

「ん……意外に、射程が短いのか？」

青年を取り囲むように包囲していた多脚戦車達のうち、側方や斜方にいた機体は銃口の向きを変えるだけでそのまま射撃を続けていた一方、後方に鎮座していた半数は青年を追い掛けるようにその足に取り付けられた車輪を回転させて青年との距離を詰めていたのだ。

青年と多脚戦車達の距離は20メートルも離れていない。その距離を撃つことなく接近してきている事に彼は違和感を抱いた。

試しに後ろに歩くと、接近をしていた機体は元より、攻撃していた他の機体も攻撃をやめて一斉に移動を始めたのだ。

「移動と攻撃を同時に行えない、のか。つーかそんなに近付いてこなくたって当たるだろーに……いや当てられても嬉しくないんだけどさ。でもヘリの時はもつと遠くから撃つてたよーな？」

そんな事を呟きながらも、青年は銃を連射して何とか倒していく。装弾数の多い銃だった事に加え、胴体に直撃すれば一撃、なんとか脚に当てただけでもバランスを崩して倒れ、攻撃が出来なくなる程に弱い相手だった事も青年には救いだった。

「数撃ちや当たる、当たれば倒せる……何とか、何とかなるか……」

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ6

「こ、これで全部……か？ 疲れた……きつつう」

輸送ヘリから降下して数分後、十数体はいたであろう多脚戦車達を何とかかんとか撃破した青年は盾を地面に置き、ヘルメットを外す。顔中には玉のような汗が浮かび、肩で息をするほど呼吸もかなり荒い。

『ほー、意外とやるもんだなお前。うちの戦術人形ほどじゃないが、まあそこまで出来れば上出来だ』

青年の耳に掛けられたイヤホンからいきなり声が聞こえた。つい先程まで完全に無音だったそれが急に声を発した事により、青年はわかりやすくビクンと身体を震わせた。

「び、ビビった……そりやあんたんとこの人形と違って俺は普通の人間だし、そもそもこれが初めての戦いだっての。これだけ色々装備を準備してもらって何とかギリギリやれてるってのに」

『ま、それもそうだな。使い心地はどうだ？』

「んー、この鎧は一応走れはするけど結構重いし動きにくい。盾は……これくらいの相手だったら無くても良かったかもしれない。この銃Milioに関してはよく分からんけどこれで十分、何だと思う。とりあえずは」

『ふむ。それならばこのまま第二陣を始めても構わんな』

何の抑揚もない台詞に、青年の動きがピタリと止まる。

「い、今なんつった？ 第二陣？ 今の奴等で終わりじゃないのかよ？」

『当たり前だろう。そんな簡単なテストがこの世界のどこにある』

「嘘だろおい……」

『嘘は言わん。凡そ五分後、第二陣の標的が北方より到着する。数は大体10体だが、先程の戦車PROWLER達より手強いぞ』

手強い。その言葉に、青年の顔つきが強張る。びっしりと濡れた顔に新たに汗が浮かび、流れ落ちるが、青年は気にもとめずに問いかける。



「……だ、大丈夫、なんだよな？死ぬことはないよな？」

『それだけの装備があるんだ、問題ない。先の標的にちゃんと通用しているのであれば次の相手にも問題なくダメージは通るし鎧や盾も着けているんだ、心配するな』

「わ、分かった」

『では幸運を祈る』

ブツン、と嫌な音を立てて通話が切れる。そこで顔が汗だらけな事に気付いた青年は何か拭くものが無いかと辺りを見回すが、先程倒した多脚戦車達PROWLERには布のような物は付いておらず、自分の鎧にも拭けるような物は無かった。汗を拭う事を諦めた青年はそのままヘルメットを被り直し、辺りを見回した。

「んー……町の外れの開けた土地、つてどこか？」

周囲にはほとんど物陰はなく、やや離れたところにポツンと一軒崩れた廃屋が見えるのみ。地面は、と見ると以前は舗装されていたのであろう、かなり罅だらけではあるが灰色のコンクリートの線が幅数メートルに渡って続いているのが見えた。青年がその先を視線で追うと、街のようなナニカが見えた。

ナニカと形容したのは、彼から見える限り、そこに見える建物に全て破壊の跡が見えたからだだった。

「完全にボロボロ、街が街として体を成してねーよな。アレ明らかに滅んでるっつーか放置されてるよな」

そこへ助けを求めに行っても間違いなく誰もいない。どころか、何がいるのか分からない状況で勝手にそんなところに行くのは無謀過ぎる。グリフィン以外の人に助けを求めるのは無理と判断した青年は街の方から視線を離し、おもむろに上を見上げる。

「……ムカつくくらい、晴れてんな」

彼の暗澹たる心中とは裏腹に、雲一つない青空は吸い込まれそうな程。そんな空を見上げ、青年はポツンと呟く。

「なんで、こんなとんでもないとこに来ちまったんだよ。俺、生きて、無事に帰れんのかな……」

数時間前まで自分がいたはずの平和な日本から一辺、気付けば絶望している余裕すら無く何十年も後のどこか知らない国で鎧を着て銃を持たされて戦場に送られる。しかも相手は生き物ではなく機械や人形である。彼の常識を遥かに超えた展開に、精神は半ば限界近くまで達していた。

「……でも、今は何とか、テストをクリアしねーと」

ツン、と鼻の奥に来るものを感じた青年は慌てて視線を周囲に向ける。指揮官の言葉が正しければ、次の標的が現れるまでは五分。何分経過したのかはつきりとは分からないが、余り猶予はないはずだと青年は考える。

そして、青年の予想は的中した。

「……っ、来やがった！」

先程見つけた街の方角から、人の姿をした何かが近付いてくる。どれもこれも暗褐色のタイツのような物に上から紫色のボディスーツを纏い、脚部や肘部分に灰色の装甲をつけた女性達が走ってくる。

違いがあるとすれば、赤紫のシヨートヘアに濃いピンクのサンングラスをつけ、両の手にそれぞれ銃を持った女性が六人に、SF然とした形状の灰色のヘルメットを被り前者の物よりは大きな銃を両手で抱えた女性が四人。二種類の見た目に別れているとはいえ同じ姿をした女性達が、青年へとどんどん距離を詰める。

「いいっ……な、なんじやありや、まさかあれが鉄血の人形なのか!？」

衝撃の光景に青年は一瞬呆然とする。グリフィンの支部で出会った人形達とは似ても似つかなかったからだ。そもそも今こちらに近付いてくるのが本当の人形で先程の面子はやはり人間ではないのか、とすら彼には思えてきた。

だが、トンプソンと呼ばれた人形は自分で自分が人形である事を証明して見せた。やはり、彼女達も人形である事に間違いないのだろう。

「あれか、量産型とワンオフの違いみたいな奴か？」

そんな事を呟きつつも、青年は盾とM110を構え直す。どうあろうと、こちらへ向かってくるのは倒すべき相手なのだ。それも、先程の多脚戦車より強い敵。

「……ふう。行くぞ！倒す、倒すんだ！」

息を整え、己に言い聞かせ、青年はM110の引き金を引く。

二戦目が、始まった。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ7

————カタカタカタカタ

『……作戦状況の報告を』

————カタカタ、ピピッ

『グリフィンの人形共は本日も特に姿を見せず、ね。本当にあそこの指揮官はやる気があるのかしら』

————カタカタ、ピピピ

『……ん？代わりに装甲兵が一体、ヘリから投下されてPROWLER部隊と戦闘中？』

————ピピッ

『これは……見た目は間違いなく装甲兵、<sup>AEGIS</sup>だけれども動きにムラがある。おまけに撃ち方は素人同然』

————カタカタ

『恐らく中身は人間が入っていると見るべきね。それも、恐らくはグリフィンではなく軍の……いや、にしてはかなり下手？』

————カタカタ、ピピピッ

『……私が出ましよう。どうも、気にかかるわ』

————ピピッ、ピー……

『ふう。全く、厄介な相手が無ければ良いのだけど』

「ぜ、全然倒れやしねえ！ちゃんと当たってるはず、なのに！」

何度も引き金を引きながら、漏れる言葉には焦りの色が見えだす。青年の目には確かに相手の肩へと当たったのが見えたが、先程の多脚戦車とは違い少し怯んだのみで人形達は再度前進を行う。

まさかと次に放たれた弾は別の人形の腹部に命中、しかしこちらも仰け反り立ち止まりはするものの、数秒もすればまた走り出したのだった。

「や、やべえってほんとマジかよ……ゲームみたく弱点に当てなきや

駄目なんか？っていうか人間じゃねえのに弱点とかそもそもあんの！？」

そうこうしている内に、距離を詰めた人形達が立ち止まり銃を構え出す。やはり射線がぶれるせいか走りながら撃つ者はいなかったが、先の多脚戦車よりも明らかに撃ち始めが早い。そして、

「いいっ……さ、さつきよりも全然、衝撃がでけえっ！」

多脚戦車の銃弾のようなカンカンといった軽く小気味良い音ではなく、ガンガンと叩き付けるような轟音が青年の鼓膜を震わす。鎧や盾から伝わる響きも、先程の物とは明らかに段違いだった。

火力も耐久性も、第一陣を遥かに上回る相手に青年は戦慄する。

「さつきの奴らなんかより、遥かに強い……！」

今更になって、先程の指揮官の言葉が本当だった事を青年は思い知る。もつともそれを信じたところで今の彼には何をすることも出来なかったのだが。

どれ程の効果があるか分からないままに盾に隠れるような体勢を維持しながら撃ち続ける。

しかし、突如M110からカチンカチン、と無情な音が響き渡った。「え……ま、まさか弾切れえ!？」

慌てて盾の影に隠れ、青年は四苦八苦しながらも銃後方の上部に取り付けてあるマガジンを取り外す。空のマガジンを投げ捨てると、念のためにと渡されていた予備のマガジンを何とか取り付け、射撃を再開する。

と、一発の弾丸がサングラスの人形の頭部に当たったかと思うと、そのままその人形はぼたりと後ろへ倒れたのだ。

「や、やった！人間と同じで、頭が弱点なのか？で、でも上手く狙えるか……!？」

どうにか一体倒せたことで自分の中でテンションが上がるのを感じながら、次の標的へと銃口を向ける。

しかし、引き金を引くとまたもカチンカチンという軽い音。何度引き金を引き絞っても、弾丸が相手に向けて放たれる事はなかった。

「……え？え、いや、ちよつ!?なんで、さつき変えたばつかじゃん!」  
青年は何が起きたか分からないといった様子で呆然と手の中の銃をみやる。輸送ヘリの中での話では、この銃の装弾数は100だと  
言っていた。それがたったの数発で弾切れなど起こすはずがない。  
流石の彼にもそれは分かっている、だからこそ今の状況が理解出来な  
かった。

「ま、まさかぶつ壊れ……!?あ、あわわ、どうすりや良いんだ!つてい  
てえっ!」

混乱している青年に更に追い討ちを掛けるが如く、ガッツという今  
までにない鈍い音が響いた瞬間、突如彼の脇腹に鋭い痛みが襲い掛か  
る。思わず手を当てようとするが鎧に阻まれた青年の背筋に冷たい  
物が走る。

「つつー……い、今のつて」

単なる腹痛や筋肉痛のような内側からくる痛みではなく、外から刺  
されたような痛み。それも、今までに感じたことのない程の痛さ。

「お、おい……嘘だろ、鎧を貫通したつてのわ!」

思わず視線を痛みの続く腹部へと見やる。そこには、カーキ色の装  
甲を穿った見慣れぬ小さな黒い点。先程装着する前に見たときには  
どこにも着いていなかったそれは、弾丸が装甲を貫いた事を意味して  
いた。

「じ、冗談じゃねえよ、有り得ねえだろ……っ!」

一瞬現実逃避仕掛けていたが、続いて頭部のヘルメットから響いた  
衝撃に、青年は現実へと引き戻される。それは先程鎧に黒穴を空けた  
時と同じような衝撃、音だった。つまるところ、装甲が弾丸を弾けず  
に受け止めてしまっている事を意味していた。

「こ、こんなの、どうすりや良いんだよ……!」

攻撃する手段は無くなってしまい、頼みの綱の鎧も敵の攻撃の前に  
は防ぎきれない。青年の思考が、絶望へと塗り潰されていく。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ8

「お、おい、聞こえるか指揮官!? っていうか聞こえてるんだろ!? おい!!」

完全になつちもさつちもいなくなつた青年は可能な限り盾の影に身を潜めると、通信機の向こう側にいるであろう指揮官へと必死に呼び掛ける。

だがすぐには返答はなく、反応があつたのは十秒程経つてからだつた。

『全く煩いな……聞こえてる、どうしたんだ』

「どうしたも何も、超ヤバいんだよ！銃は今さつきマガジンを取り換えたばかりだつてのにすぐに弾が出なくなるし、敵の弾丸が鎧の装甲を貫通しちまつたんだぞ！話が違うじゃねーか!!」

『……ふーん』

「いやふーんってふーんじゃねえよおい！このままじゃ死んじゃうよ!!」

自身の危機を伝えたにも関わらずのあまりの温度差のある返事に青年は怒鳴りつける。そもそも先の戦闘が終わつた後の通信も、どこか投げやりとも取れる……端的に言えばあまり感心無さげなように聞こえていた。

『銃に関しては俺も大して知識が無いからよく分からん、後で用意したM950Aにでも聞くんだな。鎧に関しちや……んー、ちゃんとしたところからもらったはずだつたんだがな。すまん。ふん、使えん物と交換して貰えて万歳と思つてたが所詮はゴミ同士の交換だったか』  
「な、何を言つて……つてそんな事はどうでも良いつ、とにかくどうすりゃ良いんだよ!」

ぼそり、と僅かに聞こえた気になる台詞に一瞬青年は戸惑つたが、それよりも自分の危機的状況を脱する方法を指揮官へと求めた。何よりも、今のままではどうあがこうとも彼はあの人形達に立ち向かう事は出来ない。

『こつちじゃすぐに貴様を救出出来る手段はない、自力で頑張れとしか言えないな』

だが、その返答はそれこそ青年にとって愕然とする、余りにも慈悲のない物でしかなかった。

「……何だよ、それ。自力でなんて、そんな適当な指示ってあんのかよ」

『適当であるものか。お前を輸送したへりはもう司令部近くまで戻って来ている、そちらへ再度向かわせるにしても給油等々済ませなきやならんからな、時間が掛かるのは分かるだろ』

「ぎっけん！こつちはあんたにいきなり戦場に出て戦えって、テストだから大丈夫だからって無理やり戦場に送られてんだぞ！それを」  
『それならばこつちも言ったはずだが』

半分狂乱状態の青年を遮るように、冷酷な台詞が紡がれる。

『現状貴様は不審人物であると。テストするに辺り多少なりとも支援はしたが、一から十まで保護する等とは一言も言っていない。そこを忘れるな』

「っ！そんなのって!!」

『迎えのへりは準備しといてやる、生きたいなら迎えがくるまで自分で何とか生き延びろ、以上だ』

一方的に話を終わらされ、通信を切られる。青年は、ただただ呆然とするしかなかった。司令部の者達——少なくとも指揮官には、自分の存在など最早危険人物一步手前、厄介者でしかないという事実を突き付けられたも同然だった。冷たい現実が、青年の思考を、視界を暗く昏く蝕んでいく。

「……くそう。くそ、たれが」

眩きが絞り出されるように青年の口から漏れる。先の通話の間もたった今も、人形からの射撃が止むことはない。どういふつもりなのか、幸いな事に彼との距離を詰めている様子は無かったが、いつ変化を起こすのか分かったものではない。



只一つの武器であるM110は撃てなくなってしまい、纏う鎧も弾丸を防げていないこの状況下、青年にとつて今この距離で構えている盾こそが唯一無二の命綱に等しかった。その盾でさえもいつまで保つのか分からない以上、何か行動を起こさねばと青年は焦りを募らす。

「どう、すりや良い。何が、出来るんだ。何が、あるんだ」

極限状態でろくに働かない思考をフル回転させ、打開策は何か無いかと身を屈めながら青年は辺りを見回す。しかし目につくのは第二陣と戦闘が始まる前、先程見つけた廃墟のみ、しかも今の青年の位置からはそれなりに距離が離れている。

「移動するまでに包囲されたら終わるし、逃げ込めたってあんなボロ家なんかすぐに制圧されちまう……」

何か、相手の目を塞げて、時間を稼ぐ手段を。ギリリ、と歯を噛み締めた青年の手が、腰の右側に付けられた何かに触れる。視線を向けると、小型の水筒のような物体がいくつか括り付けられていた。輸送ヘリからの降下時に、自分で腰に取り付けたのを青年は思い出した。「確か、銃を貰った時に一緒に渡されたんだっただけか」

緑髪ツインテールの少女が『普通の人間なら余程大丈夫だとは思うけど、あんたはなんかやらかしそうだし、念のために渡しておく』と心配なのか嫌味なのかよく分からない言葉と共に渡してきたものだ。「やらかした訳じゃねーし、っーかあいつの武器がやらかしたようなもんだけどさ……!」

文句を言いながらも青年がそれらを腰から取り外して眺めると、それぞれには何やらマークが描いてあるのが確認出来た。それぞれのマークの受けた説明を、必死に思い出す。

「……説明を、信じるなら。今、このタイミングで使うなら」

言葉と共に、選んだ一つ以外を腰に戻す。そして、その一つ……青白い落雷のようなマークの描かれたそのピンを引き抜くと、決死の思いで立ち上がり彼は思い切り投げ付けた。

「頼む、効いてくれ……っ！」

青年の祈りと共に、その物体が地面に当たった瞬間、鮮烈な輝きと凄まじい轟音が辺りを包んだ。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ9

「あいつジャムったのか？運がないな……焦ってるようじゃ排莖も上手くないだろうに、なあキャリコ？」

「MG5、違う、あれはジャムったんじゃない」

モニターに映る青年とのやりとりを行う指揮官を横目で見ながらやや憐れみを込めた口調で呟いた片目隠れの女性<sup>5</sup>に、緑髪ツインテール少女<sup>コ</sup>が返す。その表情は、非常に苦々しげに歪められていた。

「……しくじった。彼に、マガジン交換するときの注意点、ちゃんと伝えてなかったんだ」

「マガジン交換なんて、大した事じゃないだろうに。銃の整備や弾薬の確認はキャリコがやったんだらう？」

「それは、そうなんだけど。あのマガジンは、装填前にやらなきゃいけない事があるの。私が、ちゃんとやっておけば……せめて一言、伝えておけば」

俯き、後悔の言葉を吐くキャリコに、何と声を掛けたものかとMG5は逡巡する。あの銃のマガジンが少々特殊なのは見てくれからもわかるが、そこまで極端な物だったか？とMG5は考える。

「ま、悔やんでも仕方はないだろう。……実際、彼は運が無かったんだ、こんな所に来てしまったからな」

ポンポン、と肩を叩きながらMG5は慰めの言葉をかける。後半の言葉は、きこえることがないように、囁いてだが。

「……よろしかったのですか？」

「何がだよ」

画面に移る鎧姿の青年との通信を一方的に打ち切った指揮官へ、赤コート<sup>エ</sup>の女性<sup>シ</sup>が言葉は遠慮がちに、だが鋭い視線で訪ねる。対して、問い返した指揮官の表情はどこか薄く笑っているようにも見え

「確かに彼は確かに身元経歴、一切が不明の人間でしょう。ですが、何も騙し討ちのような形で戦地に送り込んだ挙げ句見殺しにするのは如何かと」

「なんだ、文句があるのか？ならば奴を送り込む前にそうと言えば良かったじゃないか。言うなればリーエン、お前も同罪じゃないのか、ん？」

どこか馬鹿にするような口振りに、リーエンは歯を噛み締めてから反駁した。

「それはっ……いくらなんでも指揮官がその様な判断を、指揮を下す筈がないと考えていたからです。まさかRIPPERやVESP IDの射撃で穴の空くような、ただただ重荷にしかならない鎧を与えて安心させるだけさせて、ここ最近鉄血の出現報告のあった地点に向かわせる等と誰が考えますか！」

「あれは俺も予想外だった。鉄血のデッドコピーではない、ちゃんとした正規軍が運用する装甲鎧。それを知り合いから貰ったはずだったんだがな……ふん、全く運のない奴だ」

「それなんだがなボス。あんた、貰ったと言ったがどこで貰ったんだ？あんな代物、少なくとも貰ったで済ませられるようなもんじゃ無いだろうが」

鼻を鳴らしながら答えた指揮官へ、サン<sup>ト</sup>グラス<sup>プ</sup>を掛けた女性<sup>ン</sup>が尋ねる。口調には見えないが、その視線にはどこか剣呑な色が見え隠れしていた。

「トンプソンか、修復は終わったか。何、お前らが気にする必要はない。こっちにはそれなりの伝がある、それだけの事だ」

「そうか。にしては一点気になる点があつてな『頼む、効いてくれ!!』ん？」

「あら？」

トンプソンが言葉を続けようとしたところで、スピーカーから青年の声が響き渡る。その部屋にいた者達が一斉に顔をモニターへ向けると、先程の通信時の混乱と恐慌ぶりから一点、覚悟を決めた口調の

彼が何かを鉄血の人形達へと投げ付け、自身は徐に手に持った盾を真正面へと掲げたのだ。

「あん？あいつ、一体何を投げて」

「皆、目を閉じて」

訝しげに画面を眺める指揮官を余所に、キヤリコがよく通る声で警戒を促す。瞬間、画面を眩い閃光が覆い尽くすと共に耳をつんざくような音がスピーカーから溢れ出た。

「ぬおああああお……」

「キヤリコお……、目だけじゃなく耳も塞ぐ指示が欲しかったぞ……」  
「ご、ごめん」

ろくに目も耳も対策をしなかった指揮官はモニター前で悶絶し、その他の面子も両耳を抑えて苦しむ羽目となった。恨めしそうに見据えるトンプソンにキヤリコはばつが悪そうに謝る。

画面、スピーカー越しですら絶大な効果を見せたその威力をモロに受けた鉄血人形達は機能不全に陥ったらしく、青年が盾を抱えながら走り出すのを追い掛ける者は一体たりともいなかった。

「す、スタングレネードか……一体誰があいつにそんなもの渡したんだ！」

「私ですけど。人間用の武器と一緒に埃被ってましたので、誰も使うことはないだろうと」

ようやくスタングレネードの影響から脱して辺りを睨み付ける指揮官に、キヤリコがしれっと返す。少なくとも、トンプソンに謝った時のような申し訳なさはその表情には微塵も無かった。

「だからってわざわざあいつに渡す必要は無かっただろうが、何を考えてるんだお前」

「本意では無いとはいえ、グリフィンの為に命を掛けて戦いに赴くのですから、これくらいのサポートは必要かと」

「あのな、だからあいつにはそんな配慮は」

「では指揮官、現状ですら埃を被るほどの無用の長物をこの基地に置いておいて他に誰が使うのですか。人形は専用の物がありますし、ここにいる人間は非戦闘員ばかりですが。指揮官が前に出て投げます

か？」

キヤリコの反論に指揮官は一瞬頬をひくつかせるが、少しして鼻を鳴らすと改めて画面へと向き直る。

「キヤリコてめえ覚えてろよ……チツ、まあいい、それよりも状況はどうなった。あいつはどこに行っただ」

「あの廃屋に逃げ込んだようですね、今カーキ色の装甲が扉の奥に消えるのが見えました」

指揮官の問いに何事も答えるリーエン。だが指揮官から見えない位置でグッドサインがキヤリコへと向けられていた。それは他の人形達も同様で、キヤリコも真顔で腕を組みながら親指を立てる。

「廃屋にい？そんなところに逃げ込んでどうする気だ、時間稼ぎにしかならんだろうに。鉄血達には気付かれていないようだが、それも時間の問題だ」

指揮官の言葉通り、機能不全は一時的なものだったのか画面内の鉄血人形達は辺りを見回しながら銃を構え直す。廃墟を目指す人形はいないものの、直に搜索対象に含まれるだろう。

「ここからどう立て直してみせるのか、楽しみだよ全く」

言葉とは裏腹に愉悦さの欠片も見せない指揮官。周りの人形達も、心配そうに画面を見つめる。

「ふむ、何が楽しみなのかね？」

突如、重みのある声が部屋へと響き渡る。全員がその声の主へと顔を向け、その怪訝な表情を一変させ――。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ10

「つはあ、はあ、はあ……着いて、きては、ない、よな？」

ほうほうの体で廃墟に逃げ込んだ青年は、肩で息をしながら物影から外を振り返る。スタングレネードの影響から脱したとおぼしき鉄血人形達が青年の姿を探しているのかキョロキョロと辺りを見回している様子が見えたが、彼が廃墟に逃げ込んだ事を認識した個体はいないようだった。

「中もとりあえずは、大丈夫、そうだな……うつ、げほっげほっ……はー、ふー」

屋内も危険がないことを確認した青年はヘルメットを外して深呼吸をするが、埃を吸い込んだのか噎せこむ。盾を置き、手で口を覆ってから改めて息を整えると、そこで青年は屋内を見回す。

「滅茶苦茶ボロボロ、だな……」

いつから人が住んでいないのか、あちこちに砂や埃が積もり、さらに銃撃戦でもあったのだろう、壁の至るところに銃痕が穿たれている。住居というよりは小屋といった風情の部屋はベッドと小型の箆筒位しか家具はないが、そのどちらもが朽ち果てていた。

窓は完全に破壊されそこから陽光は差し込んでいたものの、全体には薄暗いという印象を彼に与える。また床には何やらあちこちに膨らみがあったが、埃が積もっており青年には判別は不可能だった。

「あんだけ埃だらけだと触りたくもないけどさ……にしても、何とかここに逃げ込んだはよかったけどさ、ここからどうしょ。いくら撃てなくなったとはいえ、銃をあそこに置いてきたのはまずかったかなあ。ほんとに送ってくれんのか知らんけど、何とか時間を稼がねーと」

腰に付けられた残り一つの小筒以外はほぼ完全に丸腰状態となつてしまった事を後悔しつつ、盾とヘルメットを置いてから何かめぼしい物、武器として使える物はないかと暗い中で目を凝らす。

「……お？何だこれ」

すると、埃の中から細長い筒とも棒とも取れるような物が空中に突き出ているのが見て取れた。特に深くは考えず、青年はその物体を掴み引き上げる。

「う、わ……なんだこれ、でつかい……銃、いや銃なのかこれ。ライフルともまた違うみたいだけど」

彼が掴んでいた物は、全長1メートルはあろうかという程の細長い銃だった。先程まで使っていたキャリコ<sup>M</sup>から渡された銃と比べて明らかに長大、重厚、かつ複雑そうな見た目のそれに持ち上げた青年本人も顔を引き攣らせる。

「こ、こんなの俺に使えるのかよ？ていうかそもそもなんでこんなもんが置いて……ひっ!？」

口をついてでた疑問と共に銃のあった場所を見て、青年は思わず息を飲んだ。五本の細長い指が、そこに見えたからだ。身体の中を冷たいモノが流れ落ちていくような感覚を味わいながら、見たくないという思いとは裏腹に視線はその先を追っていく。

そして、彼は見つけてしまった。

「に、人間……っ死んでる!!」

床に仰向けとなり、眠るように目を閉じて倒れている、長髪のポニーテールの見た目幼い少女がそこにいた。

「っ……ぎっ、ぐ、ふ……!だ、駄目だ、叫んだら駄目だ……!!」

凄まじい動揺と圧倒的な恐怖で叫びたくなるのを、すんでのところで呑み込み歯を食いしばる。今ここで叫んでしまったら一貫の終わりだと言ったことを、混乱する頭に何とか言い聞かせる。そうしてまた呼吸を整えてから、青年は視線を動かない少女へと向けた。

埃だらけの服はあちこちが破れ、肌は砂まみれ。黄緑色の髪の毛の先は黒いゴムで縛られているが、それらも凝視してようやく分かるほどの物だった。そして、腕は左腕が肘から先がなく、足も右足の外側



が抉れてしまっている。

「な、なんで、こんな年端もいかない少女が、こんな……むごい、むごすぎるだろ……って、あれ？」

眩いてしまってから、青年はあることに気付いた。

「ちよつと、待てよ。ほんとに、人間……なのか？」

惨状とも言うべきその姿に、青年は違和感を覚えた。遺体に埃が積もるほど時間が経っているであろうにも関わらず、何故少女の身体は腐り朽ちていないのだろうか、と。

意を決して青年は少女の左腕の側まで行き、その切断面を確かめ……。

「……や、やっぱり、人形かよ」

そこにあつたのは、赤い血を滴らせる肉でも身体を支えるべき骨でもなく、見た目に若干の差異はあれども、あのととき司令部でサングラスの女性に見せられた光景とほぼ同じ、人工の筋肉と鈍色の部品だった。埃がついて色は大きく変わり果ててはいるが、人間じゃないということが分かった事で青年にとっては些末な出来事であった。

「なあんだ、ビビらせんなよほんと、糞……マジで人間が死んでんのかと思っただじゃねーか。てことは、この銃はこいつが使ってた武器って事か」

悪態をつきつつ、ようやく多少なりの安心感を得た青年は改めて今自分が抱えている得物に視線を向けた。本当にこんな少女がでかい銃を扱っていたのかと疑問には思ったが、それ以上の疑惑が青年の中に沸き上がり、打ち消した。

「ちよつと待てよ……う……こいつ、人形ってことはあそこの奴等の仲間、だよな？」

少女の残った右腕の袖には、先程までいた司令部にも掲げられていた狗鷲のエンブレムが付いていた。間違いなく、グリフィン所属の人形で間違いはないだろうと青年はあたりをつける。

「だとしたら、なんでこんなところでこいつは放置されてるんだよ。有り得ないだろ。あの司令部から、大して離れていないっていうのに……いや、有り得ない、有り得ないだろ」

輸送ヘリで三十分も掛からないほどに近い距離だと言うことは、青年自身身を以て体験している。目と鼻の先とも言おうべきこのような近場に戦力となりうる味方を捨て置いているというのが、青年にはどうしても理解出来なかった。

いや、青年は気付きたくなかったのだ。その事実には。

「……有り得ない、はずだけど。まさか、見捨てられた、のか」

そうでなければ、このような近いエリアに放置、否、破棄されているはずがない。青年は、自分の中で組み立てられた結論に、吐き気を覚えた。

「理由なんて知らねーけど、つーかそもそも有り得ない話だけど、あいつは、こいつを、見捨てたんだ。戦って、傷付いたこの子を」

明らかに戦闘で失われたとおぼしき右腕に、弾丸で抉られた足がそれを示していた。そしてそれは、彼自身の状況をも示唆していた。

「……あいつは、俺を助けるつもりなんて、端から無かったんだ。見殺しに、するつもりなんだ……っ!!」

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ11

その言葉を吐き出してしまった事で籠が外れたのか、青年の口からは止めどなく言葉が漏れ出す。

「ああ、そういう事かよ。そう考えてしまえば納得がいくよ。あいつ、いやあいつらは最初からそもそも生かして帰すつもりが無いからこそ、見た目だけは大層な装備を俺に渡してこんな所に一人放り出して、実際には銃は簡単に撃てなくなるし鎧も兜も簡単に貫通するし。

……あだからあいつ最初の奴等を倒した時に意外とやるなとかほざいたのか、あわよくば最初の時点で俺を死ぬことを望んでたんだな」

呪詛のごとき恨み節は、どんどんと吐き出される。

「こんだけ近いにも関わらず助けに行くには時間が掛かるとかほざいてさ。時間が掛かるんじゃない、そもそも助けに来る気が最初っから無かったんだろうが。そりやそうだよな、自分達の仲間の、身内の筈の人形すらこんな形で見捨てているんだ、完全な部外者の俺なんて存在自体が疎ましいモノ以外の何物でもなかったんだろうな……」

おい指揮官、聞こえてるんだろ？ どうせ安全な部屋で人形達と一緒に俺の事を嘲笑ってるんだろ？ 気分はどうだよ、この下衆野郎っ！」  
そこまで言ってから、青年は己の耳に掛かっていたイヤホンを驚掴みにすると、力の限り壁へと投げ付けた。ガギツ、と嫌な音を立ててぶつかる、そのまま下に落ちて舞い上がった土埃の中に埋もれる。

「……何なんだよ、この世界は。いくらなんだってさ、あんまりだろ、こんなの」

そう呟くと、青年は力なく膝から崩れ落ちる。その視線の先には、彼のすぐ傍で横たわり、動くことない少女の人形があった。

「……いくら人形だからってさ、いらなくなったら、用済みになったら、見捨てるのかよ。あいつらみたい、人間のよう感情があったら、ただの道具のように捨てるのかよ」

先程力任せにイヤホンをぶん投げたその手は、少女の顔に積もった砂や埃を優しく払っていく。

「まるで寝てるみたいだな……。腕とかこんなボロボロになって、痛く無かったのか。動かなくなる最後の時は、怖くなかったのか。人形も、人間みたいに恐怖を感じるんかね？あいつは痛みは無さそうだったけど」

汚れの無くなったその顔は、青年の言葉通りまるで眠りについていくかのように、穏やかな表情を浮かべていた。薄暗い廃墟の中にあつてなお、その白い肌はどこか輝いてみえた。

「……誰か、悪用したりしない優しい人に、見付けてもらえると良いな」

少しの間それを優しげな目で眺めていた青年は、鎧の胴脇部分にある紐へと目を向けた。

戦場に送られる前、指揮官から鎧の説明を受けた際のあるやり取りが彼の脳裏に蘇った。

『まあとりあえず俺でも多分着れて動ける、つてのは分かったけどさ。

……この紐はなんだよ？飾りって訳じゃ無さそうだけど、いくらなんでも鎧に対して違和感が凄くね？』

『ん？んーと……鎧を着ている状態でそいつを引くと、パワードスーツについてる装甲が全てパージされる、らしい』

『らしい、って曖昧だなおい』

『やった事ないからな。やってみるか？パージした後の復元方法は全く知らんが』

『いや誰がやるかよ！パージしたが最後使い物にならなくなるじゃねーか!!』

『まあそうだな。とりあえず暑くなったりやばくなったら引いてみると良いぞ』

『いやどう考えても引いたら死ぬだろ！むしろ誤って引かないように注意しんといかん奴だろ！』

「……ちっ、あのヤロー、本当は最初から分かっていたんだな。この装

甲が簡単に貫通するような代物だったって事を。こんなものデッドウェイトにしかならないから装甲をパーズしろってか。ほんとうくな死に方しねえぞあいつ」

舌打ち混じりに悪態をつきつつ、青年は紐へと指を掛け、

「お兄さんは……優しい人じゃ、ないの？」

「んはぎゅっ!?ひ、ひた、ひたかんら……!!」

突如聞こえた声に、膝をついたまま飛び上がり驚くという奇妙な芸当をしてのけた。そしておもいつきり舌を噛んだのだろう、涙を流しながら悶絶する姿がそこにはあった。こんな状況で叫ばなかったのは、舌をかんでという悪運の極みともいえるものだっただろうが。

「……だいじょうぶ？」

「ら、らいじょうぶ……っていや待ってくれ、生きてたのか!?動けたの!?」

完全に動かないかと思っていた人形が瞼を開け、掠れ掠れながらも喋っているという事実完全に度肝を抜かれたのだろう、青年はかなりきよどつた様子で顔を覗き込む。少女の紅い瞳が、その黄緑の髪の間から覗く。

「……動けは、しないよ。もう、ほとんど、エネルギーないもん。喋れるのも、ほんの少しだけ」

「な、なんで」

「ずっと、スリープモードに、入ってたの。どれくらいかは、記録していないけど。誰か、助けに、来るかなって」

小さく、悲しげに笑ったその表情に、青年の心がズキンと痛む。この少女の人形は、やはり見捨てられたのだと。そして彼女自身、それを理解はしていながらも、ここで、ずっと待っていたのだ。何日も、何週も、何カ月も。

いつまで経っても永遠に来る筈のない、仲間達を。

一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ12

……ピピッ

『なんですか、連絡事項?』

……カタカタ、ピッ

『え、装甲兵がPROWLER部隊を撃破した後にVESPID、RIPPERの部隊と交戦していたけど逃げた?』

……ピピ、カタカタ、ピピピッ

『しかも、装甲にはダメージが通り、武器も故障の様子あり……な、何なのそれ、そんな事あるの?仮にも正規軍の装甲でしょうに』

……ピーピーピー

『で、挙げ句の果てに閃光手榴弾スタングレネードを投げ込んで、こちらが動作不能の間に逃げた、と。逃げ込んだ先は恐らく近くの廃屋……』

カタカタカタカタ……

『完全に袋小路の鼠じゃない。時間を稼ぐにしてももつとやりようがあるでしょうに。素人ってレベルじゃない』

……ピピピッ

『とりあえず監視だけはしておきなさい。ここまで来たのだからそちらに行くけど、武器もなし、装甲も役立たず、こちらの害にはなり得ない。殺すのは情報を得るだけ得てからでも遅くないわ』

……ピピピッ、ピー

『グリフィンの手の者なのか正規軍の新兵なのか知らないけれど、何を考えているのかさっぱりだわ、ほんと……』

「……そう、か。今の、今までか」

「そ。でもお兄さん、グリフィンの人、じゃないでしょ?」

「……申し訳ないけど、全然関係ない。ごめん、な。期待させちゃつて」

「ううん、いいよ」

くすりと笑うと、少女は目線だけを青年の手へ……否、手中の銃へ

と向ける。先程、青年が埃の中から持ち上げたそれを。

「それ、使いたいの？私の銃、だよね」

「え、あ、ごめん。勝手に取って」

「いいよ、別に。使い方、わかる？」

「……わからん、って言ったらどうする？教えてくれるのか？」

「教えてあげる」

「マジかよ」

あっけらかん、とした少女の答えに青年は思わず呟く。まさか、教えてもらえるなどは露にも思っていなかったようだ。

「え、いやでも良いのかよ。俺みたいなのに使わせて」

「……お兄さん、悪い人じゃ、なさそうだし。それにきつと、あんまり時間、ないでしょ？」

「え、時間……っ!!」

あまりに衝撃的な事態に青年は自分の置かれている状況をすっかり忘れていた。こうしている間にも、鉄血人形が廃墟を目指して接近しているのかもしれないのだ。むしろ、今このときまで来ていない事の方が奇跡的だった。

慌てて青年は外の様子を伺いに立ち上がる。青年が幸運なのか人形達がポンコツなのか、いまだに廃墟目掛けて進軍してくる様子は見られない。

「そ、そうだった。すまん、教えてくれ、どうすれば撃てる？」

「難しく、考えなくても、だいじょうぶ。片手で、銃の後ろを押さえて、もう片手で、引き金を引くの」

「……それだけ？」

「うん。引き続けば、引き続けた、だけ撃てるよ。でも、反動が、凄いから、台みたいなのが、あるといいよ。あと、音も凄いから、耳当てが、あるといいよ」

台と、耳当て。そんなものどこにあるんだ、と青年は辺りを見回す。無論そんな都合よく廃墟などに用意されてるはずもない。だが、現状探す時間はない事を分かりきっている青年は頷く。

「台と耳当てだな、分かった」

「あと……私の左ポケットに、替えの弾倉が、あるの。弾が無くなったら、それに替えて」

「ポケット……んつと、この箱みたいなのか」

少女の言うとおりポケットを探ると、薄茶色の箱が出てきた。見た目のサイズに反し、どれだけの弾丸が詰まっているのか、それはかなりずっしりとした印象を青年に与えた。

「そ。弾が切れたら、それを、取り替えて、ちゃんとはめてから、レバーを引けば、装填されるの」

「なるほどな。……でも、その、いいか？」

少女の説明に頷いた青年だったが、そこでふと遠慮がちに尋ねる。その目は、どこか後ろめたい色を含んでいた。

「どうしたの？」

「俺は、嬉しいんだけどさ、いいのかよ。もう、エネルギー残ってないって言ってたのに、俺なんかに使ってくれて、教えてくれてさ」

彼女がスリープモードに陥っていた理由。絶望的といえども、一縷の望みにかけて保っていたエネルギーを、全くの赤の他人に使ってしまっているのか、と。そんな青年に、少女は紅い目を細めながら微笑む。

「お兄さんは、生きたいん……でしょ？」

「そりゃ、そうだけど……でも、俺が今どういう状況かなんて、一言も」  
「わかるよ。今ここが、どんなところかって。あと、どうせ、仲間は助けに、来ないって。……私はこのまま、ここで朽ちる事も」

「だけど、と少女は続けた。」

「ずっと、転び続けてきた、私だけど。最後くらい、誰かの為に、役に立ちたいな、つて。」

「きつと、私は、役立たずだから、見捨てられたけど、それでも、最後に少しでも、誰かの為に、役に立てたら、いいなって」

笑顔の少女の頬を、透明な雫が伝う。

「だから、最期に、お兄さんに会えて、良かった。その銃を、お兄さん



が生き残るのに、役立てて、もらえたら、嬉しいなって」

「……『最期』、か」

悲壮とも言うべき彼女の言葉に、青年は手に持った銃へと視線を向ける。

（そもそも、俺……これをつかって生き残ったとして、どうするんだよ？）

青年の中で、そもそも前提が揺らぎ始める。

（ここは、俺が知ってる平和な2018年の日本じゃない、四十年以上もあとの世界なんだぞ。勝手なんて全くわからない、それどころか人形が戦争をしているような世紀末世界なんだぞ）

銃を持つ腕が、震え出す。

（外のあいづらを何とか倒したとしても、グリフィンの奴らはこっちの状況を確認出来る手段を持ってるみたいだ。もし俺が生きてるって知ったら、下手すりゃ口封じに殺しにくるかもしれない。外の人形達を頼るのは論外……意志疎通が出来るかすら怪しい。地理も分らん、そもそも常識が通じるかも怪しい。どうすれば、どうすればいいんだよ……!）

暗い表情の中、思考の海に沈み掛ける青年。

その顔に光を差したのは、少女だった。

「……うん、最期だよ。だから、頑張つて、生き残つてね。私の分も……って、変だよ、私人形なの、に」

青年は、おかしそうに笑った少女を見る。

（違う、違うだろ。生き残った後どうすればいい、じゃないんだ。何をしたいのか、だ。ここで生き残つて、俺が何をしたいのか、するべきか、じゃねーのか？）

彼のなかでぐるぐると渦巻いていた思考が、パズルをはめるかのようになりピタリピタリと形をなす。

（この子だってこんな最期なんて、嫌だろうに。こんな最期を迎える為に作られた訳じゃないだろうに。俺は嫌だ。いくら人形だからっ

て、目の前でこんな最期を見せられるのは御免だ。

だったら、俺は、俺は)

「そうだ。死ぬのなんてクソクラエだ。俺は生き残る。生きて君を助ける」

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ13

はつきりと言い切った青年は、自分の身体の中に炎が通ったかのよ  
うな熱い感覚を覚えた。銃を握る手に、力が籠る。

先程までは全く扱える気のしなかったそれが、どうしてか今は簡単  
に撃てそうな気が彼にはしていた。それは少女から説明を受けたか  
らか、それとも。

「え……う？」

「……チョロいもんだよほんと、俺って人間はさ。見たことも聞いた  
こともない場所でほいほい口車に乗せられて戦場に送られ、信用も出  
来ない相手から渡された武器と防具を愚直に頼りきって、痛い目を見  
て、勝手に絶望してさ。それでも生き残れる希望に、すがり付こうと  
してる」

愚痴を並べる青年だったが、先の時とは違いその口調はまるで友人  
に軽口を叩くようなもので。

「……お兄、さん？」

「大丈夫。君のその想い、受け取った。だけど、最期だなんて言わない  
でくれよ」

だがその言葉には、どこか力が籠っていた。

「もう、無理だ、よ。誰も、たすけ、になんて」

諦めの色を見せる少女のその言葉に青年はかぶりを振る。少女が  
見たその目には、先程までの心配そうな色は微塵も見られない。ある  
のは、強い決意の意志。

「俺が君を助ける。君から借りたこの銃で生き残って、君を直せると  
ころまで連れていくよ」

「……え、でも」

「方法なんて知らない、場所なんてわからない、そもそもそんな事が出  
来る確証すら無い。ないない尽くしのオンパレードだよ、だって俺こ  
んなところ来たことねーし、そもそもこの時代の人間じゃねーから  
さ。だけどな」

そこで、青年は少しだけ笑みを浮かべる。

「とりあえず今やるべき事はあるし、やりたい事は今見つけた。やるべき事は外のやべえ奴ら<sup>鉄血人形</sup>を倒すことで、やりたい事は君を助けて直す事」

青年は少女の右手を握る。埃まみれのその小さな手を、大事そうに。

「だから、待っていてくれよ。時間は掛かるかもしれないけどさ。俺は君の言葉を信じる。君は、俺の事を信じてほしい」

「……」

少女は青年の顔を見つめたまま、少しの間黙りこくる。そして、口を開き。

「……おにいさん、て、変なひと、だね」

「ぐはっ!？」

待っていたのは辛辣な言葉だった。

「でも、いいよ。まっ、てる。おにい、さん、が、わた、しを、さ、いきど……して、くれる、こと」

ただ、その後に続いたのは、少しだけ希望の色が混じった笑顔と共に届けられた、仄かな期待。エネルギーの限界が来たのだろう、言葉は先程よりも途切れ途切れとなってきた。

「ああ。……だから、少しの間だけ、お休み」

「う、ん。……おきれた、ら……おに、さんの、なま……え……」

少女の最後の言葉が紡がれる前にととう限界が来てしまったのだろう、瞼は閉じられ紅い瞳が隠れる。青年がここに逃げ込んだ時と同じ静寂が辺りを包み込む。違うのは、青年の手に握られた得物とその目付き。

「……そっか。名前、聞いたときや良かったな。ごめん。後で教えてくれよな。

……で、だ」

最後の台詞に若干の後悔を滲ませ、少し謝った後に青年は一瞬だけ外の様子に神経を向ける。彼がここに入り込んでからそれなりの時

間が経っているが、未だに廃墟へと攻め入ってくる様子はない。「どういふつもりなのかは知らねーけどさ。俺に時間をくれるってんなら、せいぜい有効活用させてもらおうよ」

呟くと、青年は鎧の胸脇部分の紐へと指を掛ける。先程は少女に話しかけられて引くのを中断したそれを、躊躇なく引き絞った。瞬間、ギヤリツという甲高い引つ掻くような音がしたかと思うと、カーキ色の大小様々な形をした装甲がバラバラと剥がれ落ちていく。ガランガランと大きな音を立てて床に落ち、土埃を巻き上げる。

「ぶえっ!」

慌てて青年が手で口を覆う。その間も腕部や脚部の装甲が外れ、鎧に覆われていた青年の身体が姿を現していく。だがその姿は鎧を着込む前の姿とはやや異なっていた。

両の手の甲全体に黒く薄い金属が張り付き、それが肘を伝って肩まで届く。足も同様に踵部分を金属が包み、膝裏を介して腰を支える。それが背中できつり、まるでそれ自体が骨格を成しているかのような印象を与える。身体の各部に固定するためなのか、手首と足首、腰の部分で金属がぐると一周巻き付いていた。

「これが、パワードスーツって奴か? 思ったよりシンプルなんだな」

土埃が晴れたあと、部屋の裂け目から射し込む陽光で己の姿を再確認した青年はそう呟く。脆弱とはいえ相当な重さの装甲を支え纏っていたのだ、それ相応にガツシリした作りを想像していたのだろう。ただ、装甲が外れた事で先程よりも遥かに動きが軽く、スムーズに動作出来るように青年は感じた。

「でも、よくよく考えてみればこの盾だって簡単に持てたし、銃なんてそれこそ余裕なんだよな。パワードスーツっていうだけの事はあるな……つと」

頷き一人呟くと、埃を舞わさないようにゆっくりと銃を床に置いてから青年は盾を持ち上げ眺める。相当な数の銃弾を受け止めたはずだが、その表面には視認出来るほどの傷は一つも認められない。

片や先程は鎧だった装甲は、と見ると凹みはおろか弾がめり込んで

いたり酷い部分は貫通していたり、とその差は火を見るよりも明らかだった。

「……盾がちゃんとした出来で助かったぜ、ほんと。で、ヘルメットは……と」

一旦盾は床に置いた後、彼はその横にあつたヘルメットを掴み取る。目の右側部分に弾丸が突き刺さっており一瞬戦慄させたが、装甲を突き破ったのではなく隙間に入り込んだだけでこちらも見た目はほとんどダメージがなく青年を安堵させた。やはり、鎧だけが柔弱な装甲を使われていたようだ。勿論それだけでも彼にとつては致命的なのだが。

「このヘルメットがさつきも耳当て代わりになつてたよな、これを使えばいいか。後は、撃つのに固定する為の台みたいな奴だったけか、それがあれば……うん？」

何か代用になるものはないか。青年があちこち見回したところであることに気付く。

「そーいやこの盾……へりに乗つてた時は気を向ける余裕なんてなかったけどさ、なんで下の方にこんな凹みが最初から作られてるんだ？それに、上の方……形的には持ち手つぽいけど、持ち手は普通に盾の裏に持ち手あるのに、なんだこれ？」

先程置いた盾の構造に青年は疑問を抱き、盾を裏返すと。

「……支柱？いや、つかえ棒みたいな物か？」

盾の裏に埋め込まれているような形で納められていた棒を外す。盾の三分の一ほどの長さのそれを、同じく盾の裏の下部に作られている円形の窪みへとしっかりと嵌め込み立てたまま床に置く、すると。

「……これだ」

見てくれは全然違えども、まるで戦国時代の木盾を彷彿とさせる置き盾が部屋に立った。盾の裏側に回り込み少し屈むと、上部の隙間から盾の向こうを覗き込む事も出来るではないか。

青年は確信する、この盾は単に持って身を守るだけの代物ではない、地面に設置して壁として身を隠し、隙を見て反撃に転じる事も可

能なのだと。

「これで、耳当てと台になる物は揃ったか。……ここに逃げ込んだのは、正解だったな」

青年は目を閉じ、握り拳を作って胸に当てる。少し前まで、敵に追われ情けなく助けを求めて絶望していた姿はそこにはなかった。

命からがらにやってきたこの廃墟で、態勢を整えられたことが彼自身信じられなかった。だが、運が良かったのか鉄血人形は追撃を行わず、恐慌状態だった彼のメンタルは落ち着きを取り戻し。身を守る事の出来ない装甲を外した事で、逆に動作は身軽となった。盾とヘルメットは、それぞれ銃を撃つにあたって単なる身を守るためだけでない機能を持っている事に気がつけた。……そして、何よりも。

「この子に、会えた。この武器を、貸してもらえた」

それが一番、青年の中で大きなウェイトを占めた。この世界の非情さを突きつけられた、それでもその中で信じられる物が、自分の生きる目標が出来た。戦い、生き残る覚悟が出来た。

「……ありがとうな」

今はもう動かない少女に小さくお礼を述べ、青年はヘルメットを被る。棒を取り付けたまま盾を左手で持ち上げ、右手で床上の銃をゆっくりと掴む。

「……行くぞ。やってやる、絶対倒すんだ！」

そして、青年は駆け出した。

その言葉は、ヘリから降下した時の自棄混じりの物とは違う、覚悟に溢れたものだった。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ14

「つと、人形達は……うわ普通にいたし!？」

廃墟から飛び出した青年が即座に周囲に目を向けると、先程まで交戦していた鉄血人形達は廃墟からやや離れた場所に集まって各々違う方向を監視しているように見えた。分散して辺りを確認している訳ではないのだろう、数は九体から増減していない。先程撃破された一体も倒れた姿そのままに放置されている。

「周りは……っし、いねえ」

最早青年の事を脅威外と認識しているのか、どの個体も廃墟に視線を向けている者はいなかった。念のため辺りを確認して他の人形がない事を確信した青年は、先程準備した盾を地面へと突き立てる。

『……!』

そこで初めて青年が外に出てきた事を認識したのか、人形の一体が青年の方に顔を向ける。それと同時に他の人形達も一斉に青年の方向を向くと同じタイミングで走り出した。

「通信かなんかでやりとりしてんのか、ありや……つと、片手は銃身後部を押さえて、だったな」

だが、先程の戦いとは違い、青年に恐怖や畏れの念が湧いてくる事はなかった。冷静さの感じられる声で呟くと、盾の高さに合わせてやや屈み、膝を立てて地面へと付ける。銃身を盾の上部へと乗せ、少女の教え通りに銃を構えると、青年は狙いを一番手前にいるサングラスの人形へとつけた。右手の人差し指が、引き金へと触れる。

「準備は、オーケー……いっつけええええ!!」

そして、その引き金を引き絞った。

途端に銃口からは何発もの弾丸が吐き出され、銃口の先にいた人形へと突き刺さる。銃身からは次々と空薬莖が飛び出し、M110とは比べ物にならない程の振動、轟音が青年へと伝わる。

青年は慌てて引き金から指を離すが、既に何発もの弾丸の連射を貰った人形の腕は千切れ、サングラスは砕け散り、胸部はグシャグ



シヤになり液体と肉片、そしてパーツを撒き散らしていた。そしてその勢いのまま後ろに吹き飛ばされ、後方にいた人形を何体か巻き込んでくずおれた。

「……す、すっげえ威力だなおい。これ、機関銃か何かか？」

予想以上の破壊力に一瞬呆けるが、直ぐ様青年は次の標的へと狙いを定める。何体か地面へ倒れはしたものの、撃破出来たのは前面で肉盾となった一体のみですぐさま起き上がり再度駆け出す。

「けど、こいつならー」

続けて青年は数体が固まって接近してきた辺りへと弾丸を叩き込む。サングラスの人形もヘルメットの人形も、圧倒的な破壊力の前に物言わぬ残骸となりその身を地へ崩していく。その様は、僅か何分も前に重厚な装甲鎧を纏った青年を追い詰めていた様相からは決して想像のつかないものであった。

そこでようやく青年の新たな武器が先程の銃とは違うとんでもない威力である事に気付いたのだろう、残った五体程の人形達はバラけて接近を仕掛ける。

「うわやっべ……だけど、これくらいの数なら」

銃を構え直すと、青年は右前方から距離を詰めてきていた人形を撃破し、そのまま銃口の向きを少しずつ左へと変えていく。一気に掃射された人形達は成す続べなく、あるものはその場に崩れ落ちあるものは後ろへ吹き飛ぶ。そしてあるものは、威力に耐えきれずその場で碎け散った。

「おっふ、なんかこの銃の爽快感、癖になりそーだな……お？」

と、そこで青年の射撃が止まる。弾が切れたのだと何となく気付いた彼は、慌てる事なくその場にしゃがみこむと銃下部の箱を取り出し、少女から受け取った替えの弾倉をポケットから取り出す。初めての交換作業ではあったが戸惑う事もなく取り付けを終え、銃身横のレバーを引いて装填を完了させた。

「よっこらせと……生き残ってんのは、あいつか」

盾の影から様子を確認すると、脚部のみを破壊されたと思しきサン

ガラスの人形のみが一体、身体を起こそうともがいていた。他の人形は完全に機能を停止したのだろう、ピクリとも身動きをしなかった。

「なんか、トドメを刺すようであんまり良い気はしないけどさ」

少し表情を歪めながらも、青年は照準をその動いている人形へと向ける。

「あんたが逃げようとしてんのか、まだ俺を攻撃しようとしてんのか、それとも仲間に助けを求めようとしてんのか、俺には分からねーけど……悪いな。これで、終わりだ！」

そして、改めて引き金を引き、最後の一体を撃ち倒す。完全に人形の動きが止まった事を確認してから、青年は銃を地面に置いてヘルメットを外し息をつく。

「ふうー、これで何とかなつたか？……さて、と」

辺りに気を配りつつ、青年は先程まで自分がいた廃墟へと戻る。そして、少女の元へと駆け寄ると、すぐ側へと膝をつく。

「ありがとな。あの機関銃、本当に凄かったよ。簡単に人形達を蹴散らせてみせたぞ。役立たずだなんてとんでもねえ、あのクソツタレ指揮官は君を見る目が無かったんだ。さて、失礼するぞ……つとと、その前に」

青年は少女の近くで散らばっている装甲板の辺りに視線を向ける。そのすぐ側に、一本の小型の水筒にも似た物体が転がっていた。先程彼がパワードスーツから装甲を外した際に、一緒に外れた物だった。青年はそれを拾い上げ、ポケットへと突っ込んだ。

「念のため、持っていた方が良いよな。まだ何があるか分からんし。さて、よっ……と」

そして少女に断りをいれると、青年は少女の膝下と背中に腕を差し込み、ゆつくりと持ち上げる。所謂『お姫様抱っこ』で抱え上げた青年はそのまま外へと歩いていく。そうして廃墟の外へと出たところで、思い出したように青年は口を開いた。

「んー、いくらなんでも流石にこの子の銃を置いていく訳にはいかなーいよな……使い捨てな訳ねーし、そもそも申し訳が立たん」

そう呟くと、踵を返して青年は銃を置いた場所へと向かう。程無く

して辿り着くと一旦少女を慎重に銃の横へと降ろし、少女と銃、そしてその側で立たせたままの盾へと視線を交互に向ける。

「うーん……この子を背負って、銃を抱えると流石に盾まで持っていないのは厳しいな。ここに置いていくしかないか、この盾の防御性能は凄かったから正直惜しいけど。ヘルメットも、これだけ被って移動してたら変質者扱い待たなしだし置いてくか。後は、俺でも使える他の武器、出来れば手軽に使える奴を調達しとかねーとやばいよな。こんな所だし……お、あれ使えそうだな」

そして青年の目に留まったのは、先程の戦闘で一番最後に撃破したサングラスの人形、それが両手にそれぞれ持っている銃だった。所々が赤紫に彩られ、白色の角張った雫とも炎ともとれるような小さな刻印を刻まれたその片方を手に取ると、青年は虚空へと銃口を向けて引き金を引いた。

「これも引いてる間だけ弾丸が撃てるタイプなのかってもう弾切れたし。元々弾切れ寸前だったのか？でもこれどうやって弾倉交換するん」

ぶつぶつ呟きながら青年は銃の側部のボタンを適当に押す。と、ガシャリという音と共に

「……普通にはずせたな。ていうか変なところが外れたり壊れたりしなくて良かったわ、つーかよくよく考えたら壊れても他の倒れてる奴等の使えば良いのか。他にもいくつか持っていきたいとこだけど嵩張りそうだな……特にヘルメット人形の銃はでかいし。で、これが替えの弾倉かな。全部貰つとこつと」

完全に機能停止しているとはいえ、薄着ともいえるような姿をした人形の懐から全く遠慮する素振りも見せず、先程外れたマガジンと同じ物を拝借すると、一つは銃に嵌め込み、残った物を青年は先程とは別のポケットに突っ込む。

「使えそうなのはこんなもんかな」

そうして用が済んだ青年は改めて少女の元へと戻る。ポケットの中でガシャガシャと音がなり、顔を顰めた。

「んー、入れるポケット分けた方が良いんかね。ていうかこの銃はどうやって持っていていこうか、流石にポケットにや入らんしなあ、ズボンのベルトで括って行くか？いやでもそれだと直ぐには使えなくなるしなあ」

「あら、そんな事で悩む必要はなくてよ  
「え？」」

突如、凜とした声が辺りに響く。

左から聞こえた声に、青年が振り向く。

そして彼の目が、いつの間にか現れていた黒のエプロンドレスを纏った女性を捉えた瞬間。

「何故なら、ここで終わるのだから」

青年の左肩に、真紅の華が咲き、大地へと散った。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ15

「ぎ、ぐ、があああああああああ!!!?」

今までに感じた事のない圧倒的な激痛に、青年の顔がこの上ない程に歪む。銃で撃たれた事も身体に何かを突き刺された事もない青年にとつて、左肩に叩き込まれた一撃は想像を絶する程の苦痛をもたらした。

空を切るような叫び声と共に右手の銃を取り落とすが、構っている余裕はないのだろう、その空いた手で肩を押さえる。

「い、いぎい……あ、あが、あぎぎ……!!」

傷口から溢れだした鮮血が指の隙間から流れ、腕を伝い大地へと垂れ落ちる。青年の額には脂汗が浮かび上がり、目の端に涙が滲む。苦悶の声を漏らしながら、青年は視線を何とか前へ向ける。

「あらあら、とても痛そうですわね。その苦痛から楽になりたいですか?」

哀れむかのような言葉とは裏腹にその視線はどこか蔑みの色を孕み、そしてその気配は刺々しさを隠そうともしない。その左右に控えるように、単眼のゴーグルとマントを付けたポニーテールの人形が四体ずつ、紫の蛍光線を走らせた長い銃を携えている。そしてその人形達を護衛するかのように、身体の各部にプロテクターを纏い青年が地面に立てている物とはまた別種の盾を携えたツインテールの人形が左右に三体ずつ控えていた。青年の顔に、焦燥感が滲み出る。

「……楽に、ね。こんな糞みたいな、世界に楽な場所なんざ、ありそうにねえけどな」

「酷い言い様ですわね? 貴方もまたその世界の住人でしょように」

「へっ……住人は住人でも、何十年も前の、人間だけだな!」

「あら」

そして肩を押さえたまま、青年は足元に落ちた鉄血人形の銃を拾おうとしやがみこむ。だが、それを許さぬとばかりに即座に四発の銃声がこだまする。

「反撃を許すとも?」

「ぐ、うああああああああああ!!!」

銃を拾おうとした姿のまま、青年はその場に跪く。女性がエプロンドレス<sup>メイド服</sup>を捲り上げたそこには黒光りする四本のアームが現れ、それぞれの先端には銃が取り付けられていた。それぞれの銃口からは硝煙が立ち上っている。

青年は先程よりも大きな叫び声を上げた。それもそのはず、銃へ向けて伸ばしたはずの手と腕には新たに三発もの銃痕が穿たれ、それぞれの穴から血が噴き出していた。しかもその衝撃の余波で銃弾が命中した場所で腕がそれぞれ不可思議な方向へとねじ曲がり、力なくだらりと垂れ下がる。精神を灼き切られそうな痛みの中で、何となく青年は左腕が完全に使い物にならなくなった事を察した。

「全く、人間の身体とはこうも脆い物でしたか。今の一撃で完全に左腕の骨が砕けましたわ」

「ぐ、ううつ、い、われ、なくても、わかってらあ……っ!」

先程よりも酷い量の脂汗を流しながら、青年は視線を足元、そして後方へと向けた。拾おうとした銃にも弾丸は突き刺さり、無惨にもひしゃげてしまっていた。そして後方……少女には被害が及んでいない事を確認してから青年はほんの僅かに安堵し、改めてメイド服の裾を下ろした女性へとゆっくり向き直った。

「しかし、不可解なのは今の行動ですわ。これだけの人数差、そして実力差、更には貴方のダメージ状況からして、反撃ではなく逃走を選んだ方が余程まだ可能性があったのでは？勿論逃がすつもりは毛頭ございませんが」

そんな青年を不思議そうな表情で眺める女性。小首を傾げつつ呟くと、その頭に付けられたヘッドドレスが小さく揺れる。

「ぐ、くう……逃げられる、なんて楽観思考、持っちゃいない。あんたらを倒せる、なんて、自惚れても、いない」

「ならば何故」

「見捨てたく、なかったんだよ……っ。約束、したから、な」

激痛に顔を歪ませ、立ち上がれないながらも青年は真つ直ぐに女性を見据えた。

「見捨てる……まさか、そのガラクタの事を仰ってるので？」

「へっ……あんたらには、ガラクタでもな。俺にとつちや、大切な子だよ」

振り絞るかのような青年の言葉に。

女性は僅かに、表情を変えた。

「……理解が出来ません。その鉄屑は既に動くことはない。貴方が人形に偏愛でも抱くような狂人であるのならば話は別ですが、その様相は微塵も感じられません」

「たりめー、だろ。この子は、俺にとって只一人の、信じられる存在だ。グリフィンでも、おめーら鉄血とやらでもない、今この世界で、唯一信じ抜ける、相手だ……ぐううつ、俺なんかの為に、大切に大切に、節約してたエネルギー、つかつてな。機関銃の使い方、教えてくれたよ。見知らぬ俺を、生かすために」

状況は、圧倒的に女性側の方が有利なのにも関わらず。

その表情だけを見るのなら、形勢はどちらに傾いているのか端からは分からないようになっていた。

女性は明らかに困惑の表情を浮かべており、周りの人形達もどうしたものとそれぞれ顔を見合わせているのに対して、青年は襲いくる苦痛の中にも毅然とした強い意志を宿していたのだ。

「有り得ない！その人形はグリフィンの人形です、貴方もまたグリフィンのヘリから降下していた！その貴方がグリフィンをも信じないというのは」

「ああ、あいつら俺を殺す為に、放り込んだだけだ。俺の事なんて、厄介払いついでに……つぶ、あんたらの勢力を、少しでも削れりゃいい、便利な特攻兵にしか思た、つちやいねーよ。……この子とて、あの指揮官に、仲間に不要と、切り捨てられた存在さ」

「嘘だ！」

ジャキリ、と女性が先程と同様にエプロンドレスの裾を捲りあげる。周りの人形達も一斉に銃を構え、それらが全て青年の方を向く。だが、青年は動じる事はなかった。それどころか、僅かに身体をずらした。自分に向けられた射線から、背後の少女を庇うかのように。その所作を確認した人形達に、表情は変わらないながらも動揺が広がっていく。それは、先頭に立つメイド姿の彼女には特に顕著に現れていた。

「おいおい、嘘だつてか。そりや、あんたらからしたら、俺は敵だろーけどさ。つき、別に、あんたらにとって、不利益な事をべらべら、喋ってる訳でも、ねーつてのに」

「何なのですか……！貴方は、貴方は一体何なのですか！！本当にただの人間なのですか！？こんな言動、データベースのどこにも存在しない！！」

「存在、しない？そりやそうだろ、俺あこの時代の人間じゃ、ねーしよ」  
にたり。

痛みに耐えながら、そこで青年は笑みを浮かべた。

「新鮮か？40年以上も、昔からやってきた、人間との会話は。本来、この世界に、存在しない、人間とのやり取りは、データに保管、してねーのか？」

そりや、あるわけないよな。口には出さず、青年は独りごちた。

己は完全に、現在の存在なんかじゃないから。



一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ16

「40年前の人間、ですって？そんな、有り得ない……っ！」

「戯れ言、ね。わりーけど、こちとらこんな重傷負ってて、嘘や適当なこと、吐けるほど、余裕はねーぜ」

尽きる事のない激痛に歯を食いしばりながらも、青年の視線は真正面を見据える。既に彼の腕から滴り落ちた鮮血は、小さいながらも血溜まりを作りはじめていた。

「……ええ、だからなおのこと理解が出来ないのです。はつきり言っ  
てしまえば、今貴方は考えて言葉を発しているように思えない。それ  
なのに、有り得ないはずなのに、出任せを言ってるようにも見えない。  
意味が分かりません」

「そら、そーよ。こんな、腕ズタズタにされて……っ、さ。めっちゃい  
てえつてのによ、あれこれごちやごちや、考えて、られるかよ」

「ならば何故、生き延びるための願望を口にしないのです。貴方にと  
つてこの絶体絶命の状況下、何故助命を乞わないのですか」

徐々に落ち着きを取り戻してきた女性の問い掛けに、痛みを堪えな  
がらも青年は答えを返す。

「鉄血あんたらにとって、人間は、滅ぼすべき存在、なんだろ？わりーけど、助  
けて貰えるなんて、到底、思えんぜ」

「……なる、ほど。危機的状況にあってもそこは判別がついています  
か」

「二応、な。まあ、俺にとつちや、グリフィンあも鉄血お前も、味方にや、な  
りえんけどな」

自嘲気味に呟くと、ゆっくり息をついてそこで青年は視線を落とした。鉄血勢力の事については、多少ながらグリフィンの基地にて動画を用いられながらも説明は受けていた。半ば半信半疑ではあったが、その返事から少なくともグリフィンと鉄血だけの諍いではない、という事をおぼろ気ながらも青年は把握した。

「……ふむ」

そんな青年から視線を外すことはせずに、女性は口元に手を当てて考え込む。目の前の脆弱な人間に対して周囲の人形達へ即座に指示を出し、その息の根を止める事はとても容易い。それどころか、彼女のスカートの中に納められている銃で以って仕留める事すら簡単な事だ。

しかし簡単ではあるが、40年以上も昔から来たと言つてのけるこの存在を、果たして消してしまう事にメリットがあるのか。この世界の人間とは全く違う思考を持ち、死の危機に直面しているにも関わらず既に事切れた人形を庇おうとするこの異端者を、あっさり殺してしまつていいのか。

「……ふ、ふふ。なるほど、これは面白い」

「は？」

突如小さく笑い出した女性に、青年は怪訝な視線を向ける。

「いえ、いえ。それならば、こういうのはどうでしょう。」

貴方の身柄を我々で保護しましょう。勿論その腕も治療して差し上げます」

「はあ!?……つてて、いきなり、何をとち狂つた事、言つてんだあんたは」

予想もしてなかった言葉に思わず声を張り上げ、左腕に痛みが走り青年は呻く。

「いえ、貴方という存在を買おうというのです。貴方はこの世界においてある意味で稀有なモノです。グリフィンにとつては不要かもしれませんが、我々に……少なくとも私にとつては大変興味があります。そしてそれは、恐らく我々のトップにとつても」

にこり、と初めて笑みを見せると、女性は青年の元へと歩み寄る。「どうでしょうか。少なくとも、貴方にとつて悪い話ではないかと思われませんが?過去から来たのであれば身寄りも、頼れる人もいないでしょう」

そして、ゆっくりと手を差し出す。

彼女は半ば確信していた、青年がその手を取ることを。

所詮彼とて人間だ、この極限状況下において、救いの手を差し伸べられて払い退ける事などし難い、否、出来るはずがない。女性はそう計算し、結論付けた。

頷かせてさえしまえば後はどうとでもなる、ならば最初は甘い餌で釣れば良い。

そう、考えていたが。

「……ならさ。この子も、助けてくれるのか？」

「はっ？」

思いも寄らぬ問い掛けに、今度は女性の方が呆けたような返事をし  
てしまう。

「俺の後ろの、この子も、一緒に助けてくれんのか、って、聞いてるんだよ」

「いえ、必要なのは貴方だけです。後ろの人形に用はございませぬ」

女性の回答に、青年は小さく首を振った。

そして。

「んじや、駄目だ。彼女を置いては行けねーよ」

青年は、はつきりと拒絶した。

「……な、なぜ」

「何故？簡単な事だぜ」

青年は辛そうにしながらも、背後を振り返った。そこにはボロボロの少女の人形が、動くこともなく横たわっている。その傍には、青年が置いた機関銃。

それらに眼を向けて、彼は再び口を開いた。

「さつきも、言ったら。あの子はな、俺なんかを助ける為に、自分の残る全てを、託してくれた。自分の、大切な得物を。仲間の為に、残していたエネルギーを。」

そして、彼女自身の、願いを」

だから、と青年は続ける。

「今度は、俺がこの子を助ける番だ。俺だけが、助かつちや……駄目なんだ、意味ねーんだよ。あんたらには、理解できねーかも、しれねーけどさ」

青年の頑なな意思に、女性は自分の予想が浅はかだったことを思い知った。この目の前の人間は、彼女の計算の及ばぬ程に、異常な存在であると。

「……ふふふ。ふふ、あつはははははははは!!」

面白い、実に貴方という人間は面白いです!!」

そして、唐突に彼女は笑い出した。青年と周りの人形達、その場にいるほぼ全ての□達の視線を集め、女性はお腹を押さえて破顔し続ける。

「益々興味が湧きました。私の提案に対してすら、己の身の保全よりも後ろの壊れた人形を気に掛けるとは。実に、実に楽しみです。何とんでも、貴方の事を連れて帰りたくありません」

そう言うと、女性は空を見上げる。その顔からは、一瞬で笑みが消え失せていた。彼女の周りの人形達も、一斉に銃を空へと構え出した。

釣られて、青年も空を見上げ、

「ぐ、グリフィン!?!」

「あの邪魔者を消したら、直ぐ様にでも、ね」

グリフィン  
狗鷲の紋章を携えた、二機の輸送ヘリが迫っていた。

## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ17

「な、何でグリフィンの輸送ヘリがこんなところに!？」

「何で、って……そんなもの、普通に考えれば当然貴方を回収する為にはずでしように」

こいつは何を言っているんだ、とでも言いたげな女性の表情に、有り得ないとも言わんばかりに青年は捲し立てる。

「んなわけあるかよ……ぐ、あの糞野郎は俺を始末する為にここに放り込んだんだぞ!？俺を見捨てる事はあれど、救助する為に戦力を差し向けるなんて!？そもそも、あいつは通信で救援は無理だとほざいてるし、いくら基地が近くても流石に間に合うはずがない!!」

腕の痛みを忘れたかのように一気に並べ立てた青年は、そこで歯を食いしばり接近しつつある輸送ヘリを睨み付ける。先程会話していた時とはうってかわって鋭い剣幕で喋る青年に、女性の方が若干引く。

「そ、それはそうかもしれませんが……予め、他の基地へ支援を要請していたのかもしれませんが」

「よしんば、つつ、そうだとしても、だ!あいつがそんな事をするとは思えねえ!!何か、何か裏があるはず」

青年がそこまで口にしたところで、鉄血の人形達が一気に銃撃を開始した。どれも連射するものはおらず、一射一射を狙いをつけるかのように撃っていく。狙いを付けられた二機の輸送ヘリはその射撃を回避するかのように散開し、二手に別れながらも凄まじい速度で距離を詰めていく。

「うわ、俺が乗ってきたヘリと全然動きが違うんだけど。あの屑野郎、ヘリやあの人形ごと俺を葬るつもりだったんじゃないな」

「ま、グリフィンにどんな思惑があろうとも、貴方は我々の基地へと連れていきますけどね。それこそ貴方の意志がどうであろうとも」

「……俺だって死にたい訳じゃねーよ。けどな、この子を連れていかんってのは俺自身が納得いかん」

青年が首を振ると、女性は呆れたように人間らしい仕草で肩を竦める。

「強情な方ですね。その人形を諦めれば少なくとも怪我の治療と身の安全を確保出来るというのに」

「強情なのはどっちだよ！そっちこそ、この子の修復をしてくれれば俺だってそっちに行くことも考えてるってのに」

「その人形を修理する事のメリットがございませんので」

自分の提案をバツサリと切り捨てられ、青年は舌打ちする。内心、目の前の女性に誘われたとき、背後の少女も助けてくれるなら鉄血側へつこうと半ば本気で考えていたのだ。それだけに、彼にとつてただ一人の人形をついでに連れていく気が全くない彼女の事は信じがたいものだった。

「そもそも人間、特に貴方は合理的に物事を考えなさすぎです。その人形を助けて、一体何があるというのですか」

「損とか得とかじゃねえよ」

吐き捨てるように返してから、青年は少女を見やる。その視線は、言葉の刺々しさに反して優しいものだった。

「自分の事を省みずに、俺の事を気にかけてくれた。その事へのただの恩返しだよ。何も求めちゃいない、この子の事を助けたいだけだ」

「やはり、理解は出来ません。お人好しが過ぎるか」と

女性は、先程と同じように冷たく返す。だが、

「……もし、貴方を連れて帰れたら。その『気持ち』も、少しは理解できるようになるのでしょうか」

「？」

小さく、聞こえないほどの声量で呟いた彼女の言葉を聞き返そうと、青年は口を開きかける。

だが、それは叶わなかった。

「ちよっ!?!」

「な、輸送へりから直接……!?!」

かなりの距離まで接近してきていた輸送ヘリの扉開く。接近し続ける二機のうち、片方のヘリのドアの陰から銃口が顔を覗かせ、青年と女性が驚く間もなく射撃を始めたのだ。次々に放たれた弾丸は、盾を持った人形達を次々と薙ぎ倒していく。

「へ、ヘリから機関銃で掃射とかマジかよ!?!」

「銃の操者は、相당한やり手のようですね……面白い!」

「お、面白ってあんた……うわもう片方のも構えて、ってこっち狙ってる!?!」

「ちいつー!」

そして、もう一機のヘリからも銃身が姿を現した。機関銃のように乱射される事はなく、だがその弾丸は正確無比にゴーグルの人形を撃ち抜く。そして一発の射撃が、青年の頭上を掠める。女性が歯噛みしながら後方へと下がると、そのいた場所に弾丸が突き刺さる。

「……やっぱり、そうかよ」

青年は、確信した。

「あいつらは、助けるつもりなんて、最初からない」

青年の心の奥が、冷たい氷を押し付けられたかのように、固く硬くなるような感覚に襲われる。

「グリフィンは、皆殺しにするつもりなんだ」

強く、強く歯を噛み締める。

機関銃の弾が、大地を削りながら青年へと近づいていく。

「鉄血あいつらだけじゃない。俺も、この子も」

青年の唇の端から、血が流れ出す。

伏せられた瞳から、一筋の雫が流れ落ちた。

「みんな、全部殺すつもりなんだ」

右手が、腰のポケットの筒へと伸びる。

取り出された筒の先端のピンが指で引き抜かれ、小さな筒は地面へと転がり落ちた。

「……ちくしょう」

小さな、小さな呻き声と共に。

地面の筒から、大量の煙が吹き出した。



## 一般人・イン・フロントライン・サドウンリイ18

「なっ、スモークグレネード発煙手榴弾!? そんなもの一体どこに!」

突如辺りに立ち込め出した濃煙に、女性から困惑の声が上がる。小さな筒から絶え間なく煙は流れだし、たちまち視界を白く埋め尽くしていく。

左腕を完全に使えなくされ、武器も砕かれた彼にとって最後の武器、手段にして切り札。それを切った青年は、すぐに後ろの少女へと近付いた。

「ぐうっ、ぎっ、く、ってえ……!」

青年が身体を動かす度に、揺れる左腕から激痛が青年に襲い掛かる。四カ所に穿たれた銃痕からは絶え間なく血が流れだし、青年の額の汗は止まることなく滴り落ちる。それでも青年は痛みで叫びそうになるのをひたすらに堪え、少女を小脇に抱えた。

「ほんとは、こんな運びかた、なんて……っ、したく、ねえけど」

小さく、搾り出すように呟いてから、青年はゆっくりと立ち上がる。スモークグレネードの煙が尽きる前に、何とかこの場から離れねば、と青年は歩き出そうとした。

だが。

「う、ぐ、っ……!?!」

ぐらり、と青年の視界が揺れる。

先程まで感じなかったはずの気持ち悪さが唐突に押し寄せ、身体がふらつくような感覚に苛まれる。

「なんだ、よ、これ……?」

いきなり身体に現れた症状に困惑しながらも、青年は何とか歩き出した。

こんな場所で立ち止まってしまえば、たちまち銃弾に撃ち抜かれ蜂の巣にされてしまうだろう。

それでなくとも、今抱えている少女が破壊されてしまう。その危機感が、青年の足を前へと進める。

「う、う……お、え」

猛烈な吐き気が矢継ぎ早に青年の体内から沸き上がり、一瞬青年の歩みが止まる。

痛みから流れ出ていた汗とは別の汗……冷や汗が頬を伝い、全身がどんと重くなっていくのを彼は感じた。

「や、べえ」

周りの音がどんと遠くなり、銃声すらオモチャのそれのように小さくなっていく。

代わりに耳鳴りが青年の聴覚を覆いつくし、その感覚を奪い去っていく。

「……これ。」

ひよつと、かして」

はあ、はあと荒い息をつきながら、青年は己の左腕へと視線を向けた。

腕は自分の血で真っ赤に染まり、指先からボタリボタリと地面へ垂れ落ちる。

「……血、流しすぎ、た？そん、なに？」

やべえ、と心の中で呟く。

先程まで青年へと激しく主張していた傷の痛みはいつの間にか彼方へと追いやられ、代わりに様々な不快感が彼を包んでいく。

短時間で多くの血を失ってしまい、さらに急に身体を動かしたせいで、彼の身体は失血状態のような症状に襲われていたのだ。

「ぎ、つ……すぎ、んだろ」

本当なら、走ってでもすぐにこの場から離れたかった。

グリフィンから、鉄血から、自分と腕の中の少女に危害を加える☒達から、逃げたかった。

だが、それは最早叶わぬ願望。

今まで彼が一度も感じたことのない程の不調が、それを許さなかった。

「……それ、でも」

諦めたくはない、こんなところで殺されたくはない、と青年は根性の限り、歩を進めた。

周りの状況など、既にほとんど青年の目には入っていない。

臆気な視界の先に映るのは、無心に目指すのは、あの廃墟。

「……く、ふ、う」

幸か、不幸か。

銃弾に撃たれる事もなく、足が纏れ倒れる事もなく、青年は先の建物の中へと揺れるように滑り込む。

「ぐうつ、ぐ、つう……！」

残る力を振り絞り、少女を部屋の隅のベッドへと横たえる。

埃の積もったそれに乗せたくはなかった、だが地面へと寝かせるよりはマシだろう、とまともに働かない思考で青年は必死に考えた。

そして。

「は、は」

膝から、崩れ落ちる。

ただの人間である青年には、限界だった。

ぐしゃり、と土埃の上へと倒れ込む。

(……ほんと、駄目駄目だな、俺。約束も、何も、女の子一人すら、守れやしねえ)

霞のかかった思考で、青年は後悔の念を紡ぐ。

(もつと、もつとやりようが、あつただろ。後から、助けに来る事だつて出来たはずだ)

悔やむのは、少女の事。

(それに……いくら助けたいからって、自分が死んでたら、意味なん

て)

そして、彼自身の選択肢。

(……いや、でも)

涙が、青年の頬を伝う。

(彼女が、さらに壊されなかったただけ、無様に撃ち殺されなかっただけ、運が良かった……かな)

僅かに開いていた瞼を、閉じる。

(それでも)

「しにたく、ねえな……。たすけて……。あげたかった……。な」

そして、青年の意識は暗い闇の底へと沈んでいった。

ー一般人、死地より脱すー  
一般人・イグジット・フロントライン

『ー残念ながら、その人間を捕獲する事は出来ませんでした』  
『そう』

『最も、あの出血量です。恐らくは死んでいる可能性が高いかと』  
『……そう(キラツキラ)』

『やはり、予定通りあの人形を』

『ねえ、代理人<sup>エージェント</sup>』

『何でしょう』

『私も会いたいわ』

『……はい?』

『なによ、こんな面白い人間に貴方だけ会っただなんて。ずるいわ』  
『え、ええ……そ、そう言われましても』

『ここに連れてきてよ。どうせグリフィンが回収してるんでしょ、そいつ?』

『た、確かにあの人間の姿は消えておりましたが、生きてる確証は』  
『わーたーしーもーあーいーたーいーのー!!最悪死んでも構わないわ、とりあえず連れてきなさい! DEAD OR ALIVE って奴よ!!』

『お、面白いのは会話であってあの人間そのものが面白いモノかは』  
『やかましい!これは命令よ、連れてきなさい!!』

『……はあ。分かりました、とりあえず各人形たちに指令は出しときますが、期待しないで下さいよ?』

『あ、もし生きてたら、なるべく傷付けずにね!絶対よ?』

『そ、それは無茶苦茶過ぎます!グリフィンに匿われている場合』

『大体ね!エージェントがあんなに撃ちまくらなきや失血死寸前までいかなかったでしょ!?貴女が責任取んなさいよお!!』

(当てたのは腕だけですしそもそも数回しか撃ってないんですけどな  
んでここまで言われなきやならないんですか……)

『分かったの!?!とにかく必ず連れてきなさい!!』

『……はい』

—————

『……はどうか……?』

『……?』

遠く、遠く。

暗い青年の意識の遙か先で、声が響く。

『ふむ……傷の……は?』

『……ですが、比較的……』

(誰か、喋って……?)

僅かに聞こえる声に気付いた青年が瞼を開く。視界には一面の白  
天井が映る。目線のみを右に向けると、外から差し込む陽光で窓ガラ  
スが白く輝いていた。

『……ど、どこだ、……?ベッド、の中?』

ぼんやりした頭で思い返してみるものの、青年の記憶にはこんな景  
色は存在しない。右手で掛けられた布団を捲り、ゆつくりと身体を起  
こす。

『おーようやく目覚めましたね』

『ふむ、良かった』

『……うん?』

上半身を何とか起こしたところで、二人の男性の声が左から届く。  
その方向を見ると、ボードらしき物を小脇に抱えた痩身の白衣姿の老  
人と、対照的に鍛え上げられた肉体を黒いスーツに押し込み、その上

から深紅のコートを纏った壮年の男性が青年へと近付いてきた。

「君、体調はどうかね？どこか痛む所は？」

「え、あー、んーと、はい。痛みは、多分どこもない、と思います。体調は……何か、喉が渴いてる、ような」

老人からの質問に、右手を口元に当てて戸惑いながらもゆつくりと青年は返答する。壮年の男性は一旦部屋から出ると、外で何やら会話をし出した。しかしそれもものの十数秒程で終わると、再び部屋の中へと姿を現す。

「ほっほ、それは当然かもしれませんな。何せ君、ここに運び込まれてから四日間はずっと目覚めなかったんだよ」

「……へ？四日間も？」

「ええ。その間は定時間ごとに点滴を打っていたからそこは心配しなくても大丈夫」

「え、うん……ちよつと待て、四日間!？」

ぼんやりとした様子で話を聞いていた青年だったが、そこでようやく意識がはつきりしてきたと同時にとんでもない状況を理解した彼の表情が一変する。

「や、やべえ、会社いかねーと！四日間も無断欠勤とかクビになっちゃうー！」

「ちよ、おい君!？」

「すみません、何で俺ここにいるか知らんすけど、すぐ行かないとやばいんです！」

「落ち着きたまえ」

焦りからかわたわたとベッドの上で慌て出し、右腕をバタバタさせる青年に男性が近付く。

「君、直近の記憶を可能な限り思い出してみなさい。自分の置かれた状況が分かるはずだ」

「直近の、記憶……？」

その言葉に、青年は右手を頭に当てて必死に考え込み記憶の糸を手繰り寄せようとする。そして、ふと気付いた。

さつきから、右手でしかなにかをしようとしていない事に。

そして、視線を左腕の方へと向けー

「……腕が、ない」

言葉を、失う。少なくともここで目覚めるまではあつたはずの左腕が、肩口からまるごと消え去っていたのだ。何かの間違いかと右手で触るが、透明になっている訳でもなく空を掴むばかり。そして肩口に指が触れた瞬間、そこから激痛が迸る。

「いつてえ!？」

「き、君無茶は駄目だ!そこは……」

だが、その痛みが青年の記憶を鮮明に呼び起こした。

2018年の日本から理由も分からぬままいきなりの転移。

指揮官と呼ばれた男に命じられた戦場送り。

堅牢な見た目に反して簡単に貫かれた鎧、弾丸を弾き返し続けた盾。

弾倉を変えた直後にすぐ使えなくなった銃、閃光手榴弾と発煙手榴弾、一瞬にして敵を薙ぎ倒した機関銃。

そして転移後の短時間で出会った□達の顔が次々と浮かび、最後には青年の腕に弾丸を叩き込んだメイド姿の人形と、青年に希望をもたらした緑髪ロングポニーテールの少女が脳裏に蘇る。

「……すみません、大丈夫です。思い出しました。俺、血を流しすぎてぶつ倒れて、死んだかもって思ったけど、助けて貰えたんすね」

「うむ、大丈夫そうだな。主治医、済まないが彼と二人きりにさせて貰えないかな?色々と積もる話があるのでね」

「ええ、分かりました。何か有りましたらお呼び下さい」

青年の言葉に頷くと、男性は老人を促して部屋から退出させる。そこで青年は初めて、白衣姿の老人が医者であることに気付いた。

「さて……君が気を失っている間に、君が所持していた端末や身分証明書を解析させてもらった。すまない」

「あー……いえ、大丈夫です。って、あれ?」



小さく首を下げて謝る男性に、青年は疑問を持つ。確か自分の所持品の一切合切は、あの指揮官の男の所で全て保管されているはずだ。それを目の前の男がいきなり解析したと言い出したのだ。

「勿論言いたい事は分かる、だが先に確認させて頂きたい。後程君の疑問に答えよう。」

君の名前だが……ソーガ、で合っているな？」

「はい。名前が双牙<sup>ソウガ</sup>、名字が武内<sup>タケウチ</sup>です」

「うむ、タケイチ・ソーガだな。以後はソーガと呼ばせてもらう。つと、こちらの自己紹介がまだだったな。私はクルーガー。ベレゾヴィツチ・クルーガーだ」

「クルーガーさん、ですね。分かりました」

名前を名乗った男性に対し、青年はこくりと頷いてから何となく既視感を覚えた。彼に、というよりは、その服装に対して。

「あの、ちなみにですけど、その格好は？」

「ん？ああ、この服かね？わが社の正装みたいな物だ。これでも会社社長を勤めていてね、普段から私服では締まらないだろう」

「なるほど、社長さん……でし、た、かえ？」

内心すげえと思った青年だったが、その服のある一点に目が止まり思考が固まる。

右胸の襟付近、裏返ったその一点に、見覚えのある紋章がワツペンとして縫い付けられていたのだ。

それは、あの狗鷲<sup>グリフィン</sup>の姿をしていた。

## 一般人・イグジット・フロントライン2

「……あの、一応、聞きたいんですけど」

「何かね？」

「会社の名前、って……もしかして、『グリフィン』とかついたりします？」

クルーガーの様子を窺うように、ソウガは尋ねる。それは、出来れば違ってほしい、何かの間違いであってほしい、そんな風にも見えた。だが、その望みをクルーガーは容赦なく打ち砕いた。

「……うむ、『グリフィン&amp; p.クルーガー』、通称グリフィンと呼ばれている。民間軍事会社の一社だ」

「そ、ですか……。そう、かよ……」

青年の口振りに何かを察したのだろう、一瞬逡巡した後クルーガーはゆっくりと肯定する。その回答を見て、ソウガは少し俯いた。彼の中で、再度記憶がリフレインする。

自分を容赦なく戦場に送ったあの男が、簡単に壊れるような銃を渡してきたあの女が、自分を誰も助けようとしなかったあの人形達が。

そして、今日の前にいる男が、そいつらを束ねる立場の人間だという事が。

「……何の冗談、だ。俺は、あんたん所の部下に戦場に送られた！助けを求めても見捨てられ、挙げ句の果てに鉄血の人形と一緒に抹殺されかけたんだぞ?!それを助けただなんて訳がわかんねえよ!!」

「落ち着きたまえ、ソーガ君。君の言いたい事はよく分かる」

「はっ、適当な事を！だったら説明してくれよ、俺の命を救った訳を！それだけじゃねえ、俺の左腕が無い理由もだ!!確かにあの戦場で、俺の腕は撃たれまくってズタズタになってたけど、一応くつついてはいたはずだ!!」

そして、とソウガは齒を一瞬食いしぼり、クルーガーを睨み上げる。

「俺と一緒にいた、あの少女の人形。黄緑色の長いポニーテールで、髪の毛の先端を束ねている子だ。知らんなんて言わせねえぞ、あの子はどうした！まさか置いてきたなんて言わねえよな、見捨てるなんて

ぜってえ許さねえぞ!!」

今にも立ち上がり噛み付かんばかりの剣幕でソウガは吠えたてる、その様子にクルーガーは内心感心した。ベッドの上の青年とその彼が言う人形がどんなやり取りをしていたのかは知っている。知っていたからこそ、ただの人間たる彼が死に瀕してなおその人形の事を念頭に置いて動いた事、そして今自分にぶつけた事に舌を巻いたのだ。(先日の検査データでも、間違いなく彼は人間でありそれ以上でも以下でもないと言っていたな)

スーツを着ていてもなお鍛え上げられた筋肉が自己主張するクルーガーと比べて、平々凡々としか言えない身体つきのソウガ。もしクルーガーがその膂力を振るえば到底敵うはずがないにも関わらず、青年は目を反らす事なく真っ直ぐに目の前の男を視線に捉えているのだ。

「落ち着きたまえと言っている。こちらとて勿体振るつもりなどない、君の知りたいことや疑問は勿論全て話す。だがそれには順序が必要だ、物事は道筋立てて話さねば理解出来まい。」

……ああ、先に君が一番知りたいであろうその人形の事は教えよう。その人形は君と共に回収した。現在は既に修復も完了している」「……本当か?」

「本当だ。先ほど現在その人形を管理している者に君が目を見ました事を伝えておいた、間もなくヘリにて到着するだろう。何せ二日前、先に修復が完了した人形と君の事について約束させられたからな、拳で」

「こ、拳で?」

「久々に一撃、腹に良いモノを貰ったよ……」

あれは本当に痛かった。鳩尾辺りを擦り、遠い目をしながらそうぼやいたクルーガーにソウガは思わず顔を引き攣らせる。あの少女が本当にそんな凶行に及んだのだろうか? いやいや冗談だろでも俺があつた時はエネルギー切れ寸前だったしなくもないんだらうか……と、とりとめもない想像が青年の脳内を駆け巡る。

「ま、まあ私の事は別にいい。さて、何から話したものか……まずは君を助けた理由、そこから行くかね」

腹に当てていた手を離してから腕を組み直し、クルーガーは口を開いた。

「まず誤解のないように言っておくが、君を戦場送りにして処分をしようとしたのは彼の司令部……T地区基地最大の権限を持つ指揮官個人の判断によるものだ。あの基地にいた他の者、及び人形には一切の責任が無いことを伝えておきたい」

「……ふは。指揮官の独断、ね。そもそも会社の方針とかじゃねーのかよ？PMCとやらはぶっちゃけどんなもんなのか詳しくは知らねーけどさ、確か警備会社チックなもんじゃなかったか？少なくともこのご時世、不審者は即始末するように、なんて指示が出ててもおかしくはない気がするけど」

ベッド横に備え付けられたテーブルに置かれたコップにボトルから水を注ぎ、それを飲み干してからソウガは疑問点を述べる。

「君のいうPMCは君がいた時代……四十年から五十年程昔のものだな。今のこの時代では北蘭島事件から始まった世界規模のコーラツプス汚染、それによる広域性低放射感染症<sup>D</sup>の氾濫<sup>E</sup>、更には第三次世界大戦の勃発、といった状態で既に国家の統治機能はかなり衰退している状態でね、首都や国を維持するための重要エリアを管理するのが精一杯だ」

「うん、とりあえず世界はもうどうしようもないレベルで絶望的な状況ってのは分かった」

クルーガーから次々に告げられる耳を覆いたくなるほどの惨状に、げんなりとした表情でソウガは返す。よりによってほんとマジでシャレにならない時代にタイムトリップさせられたもんだなおい、と心の中で呟いた。

「まあ、私も君と同じ年齢の頃にはまさかこんな事になるなどと想像もしていなかっただろうよ……。話を戻すが、現状のPMCは国家が管理しきれない地方都市の防衛や運営等も行っている状況だ。その

うち指揮官が執り行うのは防衛部分と思ってもらえればいい」

だが、とクルーガーは続ける。

「こんな世界状況だ、身元不詳の人間など掃いて捨てるほどいる。それを一々処分していたらただでさえ激減した人口がさらに加速度的に減ることとなる、そんな事はするべきでないしそもそも会社としてメリットなど一つもない。身柄を確保するにしても、その身辺調査や背後に組織が関わっているか否かの確認を優先、問題があつた場合のみ対処をする、それが我が社の方針だ。それを」

「その指揮官とやらは、完全に無視していた、と」

「うむ。……元々、報告が上がってきてはいたのだよ。その件に関わらず、色々よね」

苦虫を噛み潰したようにクルーガーは表情を歪める。その顔から、ソウガは自分が巻き込まれた件以上にあの男はとんでもない事をやらかしていたようだ と推察する。

「そこで数日前、T地区司令部に抜き打ちで監査を行おうとした矢先に、一本の緊急連絡が入った。身元不詳、武器不携帯の人間を保護したが、指揮官が戦場へ送ろうとしている、と。しかもその人間はこの一帯ではあまり見ないアジア人の顔立ちをしており、さらには過去から来た人間だと証言している、と」

「……俺の事か」

「うむ。私は即座に己の警護部隊とは別に、救出部隊を編成、二機のへりにて該当地区に向かわせた」

「ちよつと待て。あのへり、こつちに着くなり機関銃で掃射してきやがったぞ!?!あれを救助だと言うのか!?!」

あの光景を思い出したソウガが目尻を吊り上げると、今度は珍しくクルーガーが目を反らす。

「……それなのだがな。一応、私の信頼のおける小隊二部隊に追加人員を配置して向かわせたのだが、その小隊のうち片方のリーダーがだな。『私は戦闘のスペシャリストよ、私に任せなさい!』と言い出したかと思うと、その、うん……すまぬ」

「おうふ……なんだそれ」  
ソウガ、絶句。流石の展開に彼の脳も考えることを放棄してしまっ  
た。

### 一般人・イグジット・フロントライン3

「そいつには帰還後厳しく言っておいたが、本当に済まなかった。部隊の面々にもフルボツ……いや、注意されていたから今後はあんな無茶はするまい」

「いやフルボツコて……ま、まあ、そちらには悪意は無かったみたいだし、とりあえずは助かったから良いけどさ。それだったら、あの指揮官とこの人形達だって、俺を助けてくれたって良かっただろうに」

首をさすりながら謝るクルーガーに、何となくではあるが苦労人のような雰囲気を感じ、若干申し訳なさにも似た感情を抱いたソウガはこくりと頷く。やや蟠りは残るが、自身が助けられた理由には納得がいったようだ。

「彼の司令部の人形達は、君の事を案じていたよ……表だってこそは表明出来なかったろうがね。先程も少し説明したが、司令部の最高権力は指揮官だ。指揮官が命令した事に対して、人形達は逆らう事が出来ない。……ソーガ、君はロボット工学三原則を知っているかな？」

「ロボット？んーと、昔中学か高校の授業で習ったような……自身の防衛、命令遵守、安全である、だったけ？」

クルーガーの問い掛けに、虚空を見つめ頭を捻りながらソウガは答えを考える。何故ロボットの話がそこで出てくるのかが彼には理解出来なかった。

「うむ、大まかには合っている。彼女ら人形はそのほとんどを人工皮革など生体部品にて構成し、所謂擬似感情モジュールを搭載する事で人間となんら変わらぬ対応や行動、判断を行う事が可能だ。

だが、それでも人形は人形……ロボットたる故に優先事項に据えている項目がいくつかある。その中でも『人間、特に指揮官の命令への服従』、ついで『自己保全』、そして『人命の救助』。人形の中でも『戦術人形』と呼ばれる戦闘特化型カスタマイズをされている彼女らは、この三点を最優先項目としているのだ。故に指揮官が下した指示に対して反旗を翻す事は出来ない。が、その指示に反しない程度であれば自由に動くことは出来る」

「あー、そういう事かよ」

クルーガーの説明を聞き終えたソウガはぼすん、と枕に頭を沈めた。そこまで聞いてしまえば、あの場での扱いにも青年には納得がいった。そして、武器以外にスタングレネードやスモークグレネードを貰えた理由、輸送ヘリ内部であの人形がやたらとフォローをしてくれた理由も何となく理解出来た。

「……廃墟で、あの子が助けてくれたのも、その優先順序のおかげだったのか。命令、したつもりはなかったんだけどな」

「その件についてなのだが、少々疑問点があつてな」

「……ん？」

ぼつり、と寂しそうに呟いた青年の言葉にクルーガーは首を振る。

「君の言葉通り、あの廃墟内部でのやり取りはとても人形に命令を下す体とはなっていないかった。であれば、本来は君に銃を貸すことも、その使い方を伝授することもしないはずなのだ。だが、あの人形はそれを行った」

「え、ちよつと待ってくれよ。なんであの場にいなかったあんたがああ  
の廃墟内でのやりとりを知ってるんだ。そもそもイヤホンはあんとき外してたし」

「先程話をしただろう、あの日私は彼の基地に監査へ赴いていたと。……それと、君が外したのはイヤホンだけだろうか？ヘルメット内部にマイクが取り付けてあったはずだ。だから、こちらでのやり取りこそ君には聞こえていないが、君の状況は全部筒抜けだったのだよ」

「……全然気付いてなかった。マジかよ、イヤホンと一体になつてんのかと思つた。うわ、くそ恥ずかしい」

はああ、と深いため息をついて目元を押さえながらソウガは天を仰ぐ。今更ながら思い返してみると、中々に恥ずかしいやり取りをしていた筈であり、それが目の前にいる人間に筒抜けだったのだ。いくら極限状態で相手は人形だという点を差し引いてもよくもまああんな歯の浮く台詞を吐けたものだ、と青年は嘆息した。

「何も肩を落とすことはない、君は別に悪い事をしてた訳ではない



からな。むしろこちらのやり取りが君へ伝わらなかつた事の方が幸  
いだったかも知れん。かなりドタバタになったからな」

「それは聞きたかつたような、聞きたくなかつたような……まあ、どん  
な内容かは知らんけど、聞いてたらどうなつてた事やら」

右肩を竦めたソウガにクルーガーも苦笑を返す。実際あの司令室  
での問答は流血沙汰の大捕物と化してしまつており、それが彼の知る  
ところとなつていたらそのあとの状況もまた違つた物になつていた  
事だろう。少なくとも、クルーガーはその廃墟から出ることなく籠城  
をするよう指示する事を考えていた。

故に、青年が武器を携え再度外へ飛び出す事を選択した時は度胆を  
抜かれたのだ。

「ふふ……話が脱線してしまつたな。君の人形への言葉は指示でも命  
令でもなかつた、それであれば次の優先項目である『自己保全』に従  
い、銃の使い方を教えること、ましてやその銃を貸し与える事などし  
ないはずなのだ。下手すればその相手に破壊される可能性も有り得  
る為だ、つと失礼」

ボトルに入っている液体を飲み干し、クルーガーは続ける。

「それが、君に対しては『自己保全』よりも下位の『人命の救助』を選  
択した。しかも、その人形自身は損傷しておりそれを遂行出来る状態  
にはあらず、自分の得物を与えた。

……修復と同時にログ解析をしてその事実が発覚してからという  
ものの I・O・P、彼女を製造した会社は大わらわだよ。バグや  
ウイルスも発見出来ずシステム書き換えの痕跡もない、ともあつて  
I・O・P 社内でも先進技術の開発を担う部門に丸投げされた状  
況だよ。一部では、君自身を解析するべきだとの声も上がっている  
……が、ざつくり調べた限りでは君を示すデータは過去にいた一般人  
そのものでね、その主任研究員も頭を抱えていたよ」

「へ、へえ……まあ、まあ彼女が無事ならとりあえずはそれでいいけど。  
あ、でもだからって解剖とかは勘弁してくれよ？」

微妙そうな表情を浮かべつつ、ソウガも水を口に含む。どうも話を

聞いている限り、何とも言えない立場に置かれているようだ。この時代の人間からすれば青年はある種の貴重な過去時代のサンプルであるのだ。あれこれ理由をつけてモルモット扱いされても不思議ではない。

「う、うむ……次に、その左腕についてなのだがね。実は今の話にも関わりがない訳ではないのだよ」

「えっ……ま、まさかとは思うけどその為だけに切られたの？しかもバツサリ」

嘘でしょ？とでも言いたげにソウガは目を見開く。確かにあの場での戦闘で何発もの弾丸を貰っており、その威力で骨も砕けてぐにやぐにやになつてはいたが、それでも本人の了解も無しに思いつきり切断するのは如何なものか。

青年が訴えようとした矢先だった。

「ちよ、ちよつと君、廊下は走っては」

「煩いっ!!」

ダダダダダ、と駆けるような足音が突如響き渡る。困惑混じりの静止に鋭い返事が返ると、その足音はどんどんと大きくなっていく。

「な、なんだ？」

「む、来たか。予想していたより早かったな」

当惑するソウガとは対照的にその主の正体を察したクルーガーがそつと部屋の隅へと動く。

そして、走る音が最大に達した時だった。

「んっ!?」

部屋の入り口に、小さな姿が飛び込んできた。

肩や胸元が大きく開いた服に赤いスカートと白いニーソックスに長手袋。

床にまで届きそうな長い黄緑色の髪は濃紺のリボンでポニーテール状に纏められ、毛先もまた毛ゴムで束ねられている。

そして、幼げな顔立ちに映える紅い瞳がソウガを捉えると、その目

元が潤んだように煌めき。

「……いた」

「きみ、は」

「お兄さんっ!!」

「ゲグハアツ!」

そして、砲弾のように飛び込み、青年の腹に突っ込んだ。

## 一般人・イグジット・フロントライン4

「良かったーほんとに、本当に目を覚ましたんだね！」

「がふ、げほっ、ごほ……お、おう、なんとか……な、うん」

青年の身体を抱き締めながら腹部辺りに顔を埋めて無事を喜ぶ少女に、突撃を喰らって大ダメージを貰いながらもソウガは何とか堪える。その様子をみたクルーガーも先日貰った一撃に若干顔色が青白くなっっていく。

それなりに鍛えていると自負している己でさえノされてしまったのだ、ベッド上で人間大砲ならぬ人形大砲が直撃した青年のダメージは推して知るべし、といったところか。

「うう……良かったよお」

そんな二人の状況の事は知ってか知らずか、ソウガの身体に押し付けられくぐもった声ではあるものの少女は嬉しさを隠そうとはしないものの、その声にやや湿り気を帯びていく。

「いや、まあ、君のおかげで何とかなつたよ。ほんと助かった……そのあとで色々あったけど」

「ほんとですよー」

ソウガが声を掛けると、弾かれたように少女は顔を上げる。

「I. O. P. で修復されて、本当に助けてくれたんだと思ってたら、お兄さんは昏睡しててどうなるか分からないって言われたし！グリフィンの社長からはお兄さんが鉄血相手に生きるチャンスを与えて貰ったのに私なんかの為にそれをふいにしたなんて言ってたし！しかも、しかも、お兄さんの腕がボロボロになってるのに、マシンガンから逃げる時に、私を置いていけば良いのに!!わ、私はただの人形なの、に、それを、私を担いで、担いで……う、ううううう!!!」

余程言いたい事を溜め込んでいたのだろう、涙混じりに一気にソウガに叩き付けると、少女はまた青年の身体に顔を押し付ける。だが、今度のそれは嗚咽混じりだった。その様を見て、

「とても人形なんかには思えないんだけどなあ……あーよしよし、心

配してくれてありがとな？」

と呟き、右手で少女の背中をあやす様に擦りながら、あることに気付き目線を部屋の隅で所在無きげにしているクルーガーへと向ける。

「そいやクルーガーさん。なんで俺が鉄血人形相手に選択肢突き付けられた事とか、この子を背負って逃げた事とか知ってるんだ？」

「鉄血とのやり取りに関してはヘルメットを通じて。その人形を背負っていたのは、戦場のドローンからの映像を通じてだな。最初は目を疑ったが、ヘリの部隊からの報告もあったから確信したよ……本当にその人形を、出会ったばかりの人形を君が全力で助けようとしたことを」

「……別に良いじゃねーかよ、文句あるかよ」

呆れ混じりに答えたクルーガーに、ソウガは唇を尖らせる。少女を撫でていた手を止めると、人差し指で自分の頭を指し示す。

「こちとら訳も分からずいきなり四十年以上も後の世界とやりに飛ばされてきて住む場所はおろか身寄りも顔見知りも皆無な状態で戦場に見捨てられたんだ。そんな中でこの子とあそこで出会った、それで助けようと思った。それだけだし」

「全く、単純と言うべきかお人好しと言うべきか」

「単純で結構、お人好しで結構。それが人形だろうが何だったろうが、あそこで助けると決めた事に後悔はしてねーよ」

強い決意の表情。廃墟の中で少女に、戦場で鉄血人形相手に見せたソウガの眦を少女は吸い込まれるかのように見つめ、視線を向けられたクルーガーは頬を緩めた。

「なるほどな……後悔はしていない、か。その年で面白い事を言う……いや、決して悪いとは思わない、寧ろ好ましい物だ」

「お兄さん……」

「ああ。だから、君も気にしないでいいよ」

鋭い目線を和らげると、ソウガはゆっくりと少女の頭を撫でる。その感覚が心地いいのか、少女は目を細める。

「ふわあ。で、でも、その左腕は……」

「大丈夫だって。君のせいじゃない、そもそもあそこで撃たれたのは俺が時間を掛けてたからだし、ぶったぎったのはこの人らだし」

「う、で、でも」

「どーしても、気になるってんなら」

頭を撫でるのを止めると、青年は真っ直ぐに少女を見据える。

何を要求されるのだろう、と少女は身体を硬直させる。

「名前、教えてくれよ」

「……はい？」

少女とクルーガー、二人の言葉が交錯する。ポカン、という擬音が聞こえてきそうではあるが。

「いやさ、ほんとはあそこで聞こうと思ってたんだけど聞きそびれちゃってさ？名前も知らずにあれこれ言ってたけど、やっぱちゃんと知っておきたいしさ。

な、教えてくれよ。あ、俺はソウガ。ソウガ・タケウチっていうんだ」

自己紹介を交えて青年が少女に名前を要求すると、少ししてから少女はクスクスと笑いだす。

「やっぱりお兄さん……ソーガって変な人だね」

「ぐふっ……それ、あそこでも言われたなチクショー」

「まあ確かに、間違いなく変わっているな」

「やかましいわ」

「いいよ、教えてあげる」

そこで少女はソウガから身体を離し、床に足を下ろす。

「あたしの名前はね、

『Arme Automatique Transformable

Modelle 《アーム・オートマティック・トランスフォーマブル・

モデル》ミルスフ・ソン・サンカント・ドゥ 1 9 5 2』って言うの」

「……す、すごいふるねーむだね」

明らかにソウガの処理容量を超えた長さの名前に思わず思考がフ

リーズする。そんな青年を見て思わず少女は笑いを堪えられずにお腹を抱えだした。

「あつはははは！そんなに長かった？」

「いやごめん、流石になげえって。ていうか何その名前、何かの武器の名前なの？」

「そうだよ。例外はあるけど、戦術人形は皆銃から名前が取られてるの。私はマシンガンの戦術人形だよ」

あつけらかん、と返す少女に思わず青年はマジかよと呟いた。もつと人間らしい名前が来るかと思ったらまさかの兵器名と来たのだ、完全に予想外だったようだ。

「な、なるほどな。ちなみにだけど、愛称っていうかき、短縮した名前とかあってないか？」

「普通にあるよ」

「あるんかい」

「うん。『AAT-52』機関銃、これが私の通称名だよ」

「AAT-52……」

その名前を、ソウガは噛み締めるように呟く。

「AAT-52、か。うん、覚えた。ありがと、よろしくな」

「うん、こちらこそよろしくね、ソーガ。ソーガはこれからどうするの？グリフィンで働くの？」

「いや、まだ何も決めてないし、そもそも腕の状態どうなってんのか？この社長さんに聞かないと何とも」

「うむ、先ほど丁度その件について話をしていたところだな。せっかくだしAAT-52、君も話を「は、はひ、はひ、ぜひい……つ、着いたあ」……絶妙なタイミングで来たものだな」

## 一般人・イグジット・フロントライン5

ソウガが視線を上げると、見覚えのない人物が新たに部屋の入り口へと姿を見せる。

医療関係の物とは別の白衣を纏い、薄桃色の髪に猫耳のように見えるナニカをつけた女性は、目の下に濃い隈を浮かべた顔を上気させて……否、入り口に寄り掛かりながら肩で息をしていた。

「か、かんべ、してよ……私、ほとんど、運動、してな」

「ペルシカ……さてはこの人形に置いてけぼりにされてダツシユする羽目になったな？」

「だ、だって……無視しようかな、とか思ったら、うちの子達に、『放置したら、コーヒー没収ですよ』って、脅されて」

「……意外に立場が弱いのだな」

「クルーガーさん、そのなんか猫耳っぽいので萌えを狙ったけど雰囲気とかで台無しにしてるっぽい人は？」

「ソウガは意外と容赦ないね。まあ気持ちは分かるけどさ」

「酷い、酷いよ君達、こんなか弱い乙女にそんな暴言を……」

よよよ、とその場に崩れ落ちるフリを見せる女性に、ジト目の視線が無言で三対降り注ぐ。

「……せめて何か言っつてよお！」

「ソウガ、彼女はペルシカリア……通称ペルシカだ。先程話に出たI・

O・P・<sup>A T I 5 2</sup>の中でも先進技術を主に扱う部門『161ab』の主任研究員だ。現在彼女を預かっている責任者でもある」

「へー、よろしく」

「君らマジで容赦ないよねホント、泣くよ？乙女の涙撒き散らすよ？」

ピクピクと頬を引き攣らせながらも、ペルシカと呼ばれた女性は立ち上がる。

「……ま、とりあえず今クルーガーに紹介された通り、161abで好き勝手やらせてもらってるよ。あと、今日はI・O・P・の社長の代理も兼ねて来ているよ」



「社長の？」

「そ。今回のグリフィンで起きた件に関して、うちの社長とクルーガーとでまあ色々やり取りしててね。で、社内で揉んだ結果が丁度出ただけけど、運悪く急な用が出来ちゃってね。それで私に御鉢が回ってきたって訳」

そう言うと、咳払いをしてからペルシカは部屋の中を見回す。

「ソーガ、君にやあんまし関係ない話で申し訳ないんだけどね。I. O. P. とグリフィンは業務提携を行っていてね、グリフィンの戦術指揮官への戦術人形の提供からメンテナンス、装備開発を一手に引き受けているんだ。代わりに指揮官の方で不要となった人形は例外を除き、I. O. P. に返却しなきゃいけない契約となっている。だけど、今回のAAT-52の件は明らかに契約違反なんだ」

ペルシカがそう告げると、名前を出されたAAT-52の表情が硬くなる。

「敵地での作戦の末の行方不明や損壊による回収不能とかであればまだ話は分かる。けれども、T地区指揮官はAAT-52を単独で基地から間近とも言えるエリアへ出撃させた挙げ句、ダメージを受けて行動不能となった事を知りながらそれを放置、搜索の努力も一切見せなかった」

「会社員としても人間としてもぐうの音も出ないほどの屑だな」

バツサリと切り捨てたソウガに全くだよ、とペルシカは同意する。次いで、クルーガーが厳しい表情で口を開いた。

「そこで、I. O. P. の社長と私とで協議を重ねたのだ。人形を使い捨てたのは指揮官の独断と言えども、我々グリフィン側にも管理不行き届きの責任はある。勿論君の件もあるしな」

「しかも、AAT-52の件以外にも彼の指揮官に配属されてる人形のうち複数体が行方不明になっている事も新たに分かった。その件に関しては調査を進めるところだけど、一先ずは今回の件に関する結論だね。クルーガー、よろしく」

そう言うと、クルーガーは頷いてソウガの左肩を指差した。

「うむ。まずソウガ、君の左腕に関してはグリフィンが費用抛出の上、I. O. P. への義肢作成を依頼した。戦地から引き上げられて来たとき、弾丸の衝撃で被弾部分の骨が木っ端微塵になってただけではなく、傷口が埃塗れになっていた。このままでは菌や毒素が全身に回ってしまう、そこで医師やI. O. P. 側とも相談の上、迅速に肩の被弾口から切断させてもらった。中々話し出せず済まなかったな」  
「あ、あー……そっか、俺廃墟の中でぶっ倒れたんだっただけか。いや大丈夫、むしろ俺の行動が迷惑かけたようで、ごめんなさい」

気絶する直前の事を思い返ししながらソウガは頭を搔く。あのタイミングでは思考もろくに働いていない状況とはいえ、よくよく考えてみればとんでもない場所へと逃げ込んでしまったものだ、とソウガは軽く反省した。

「いや、気にはしていないよ。君の腕の作成を引き受けたのは、一応I. O. P. 側としても君に感謝してるからだよ。君の身の上話はクルーガーから多少なりとも聞かせて貰ったよ、事情も知らないにも関わらずAAT-52を見捨てる判断を一切せずにくれたそうじゃないか」

「そうそう、ソウガは私の命の恩人なんだから。これぐらいの事はされてしかるべきだよ」

ニコリ、とAAT-52がソウガに笑いかける。その様子を見てどこから取り出したのか、ペルシカはノートサイズの端末を取り出して何かを調べ出す。そしてどうやら面白いモノを見たのか、一瞬薄くニヤリと笑うとその端末を仕舞ってから喋り出した。

「とは言っても、勿論それだけじゃないけどね。ソウガには義肢を取り付けてから数日、I. O. P. でちよつとした実験に協力してもらおうよ」

「じ、実験？嫌な響きだな……何をさせるんだよ」

「大丈夫、実験とは言っても大したもんじゃないよ。ぶっちゃけた話、今回作る義肢の動作試験とかがメインだからね。人間に義肢を取り付けるのは無くも無いんだけど、I. O. P. じゃあまりそのところのデータが集まってなくてね。そういう意味では実験台に近いも

のだけど、協力して欲しいんだ」

「んー、まあそういう事なら良いよ」

ソウガが頷くと、満足そうにペルシカは微笑んだ。それを見てから、クルーガーが口を開く。

「I. O. P. での実験が終わった後に関しては、君さえ良ければわが社にて君を雇おうと思っているのだが、どうかね」

「俺を？ 良いのかよ、身元不詳どころかこれと言った技能は何もないぞ？ いくら戦場に出た経験があるからってまた戦場送りは嫌だぞ」

ソウガが表情を曇らせると、対照的にクルーガーは破顔してみせた。

「ハツハツハ、心配する事はないぞソウガ。それは完全なイレギュラーだ、グリフィンは本来人間の指揮官と戦術人形による部隊が戦力だからな。勿論最悪の事態を想定して指揮官だけでなく後方要員も銃の使い方は習ってもらうが、基本的に人間が最前線に赴く事はまずないと言っているよ。」

それに、何も必ずしも戦術指揮官になれと言うつもりはない。グリフィンとしてはそれがベストではあるが、勿論個々の適性というものがあるからな。指揮官に向かない者や意思のない者を無理やり据える事はしないよ。勿論、どの部門であろうと君の立場、身元は私が証明しよう」

はつきりと言い切ったクルーガーに、ソウガは目を丸くした。いくらグリフィン側に多少なりとも非があるとは言え、失った左腕の義肢の費用から仕事まで提供してくれるというのだ、青年には渡りに船、破格とも言える内容だった。

「そ、そりゃ滅茶苦茶嬉しいし、願ったり叶ったりだけど」

「む、何か不満点でも？ 君への迷惑料とAAT-52を保護してくれた事を加味すればこれでも足りないぐらいでは、と思うがね」

「いやいや十分だよ！ これ以上何かしてもらったら逆に疑うわ！ こちら頼れるモノも何もねーし、喜んで身を寄せさせてもらうよ」

「よかったね、ソーガ！」

心から喜びを見せるAAT―52に、ソウガも笑顔を向けた。

「ああ。AATも、本当にありがとうな。AATがいなかったら本当にどうなってた事か」

「そんなことないよ、私だってソーガがいなかったら絶対にここにはいないよ？ほんとありがとう」

「そんな事……」

二人で会話を続けるソウガとAAT―52を余所に、ペルシカは声には出さずクルーガーを手招きで廊下へと出るように伝える。クルーガーはちらりと二人に視線を向けた後、その手招きに応じて部屋の外へと出た。

「何かね」

「いやね……彼の件」

先程の会話とは打って変わって、ヒソヒソとペルシカは喋り出した。

「昏睡中の脳波とか、切って貰った腕を数日間調べてみたけれど、やはり特異性は何も見受けられないね、むしろ凡人とすら言えるレベルだよ。ただし、先程彼と会話中のAAT―52を調べたところ、普通の人と会話した時に比べて擬似感情にポジティブ方向に対してかなりの数値上昇が見受けられた。他指揮官に配属の同型人形と比較しても、MVPを取った時以上の上がり幅だ。いくら彼が助けたとは言え、この点は明らかに異様と言える」

「なるほどな。彼には人形の戦意高揚に長けている可能性がある、と言うことだな」

「そこはI. O. P. にいる間に詳しくデータ採取するよ。確か彼は今は亡き極東の出身と言ったね？しかも四十年以上も過去の。もしかすると何らかの関係があるのかもね」

「ふむ……何れにせよ、AAT―52は彼と一緒に行動させた方が良さそうだな」

「それは同感。万が一彼が戦術指揮官にならない場合でも、民生用人

形に改修してしまえばいい。いや、その方が面白いデータが取れるかもね?」

「そこは彼次第だ、我々が強要すべきではない」

「ふーん……随分と、彼に入れ込むんだね?」

「ま、ソウガに対してはそれなりの負い目もあるからな。それと……若いなりに、覚悟を決めた目をしていた。磨けば光る、そんな気がしてな」

「なるほどね、まあそういう事にしておくよ。」

ちなみに、首大丈夫だった?」

「……医者には捻挫一步手前と診断されたよ、巴投げされて受け身も取れない状態でそれは奇跡的と言われた」

「な、なるほど」

「というか、AAT-52の突撃を腹に食らった彼の方が心配なのだが」

「……普通に笑ってるよね。やっぱりどこかおかしいのかも」

「ギャグ補正が高いのでは?」

「いやギャグ補正であんたね」

## 二章―一般人、基地へ行く― 一般人・イン・メイビーセーフティ

――ここはI. O. P. 本社のとある一室。

「おー、お疲れソーガ君。ナンバー38の試験は終わったようだね」  
「……なあ、後だけだけあるの？」

「んー、とりあえずのところは調べたい事も調べ終わったし、義肢の試験データも出揃ったようだからグリフィンの基地に戻っても大丈夫だよ。一週間お疲れ様」

「まじかー！よ、ようやつと、実験漬けの日々から抜けられるううう……」

手元のタブレットを見ながら告げられたペルシカの言葉に、全身の力を抜いて椅子に座ったまま目の前の机にぐでえつと倒れ込むソウガの姿があった。

彼が病院で目を覚ましてから十日。メデイカルチェックを受けて医師から問題が無いことのお墨付きを得た青年は、翌日に一路I. O. P. 本部へと向かう事となった。そこで彼はまず義肢を装着するためにベースとなる基部を肩口に取り付ける手術を受けた後、義肢を取り付けての動作試験を行った。

の、だが。

「何言ってるんだい、高々義肢の二十本や三十本」

「いやどう考えても多すぎるだろうが!!しかもあんた、真つ当な奴なんて一本か二本くらいしか無かったぞ!!」

呆れた様子のペルシカに、勢いよく立ち上がるソウガ。その先程まで試験を行っていた左腕からは、所々プスプスと黒煙が立ち上っていた。

「最初はまだ良かったさ、特に変な機構やギミックもない変哲な腕だったし、端末を内蔵して腕の表面を開けたら端末を使える、とかさ。ただ途中から明らかに各個人の趣味が混じってなかったか!？」

「そりやまあ、貴重な検体だからねえ。この良い機会に色々試したく

もなるよ」

「だったら自分等の身体で試せば良いじゃねーか！最後の奴なんてショートして感電しかけたぞ!」

「いや君、いくらなんでも流石にその為だけに腕を落とそうなんて酔狂者はいないよ」

ペラペラと話をしながら、ペルシカは部屋の片隅に置かれていた箱から何かを取り出して机へと置いた。

「んーと、最後の奴は……『義肢部分がトランスフォームしてメタリツクな外見の兵装となる』義肢だったか。全く上手くいかずに断線して漏電、変形機構もあっさり故障したようだね」

「さらつと言われるのもなんか腹立つなおい。てーか腕だけ変形つて無理があるだろうに……つておい、その新しく取り出した義肢は何なんだ。実験は全部終わったってんじゃなかったのかよ?」

「勿論さ。こいつは君に正式につけてもらう義肢だよ。試験も全部終わった事だし、いよいよお目見えつて訳さ」

端から見れば切り落とされた腕にしか見えないそれがごとん、と転がる。精巧な出来に、ソウガからほうとため息が漏れる。

「おお……すげえ。一週間ちよつとしかいかなかったのに、こんなにあつさり一から作れるもんなんだな。人形製造メーカーだけあつて義肢を作るのもお手の物つてか」

「ん? いやいや、流石に一からつて訳じゃないよ。既製品、というか試作品から君の身体に合うものを選定し、サイズや反応、動作部分を調整したんだ」

「なるほ……え? 試作品?」

一瞬頷きかけたソウガであったが、聞き逃せない単語を耳にしてゆつくりとペルシカの方を向く。その顔に、冷や汗が浮かんでいく。「おい、まさかとは思うがその試作品はRPG-7を内蔵したタイプとか四方八方に手裏剣が射出タイプとか火炎放射機がお披露目されるタイプとかじゃねーよな?」

「おや、そのタイプが良かったのかい? 気に入ってたのなら言ってく

れば良かったのに」

「ふぎけんなし」

ビキビキと音をたてそうな勢いで青筋とイイ笑顔を浮かべてソウガは詰め寄る。

「お前誤動作したらマジで死者が出るぞ?! しかも火炎放射機の奴に至っては試してたら溶け落ちたし! 接続部分も糞ほど熱くて火傷しかけたぞ!」

「うん、あれは完全に失敗作だね。汚物の消毒は浪漫だ、って考えた奴は言ってたけど」

「あのモヒカン野郎頭おかしいだろ。つーかそいつに限らずあいつら浪漫最優先にし過ぎて装備者の安全性蔑ろにし過ぎだわ、汎用性がなとか不便なのはともかく安全性がないのは頂けねえよ」

はー、と大きなため息をついてソウガは席へと着く。試験用として取り付けられた義肢の大半は装備した者へ被害を及ぼしかねない代物ばかりだったのだ。これといった怪我がなかったのは僥幸と言えた。

「全くだよ。マグナムライフル内蔵型だったけ? あれ撃つた時なんて、君確か反動で吹き飛ばされてたよね。ほんと、あれで怪我してたらあの担当者のクビは無かったね」

「あれなー……。あと気になったのが、妙にどこかで見覚えがあるような武器が多かった気がするんだけど。手の甲から刃が飛び出したり、電撃流れる鞭が飛び出たり、挙げ句の果てには掌が真っ赤に燃えて轟き叫んだりとか」

「そりゃあれだよ、今は亡きソーガの母国の誇ったサブカルチャーの影響だね」

ははは、と笑いながらペルシカはタブレットを操作していく。ソウガが取り付け試した義肢の一覧には、一部原案となった代物の名前が表示されていた。

「君の時代はどうだったか知らないけど、ニホンのアニメや漫画はそ



れこそ一大ブームを巻き起こしたからね。ニホンが北蘭島事件で消滅した時なんて、世界中のオタクが涙で枕を濡らしたものだよ」

「お、おう、そうなのか」

「そりやもうね。で、技術がようやく二次元に追い付いたこの頃にそのニホンからやってきた実験台が来たんだもの、そりや皆燃えるつて」

「やたらノリノリだったのはそれが原因かよ！いやこっちもワクワクはしたけどさ、何度かマジで死ぬと思ったぞ！」

流石のソウガも呆れ果てる。そんな理由でアレコレと危険な義肢を試されたのではたまったもんじゃない。ソウガ自身そういったサブカルチャーは好きな方ではあるが、安全性皆無なそれらを喜んでつけたいかと言われると話は別である。

「つか俺に付ける前に安全かどうかは調べなかったのかよ」

「調べたら君に取り付けて試験なんてしてないって」

「……そりやそうだよねー」

## 一般人・イン・メイビーセーフティ2

ぐでー、と再度机に突っ伏しながら諦めたようにソウガは呟く。義肢を作ってもらおうという話があったとはいえ、実験台として I. O. P. に来ることを軽く了承した病院での自分の発言を今更ながら彼は後悔していた。

「ここら、こんなところで寝るんじゃないよ。これからそれを外して君の腕を取り付けるんだから、161-a-bの技術室に移動するよ」  
「分かったけどよ……、結局何の試作品をベースにしたんだよ。内容如何では即却下だぞ」

「流石に人間に装着させる腕さ、そんな突飛な代物は採用していないよ」

机に転がされた義肢を掴み上げながらペルシカは肩を竦める。

「今回採用したのはパワーシリンドー内蔵型。ほら、片手で車を易々と弾き飛ばしたりする実験した奴よ」

「あー、俺の右腕の倍位に太くて筋肉ムツキみな見た目してたあれ？でも今持つてる奴は俺の腕と大して変わらなさそうな感じじゃないか」

椅子から立ち上がりながらソウガはその時の様子を思い出していた。映画や漫画に出てくる怪人もかくやと言うほどに漲った筋肉を模したその義肢は、見た目に違わぬ怪力を発揮してみせた。人差し指の一本で鉄板に穴を空けてみせた時などは、ソウガのみならず周りの研究者達もおもいつきり引いていたものだ。

「いや君、流石に片腕だけパンパンに張ってるのも嫌でしょ。アンバランス過ぎるわよ。それに、日常生活するのにそんな超怪力があつたところで一体何をするのよ」

「うーん、なんかこんな世紀末世界だといざという時に役立ちそうじゃね？主に敵に襲われた時とか敵の陣中に放り込まれた時とか」

「うん、言いたい事は分かるけど流石に君のパターンはレアケースだからね？」

「そうである事を願いたいもんだよ、全く」

二人して何とも言えない表情を浮かべながら、ソウガが居たしていた部屋を出る。廊下を歩きながら、ペルシカは腕の説明を続けた。

「今回君の腕に取り付けるに辺り、最大パワーは試験型の二割にまで抑えさせてもらったよ。代わりに内部搭載型の強化骨格を骨代わりのベースとなる部分の周囲にパワーシリンダーと合わせて仕込んである。これでも計算上、片腕だけで60キロ近くの物まで掴み持ち上げ走る事が出来るようになったはずだ。試験型は持ち上げる事にはほとんど対応していなかったからね、あれで持ち上げたら間違いなく君の腰や背中、足が荷重に耐えきれずにグシャツ、てなつてた筈だよ」  
「だから決して持ち上げるなつて念押しされてたのか。つーか60キロでも充分過ぎるだろ、人一人分くらい片腕のみの力で掴んで持ち歩けるつてどんな仕組みしてんだマジで」

軽々と言つてのけたペルシカにソウガは軽く戦慄する。基本重量物を持ち上げるには腕はおろか腰や足の動きも加味せねば簡単に身体を痛めてしまう、それをこの義肢はあっさりとやつてのけてしまうと言うのだ。元の時代になれば間違いなくノーベル賞ものであっただろう、この時代にそんなもの続いているのか彼には知る術も無かつたが。

「あー、言つとくけど流石に真上にまで上げたら一気に身体へ重量が掛かるから気を付けてね？いくら私達でも重力は無視できないからさ」

「重力とは別に色んな法則を無視している気がしなくもないけど、まあ分かつたわ」

本当に大丈夫なんだろうな。内心はそんな事を思いつつも、どこか自信ありげな猫耳研究者の姿にとりあえずそんな言葉を呑み込み、ふと思ひ出したようにソウガは問いかけた。

「そーいや実験で思ひ出したけどさ、ここで何人かの人形と会つてコミュニケーション取れつてのがあつたら？あれつて結局何だったんだ？」

「あーあれかい？大したものじゃないよ」

義肢の話をしてきた時とはうって変わり、つまらなさそうな様子でペルシカは返す。

「161ab特製戦術人形と君を引き合わせた時に、人形側にどんな反応が起きるのか調べてただけよ」

「へー……でも、その顔だと思ってた通りの結果は得られなかったみたいだが」

「そーなのよ！折角今は亡きニホンの貴重な人間、しかも過去から来た超レア検体だつてのにほとんど大した変化が見られかつたんだもの、期待外れもいところよ。ソーガ、君ちゃんと言われた通りにやったんでしようね!？」

「言われた通りも何も、あんたがバツチリ全方位から監視している中で会話をしてたらうに」

謂れの無い言いがかりに反論しつつ、ソウガはその時の様子を思い出す。超小型のスピーカーやイヤホンを仕込まれ、ペルシカからの指定するタイミングで五人の戦術人形と引き合わされたのだ。最初は五人全員と、後はバラバラなタイミングで一人ずつといった具合である。それぞれ個性豊かな人形達で、ソウガにはやはり人間にしか見えなかった。

「つってもさ、態々何らかの結果を期待して俺に会わせただつて事は、それなりの結果を伴った前例があつたつて事なんだろう？」

「おや、意外に鋭いね。大して気にしてないかと思つてたよ」

はつきり言つてのけるペルシカに、流石のソウガもジト目で睨み付ける

「ひでえ物言いだなおい」

「だつて君、気付いているか知らないけどさ、I.O.P.にきて目元の隈が日に日に薄くなつていつてるんだよ。私も人の事言えないけどさ、割りと平和な筈の四十年も前にそれなんだもん、どんな生活を送つてたのか割りと想像つくよ」

「ま、確かにこの世界にきて毎日たつぷり寝かせてもらつてはいるけ

どもさ」

目の下に指をあてがうソウガの脳裏に、この世界に来る前の情景が思い浮かんだ。

「矢継ぎ早に飛び込んでくる仕事。

片付けたと思っただらまた新たに発生するトラブル。

怒鳴るばかりでろくに仕事もしない上司。

毎日のようにクレームを叩き込んでくるカスタマー。

隣で同じように濃い隈を作りキーボードを叩く同僚。

家と会社を行き来するルーチンワークはいつしか数日に一回となり職場に寝泊まりする日々。

しかもその睡眠時間はほとんど仮眠程度……。

「ハハハ、まあそれなりに大変ではあったよ?」

「……ソウガ、そんな死んだ目に震えた声でそれなりと言われて納得出来ると思ってる?」

「……正直元の時代に戻りたいかと言われるとあんまり戻りたくないなと思うくらいには」

「……ブラック企業はいつの時代も消えないもんだね」

横からの憐れみの視線に耐えきれずソウガは前を向き直す。そこには、目指していた161abの看板があった。

## 一般人・イン・メイビーセーフティ3

「さーて到着……って。SOPⅡ、何やってるのよ」

「あ、ペルシカだ。それとソーガも、やつほー」

「あれソーガ、こんな所にどうしたの？」

「よっす。AATもここに居たのか」

ペルシカが扉を開けると、部屋のご真ん中に置かれた作業机の前で二人の人形が何やら塔のような物を積み立て上げていた。一人は長い黄緑色の髪が特徴的なAAT-52。もう一人は左右非対称な長さの薄桃色の髪に、赤いメッシュの『M4 SOPMODⅡ』。ここ161ab製の戦術人形で、ソウガがコミュニケーションとして会話を行った人形のうちの一人である。

「俺は今からここで腕の取り換えをするんだけどさ。これは、人形の……パーツ、か？」

「そ。私が今までに集めてきた鉄血人形の腕とか足とかその他諸々！」

「いやそれは分かるんだけど」

ペルシカは頬を引き攣らせながら、机の上の塔らしき物体に目を向ける。鉄血人形のパーツで構成されたそれは、乱雑に積まれたように見せて奇跡的なバランスで重ねられていた。少しでも押せば簡単に崩れてしまいそうなその塔の天辺に、SOPⅡはさらにパーツを乗せようとしていた。

「昔、ニホンには動物を交互に積み重ねて行って、バランスが崩れて倒しちゃったら負けっていうゲームがあったんだって！で、それだったら鉄血人形のパーツでやってみよってAATを誘ったのー！」

「いやいやSOPⅡ、そんな動物を乗せていくなんて虐待紛いのキテレツなゲームがあるわけ」

「いや、確かにあったぞ」

「あったの!?!」

「冗談でしょ、とでも言いたげに目を見開くペルシカ。

「俺もやったことある」

「嘘でしょお!？」

「おお。つつてもペルシカが恐らく想像してるような本物の動物を乗せるとかじゃなく、動物の写真を用いて遊ぶアプリだけだな」

「そ、そういう事ね……一瞬、昔のニホン人は想像を絶する程の野蛮人だったのかと思つたわ」

「失礼な、んな訳あるか」

本気で胸を撫で下ろしているペルシカにジト目で突っ込みつつ、既に高さが五十センチはあろうかというそのタワーを眺める。その奇妙な構造物を構成するパーツの中には腕や脚から胴体の一部、果てには生首丸ごとと知らない人が見たら卒倒しかねない代物まであった。「確かにそんなのあつたけどさ……いやでもこれ、ほんとよくこんな集めたな」

「その箱の中にもまだ一杯入ってるよ」

「え……う、うわぁ」

AATが示した箱の中を覗き見たソウガだったが、サングラスを掛けた鉄血人形の生首のその瞳と目があつてしまい思わず目をそらす。

「名付けて『てっけつタワーバトル』！これは流行るよー」

「いや流行らないでしょ」

「えー、流行らせてよペルシカあ。ソーガはさ、ソーガはどう思う？」

「名前とかほぼまんまじゃねーか。あとせめてビジュアルを何とかしろよ」

「そんなにビジュアル悪くないと思うんだけど。ほら、可愛いでしょこの腰とか」

「どこの世界に人形の腰部に愛情を見出だす奴がいるんだよ！ラブドール相手とかでもそういねーってのー」

タワーの上に置こうと持っていたパーツに頬擦りするSOPⅡから距離を取るソウガ。ペルシカも流石に頭を抱えて表情を強張らせており、設定を間違えたかなとまで呟いている。

「いやまあ、遊ぶのは別に良いんだけどさ、今からその机を使ってソウガの腕を取り換えるんだから片付けて欲しいんだけど?」

「良いけどちよつと待ってて、今かなり良いところなんだからさ。とりあえずはこの腰を何とか乗せたいところなんだけど」

「……見たともう乗るような場所は無さそうなんだが。かなりギリギリのバランスみたいだし」

ソウガの言うとおり、既に五十センチはあろうかというタワーはどんな積み方をすればこのように成り立つのか、あちこちに腕や脚の先が突き出た状態で成り立っており、これ以上積み重ねるのはとても不可能なように見える。だが、SOPⅡは諦めた様子は全く感じられないどころか先程まで以上にやる気を漲らせている。

「まだだ、まだ諦めんよ！私は見た、ヤギの上にそそり立ったゾウの姿を！」

「あれ凄かったよねー、めっちゃぐらぐらしてたのに結局倒れなかったし」

「いやそれゲームの話だからな？実際そんな簡単にやれるもんじゃ」「行くぞー！私はこの一手に賭ける!!」

ソウガの言葉にも一切躊躇わず、むんずと腰部パーツを掴むとSOPⅡはタワーの天辺にゆっくりと乗せ、

「あー！ー！ー！ー！！」

あつさりと崩した。

「うん、そんな気はしてた」

「今のはどうあがいても無理だろうに」

「わーい勝ってたー」

「チクショー！もつかい、もつかい勝負だ！」

「後にしてって言ってるでしょ」

完膚なきまでに崩れ落ちたパーツをかき集めてフンスと鼻息を荒くするSOPⅡの首にペルシカが手刀を叩き込む。

「おぐえっ」

「おい、変な声出たぞ」

「だいじょーぶだいじょーぶ。さ、ソーガもさっさと腕を乗せなさい」  
取り換える腕や器具を色々取り出すペルシカにハイハイと返しつ



つ、ソウガは机の近くにある椅子へと座り腕を乗せる。

その間も着々と準備を進める目の前の科学者に、青年はどこか浮かない表情を向けた。

「しっかしさあ……毎度毎度腕を切り離して再接続する時のあの痛み、ほんとどうにかならんのか？ほんとしんどいんだけど」

「ただ単に手術をするっただけなら麻酔をかければ済む話だけど、麻酔が抜けるまでには数時間掛かるし君の場合はすぐに動作試験を行う必要があったからね。今回のもちゃんと動くか見ておきたいし、そのうちクルーガーが迎えに来るから動かせるようにはしておかないとね」

「ぐえー、マジかよ」

## 一般人・イン・メイビーセーフティ4

顔を顰めながらソウガは額を右手で覆う。余程嫌なのだろう、小さなため息も漏れ出ている。

「ソーガ、そんなに痛いのか？」

「腕を切り離す時はまだマシなんだよ、ちよつとした喪失感……というかダルさに襲われはするけど痛いとかいう訳じゃないし。だけどその後の接続がなー、正直言うともマジで洒落にならねえんだよこれが」

渋面を崩すことなくソウガはSOPⅡの質問に返す。ソウガがいた時代のコンテントで義手や義肢を取り扱ったアニメや漫画等のサブカルチャー作品はそれなりにあつたが、それらを見てみるとどれも神経を接続する際に壮絶な痛みを伴う描写が多かつたのをソウガは思い出していた。

青年自身、まさか自分がそれと同じように義肢を取り付けその痛みを体験することになろうとは、そしてさらに取っ替え引っ替えして何度も何度も苦痛に苛まれることになろうとは思ってもいなかつた訳であるが。

「どっこいせ……つと。準備できたよ、ちやつちやと切り離すよー」

「人がメラニコリーしとるとこに追い討ちでさつくりと腕を切断します宣言を叩き込むかね、ペルシカさんよ」

「何を言ってるんのさ、正直今更でしょ。憂鬱にしてたら痛みが薄れる訳でもあるまいに。ていうかソーガ、あんた既に何度切断と接続したと思ってるのよ」

「そら今までののは実験用の義肢だっただろーが。今から付けるのは俺が今後長いこと付き合うであろう本チャンの義肢だろ？頼むからちゃんと付けてくれよ」

隣の部屋から機械を運んできたペルシカが、その機械から伸びるアームを伸縮させながら告げる。ペルシカの言うとおりに言えばそれまでではあるのだが、これから自分が長く付き合うであろう腕をいよいよ取り付ける段階になってもその調子で進められるのは何か違

うだろ、とソウガは内心呟いた。

「そりゃ勿論、妥協はしないよ。そこは信頼してくれて良いさ。……むしろ、試験用義肢と違って強固に繋げるために君には試験用のそれ以上に痛みが続くはずだけど、耐えられるかい？まあ耐えてもらうしかないんだけど」

「うげえ、マジかよ……。し、しゃーねーか、頼むぞおい」

ふうー、と息をつくると覚悟を決めた面持ちでソウガは左腕をペルシカの前へと乗せる。それを確認したペルシカは早速作業に取り掛かる。一切の躊躇いも逡巡も見せることなく、開始して一分も経たないうちにごとりと音を立ててソウガの肩口から腕が外れて机上へと転がる。

「わー、はやーい」

「ま、この数日で何十回と繰り返した作業だからねー、むしろここからがソーガにとっては問題じゃないかな。さ、繋げるよ」

感嘆の声を上げるAATに大したことじゃないとでも言うようにペルシカは返すと、持ってきた義肢の接続面を青年の肩口へとあてがう。その様子を見たソウガの表情が固くなり、口元が嫌そうに歪む。

「う……は、早くやってくれ」

「はいはい」

どこか懇願にも見えるようなソウガの様子を気に留める事もなく、ペルシカは義肢の接続を始めた。

途端に、青年の左肩を激痛が襲う。何度も既に経験してはいるが未だに慣れる事のない地獄のごとき責め苦に、ソウガの口から我慢しきれない苦悶の声が続切れ途切れに漏れ出した。

「う、うぐ、ぎい……！」

「そ、ソーガ？大丈夫？」

「す、凄い汗だよ！」

「おっ、ぐ、くう……へ、平気……じゃ、ないか、も」

心配そうに顔を覗きこむSOPⅡとAATに歯を食い縛りながら青年は何とか言葉を返す。右手は甲が白くなる程に強く握り締めら

れ、瞳は限界まで見開かれて涙が溢れ出る。

「……とりあえず半分は過ぎたよ。後少しで終わるからね、頑張つて」  
「く、は、はっ、お、う、う……！」

ここで作業を止めても対象者の苦痛が長引くだけと知っているペルシカは、苦しむソウガの悲痛とも言える窮状に臆する事もなく仕上げ作業へと移る。青年の膝が僅かばかりにガクガクと痙攣しだし、呼吸も不規則になっていくがやはりその手を止めることはしなかった。

「はい、これで終わりだよ！」

「がっ、きあああ!!……っは、っは、っは、っは」

強めに宣言したペルシカが直ぐ様器具をソウガから取り外す。青年は最後に一瞬大きな悲鳴を漏らすと、何度も何度も荒い呼吸を繰り返した。真っ赤になった顔は汗だらけで、唇からは涎が垂れ落ち、涙は滂沱の如く流れ滴る。

「おいおい、顔から出る水分だけで凄い量だよソウガ。ほら、水飲むかい？」

「っは、はひ、はひ、ひい……っ。あん、がと……ん、ぐっ、くっ」

鼻水すら垂れ落ちる程の青年のあまりの惨状に苦笑いをしながらペルシカが水の入ったコップとタオルを置くと、ソウガは小さく礼を眩きながら勢いよくコップを掴み一気に飲み干す。空になったコップを机に戻すと、一際大きな息をついてから繋げられた義肢の手でタオルを持ち、何度も何度も顔を拭う。

「ふ、ひい……きつつかつたあ。今までのとは比べもんにならないぐらいたったぞ」

「そ、そんなに痛いんだ」

「AAT、痛いなんてもんじゃねーぞ。正直な話、銃で肩や腕をぶち抜かれた時並にやばかった」

おどけたようにソウガが僅かに笑みを浮かべると、対照的にAATは表情を曇らせる。

「そう、なの？」

「はは、まあ俺的な例えだよ、例え。実際のところは何度も接続をやっ

てっから、慣れてたっちや慣れてたし」

「そうだね。一番最初の奴なんて気絶してたし、その後も絶叫が煩いこと煩いこと。それに比べればかなり耐えてた方だと思うよ」

「だろ？まあしんどいのは変わらんかったけどさ……これ、ありがとな」

器具を片付け終えたペルシカにソウガはコップとタオルを手渡す。それを受けると、ペルシカは隣の部屋へとそれを持っていった。

「……慣れる？神経の痛みには慣れなんてない。回数を重ねたからといって、内部からくる苦痛は堪えようのないもののはず、なんだけどね」

その疑念の呟きは、誰に聞かれるでもなく、虚空へと消え去った。

## 一般人・イン・メイビーセーフテイ5

コップやタオルを片付けたペルシカが先程の部屋へと戻ると、ようやく人心地ついたのかソウガは左肩に手を当てながら取り付けたばかりの義肢を軽く回していた。

「取り付けた調子はどう？端から見た感じは問題無さそうだけど」

「おー、大丈夫だぜ。ちよつと痛みがジンジンと残ってるくらいで動きには支障は無いぞ」

ペルシカに返事をする、ソウガは頷きながら掌を握り、開きを繰り返す。特に違和感は無かったのだろう、満足そうに笑みを浮かべるとペルシカにサムズアップした。

「ん、良かった良かった」

「なんていうか、思ったより普通だね。あんなに散々滅茶苦茶な義肢を試してた割には」

「勘弁してくれ……。日常生活送るのにそんな滅茶苦茶な義肢なんて付けてられん」

つまらなそうなSOPⅡの言葉にソウガの瞳から光が消える。実験で取り付けた義肢で過ごす事を一瞬でも想像したのだろう、慌てた様子で頭を左右に振っていた。

「ええー、私的にはロケットパンチ撃てる奴とか良いなって思ってたのに」

「良い訳あるかい！誤射でもした日にや手が使えなくなるだけどころか周りに危害を加えかねねーぞあの欠陥品は！」

「いやーあれは面白かったよ、発射前の水蒸気で狙いのつけようがないというおもしろい失敗作だったけどね」

「見てみたかったなー、ロケットパンチ取り付けたソウガの勇姿」

「嘘だろお前……」

楽しそうに呟くAATにソウガが頭を抱えていると、廊下に繋がる扉が勢いよく開く。

「あーっ、やっぱここにいた！」

「あれ、みんなどしたの？ROもいるし」

開かれた扉から次々に四人の少女達が部屋へと飛び込んでくる。

SOPⅡとは違う色質の桃色の髪に蒼色の瞳の『ST AR15』、右目に眼帯をつけ長い焦げ茶色の髪を三つ編みにした『M16A1』、橙色と檸檬色のオッドアイを持つ『RO635』、そしてM16とどこか似通った容姿ながらやや明るい髪色に緑のメッシュの『M4A1』。彼女らもSOPⅡと同様に、ソウガがコミュニケーションの名目で引き合わされた戦術人形だ。

だがその表情はバラバラで、先頭のAR15は怒り心頭といったもの。そのすぐ後ろのM4は焦った様子でAR15の腕を掴み、ROは呆れたように頭に手を当てながらため息をつく。そしてM16は一番後ろで笑いながらその様子を眺めていた。

「SOPⅡ、集合時間をおもいつきり過ぎてるわよ！キルハウスで射撃訓練するって言ってあったじゃない！」

「お、落ち着いてー！」

「え、もうそんな時間だったけ？」

M4に抑えられながらも掴みかからんばかりなAR15の言葉に、SOPⅡは壁にかけられた時計を見る。

「……遊んでて忘れてた☆」

「あーなーたーねー!!」

「全くもう……」

「クツクツク、まあそんなもんだろうと思ってたよ」

「姉さんもROもAR15を止めるの手伝ってよー!!」

テヘペロ、とでも言いたげなSOPⅡの様子にAR15は更に怒りのボルテージを上げる。その様子を見たROはガクリと肩を落とす、M16は楽しそうに眺める。ただし誰もM4に加勢しようとしないうちに、彼女は苦労人なんだろうなとソウガにも見当がついた。

「まーまー落ち着きなよ。さっきまでソウガの義肢交換をやってたんだ、他人の義肢交換なんて中々見られないから忘れちゃってたんでしょ」

「そーそー。ソウガ、すっごい大変そうだったもん」

「だからってねえ……!」

「あ、ソウガさんにAAT、こんにちわ!すみません騒がしくて!」

「よっすM4。大して気にしとらんから大丈夫だぜ」

ペルシカのフォローにも中々落ち着く様子の無いAR15相手に四苦八苦しつつ、律儀に挨拶するM4にソウガは気遣いつつ返事を返す。AATも軽く手を上げて同じようにM4に挨拶すると、AR15に近付く。

「いい加減落ち着いた方がいいよ、AR15。訓練なんていつでも出来るでしょ?それにSOPPの遊びに付き合ってたのは私だし、SOPPに怒るのなら私も怒られるべきだよ」

「……はあ。もう、AATに免じて許してあげるけど、今回だけだからね」

「うん、ごめんねAR15。AATもありがとう」

「全然いーよー」

にへら、と笑うAATを横目でみつつ、ROは感心したように口を開く。

「んー、何と言うかやっぱパレットち小隊のAAT-52とは違いますね。こっちの方がどこか面倒見がいいというか、しっかりしてるというか、うちの何が何かポンコツいというか」

「お前意外と酷いな……。そいやソウガ、さっきペルシカが言ってたけど新しい義肢を付けたんだって?」

「おうよ。ようやく試験用じゃないちゃんとした腕をつけてもらったぜ」

どこか嬉しそうに左腕を指し示すソウガに、M16はニヤリと笑う。

「なるほどな。」

ちなみにその腕に酒瓶は仕込んであるのかい?欲を言えばワイルドターキーだと嬉しいんだが」

「んな訳あるか?!いや俺も酒は好きだけど腕に仕込んでまで飲みた



「いってほど呑兵衛じゃねーよ」

「流石にそれはないでしょうM16。きつと妨害電波と毒ガスを撒き散らす戦略兵器が組み込まれてるのですよ」

「それも有り得ないぞRO！」

電波はともかく毒ガスは間違いなく俺自身が死ぬだろ！ガスマスク常備しろってか!？」

「全く、有り得ないわよ。仕込んでるのはビームマシンガンに決まってるでしょ?」

「お前が一番有り得ねーよAR15オ！」

いや個人的にエネルギーウエポン内蔵は嫌いじゃないがそれが出来るならまずお前らの武器をビームライフルにするべきだろ!!」

「あ、あの……きつと、身体よりもすっごい大きなドリルに変形して突撃するんだよ！」

「M4お前それマジで言ってるの……?？」

## 一般人・イン・メイビーセーフティ6

ある種予想だにしていなかったM4からのトドメの一撃にソウガが両手両膝を床につけガックリと落ち込む。いくらI・O・P・や161abでも流石に物理法則を無視した兵器は作れないよ、とは口には出さずペルシカはソウガを慰める。

「まあまあ、さっきも説明したけど今回君に取り付けたのは普通の奴だしね?あんまり気にする必要は無いわよ」

「えー、普通な奴かよ。男ならもつとどしつと構えてなんでもこいや!とかいう気位を見せてみるよ」

「そうよ、いくらここがそんな無茶を通せる技術がない普通の研究所だとしても、自爆装置を積みたいくらいの心意気は欲しいわね」

「お前ら人を何だと思ってるんだ」

「……AR15、後で特製コーヒーが待ってるからね?」

「ごめんなさい!」

カチンと来たらしいペルシカが目の笑っていない笑顔でそんな宣告をすると、一瞬でAR15の顔色が真っ青になる。余程そのコーヒーが嫌なのだろうか、次の瞬間には深々と頭を下げていた。

「……そんなに不味いのか?ペルシカの特製コーヒーとやらは」

「ええ、まあ、その……はい」

「濃すぎるんですよ、無駄に。後、濃いだけじゃない変な味が」

ソウガが尋ねると、M4は口ごもりながらも肯定し、ROはバツサリと辛辣な評価を下す。彼女らも飲まされた事があるのだろう、その表情は実に苦々しいものだった。

「えー、そんなに不味いかい?研究者仲間の間じゃ二十四時間ぶっ続け研究を乗り切る切り札として好評なんだけど」

「それ好評とかただの最終手段じゃないのか……?」

「ペルシカ……お前らいつか身体壊すぞ。というかもう既に壊れてるんじゃないの?隈とかやべーし」

「う、うるさーい!というか隈に関してはソーガに言われたくないわよ、貴方だって相当な隈が出来てたんだから!」

ジト目で指摘するM16とソウガの目線に耐えきれなくなったのかペルシカがソウガを指差して反論する。

「その割には今は限はないよね？」

「おう、ここ数年で一番健康なレベルの睡眠時間を確保出来てるからな！」

「どんな生活送ってきたのよ貴方は」

顔を覗きこむSOPⅡに良い笑顔で返すソウガにAR15が突っ込む。事情を大して知らないM4らは軽く首を傾げていたが、既に青年から多少なりとも話を聞いていたペルシカ及びAATは何ともいえない微妙な表情を浮かべていた。

「ん、着信……？つと、はいもしもし。あら、もう到着したの？うん、こっちは今さつき取り付け終わったところ。りよーかい、玄関に向かわせるよ」

「もしかしてクルーガーさんか？」

「ご名答。着いたってさ」

突如着信した携帯電話での会話を終えたペルシカに問いかけたソウガ。AATも何となく察したのだろう、ちらりと横目で視線をペルシカへと向けていた。

「そ。割りとタイミング良く着いたもんだね」

「へー、グリフィンの社長自らお出迎えとはな！ソーガ、あんた実はVIPだったりするってか？」

「ハハハ、VIPというよりかはただの被害者だけだな」

おちよくなるような口振りのM16に乾いた笑いを返し、ソウガは部屋の入り口へと歩を進める。

「そう言えば、先日そんな事も仰ってましたね」

「にしても、やたら気の早い事で。そんなに急ぐ事があるのでしょうか？」

「時は金なりってあるだろ？仮にも一企業のトップを務めているんだ、時間の浪費は避けたいって事だろ。待たせちゃ悪いし、さっさと行くよ」

「わ、待ってよソーガ！」

「おん？どしたよAAT」

M4とROの言葉に肩を竦めながらソウガがノブに手を掛けると、慌てた様子でAATが傍へと駆け寄る。

「どうしたも何も、私はソーガの人形になったんだから、一緒に着いてくのは当たり前でしょ？」

「はいいい!?そんなの俺初めて聞いたぞ!？」

「あれ、こないだ説明されてなかったけ？AAT―52は現在、君専属の戦術人形として契約を変更されてるんだよ。元はI・O・P。からグリフィンへ貸与されてた形だったけれど、今はその貸与先が君個人へとなってるって訳で」

「な、なんじゃそりや!?大丈夫なのかよ、それ？ていうかAATは良いのかよ、勝手にそんな事言われてさ」

目の前の科学者から、いきなり自分が戦術人形を与えられていたという事に困惑するソウガ。しかも話をされていたというが、彼自身には少なくともはつきりとその事実を示された記憶がない。目の前の少女はこのI・O・P。で割りと長いこと一緒にいたりはしたが、そんな話を持ち出された事も無かったのだ。

「私は別に全然良いよ?というかソーガが相手だったらむしろ喜んで! 身辺警護から敵兵殲滅、分隊支援に荷物持ちまで何でもやるよ!」  
「この話はクルーガーからの依頼だね。彼女は君に相当懐いているし、このご時世戦術人形による護衛はあつて損はないしね。勿論理由はそれだけじゃないけど」  
「いやまあ、それは嬉しいけどよ?マシンガンでの護衛って字面だけみたらやべーんだけど」

弾けるような満面の笑顔のAATとそれと比べどこか含みのある笑顔のペルシカに青年はやや頬をひきつらせる。あの鉄血人形すら紙を引き裂くように撃ち砕いてみせた圧倒的破壊力で護衛などされたら、その銃口を向けられた相手は恐らくミンチよりも酷いことになるだろう。

一瞬そんなシーンが脳裏に思い浮かんだソウガは思考をやめると、目の前でニコニコしている少女を視界に収め、相手を崩す。

「ま、AATなら俺も歓迎だよ」

「ほんとに？良かったあー！」

「おうよ。じゃ、行くか。っと」

部屋を出ようとして、ソウガはくるりとペルシカ達に向き直る。

「ペルシカ、数日間だけど世話になったよ。左腕、あんがとな。他の人達にも宜しく言つといてくれよ」

「ん、こつちこそ色々無茶な研究に付き合ってもらって助かったよ。玄関の場所は大丈夫かい？」

「最初ここに来たときのあそこだろ？覚えてるよ。いざとなったらAATに案内してもらおうしな」

「そっか。じゃ、頑張つてね。まあうちとはグリフィンの戦術指揮官になつたらまた色々あると思うし、そうでなくてもAATの事で何かあつたら力になるよ」

「ん、サンキュー。あとAR小隊の皆も元気だな、訓練とか任務頑張れよ」

につ、と笑顔を浮かべながら激励するソウガに五人の戦術人形も顔をほころばせる。

「はい、ソーガさんもお元気で！」

「またここに来てニホンの話を聞かせてよね。AATもまた遊ぼ！」

「ま、グリフィンに入るのなら顔を会わせる機会もあるでしょ」

「もし戦場で会う事があつたらよろしく頼むぜ」

「私も早く正式な一員となれるよう努力します。ソーガさんもAATさんも頑張つて下さい」

「おうよ。うし、AAT行くぞ」

「うん！じゃーねー皆！」

それぞれの応援の言葉を背に、ソウガとAAT-52は部屋を出るのだった。

「……何と言うか、不思議な感じの人でしたね。良い意味で、私達を特別扱いしない方で」

「そうね。最初は四十年以上も昔の人間、なんて聞いて身構えたけれど、蓋を開けてみればほんと普通の青年って感じ」

「むしろ私達の事を人形と見ずに接していた節すら感じられました。ペルシカさんを除けばI・O・P。でもそのような人はほとんどいませんね」

「私達と最初に話しをした時も、全然緊張とかしてなかったよね」

「あのAATへの態度を見ても、人形に対してこれといった感情は持っていないさそうだな」

青年が立ち去った後、161abではそんな感想が述べられていた。数日前にソウガと話をした時から、彼女らは彼が人形に対する畏怖や特別視を一切持っていないかった事に少なからず驚いていた。

「そうねー、研究の合間にちよこちよこ調べてみたけどやっぱり彼の時代のニホンって国は面白いよ。それこそ人みたいな人形が出るゲームとかアニメとか色々あったし、やっぱりそういう意味では慣れるのかもね」

「サブカルチャーはともかくとして、現実でそれほど精巧な人形がいたのかしら？いくらなんでも慣れすぎな気もするけど」

「さあな。むしろソーガの場合、私らの事も人間と同じに見てたりしてな」

ペルシカの言葉にARR15は首を傾げる。そんな彼女におどけたようにM16は返すと、そこで視線が鋭さを帯びる。

「にしても……気になるのはソーガに対するグリフィンの処遇だ。あいつ、いくら前列の無い特殊な身元とはいえまだ正式にグリフィンに就職したって訳でもあるまいに、戦術人形を専属で付けるなんて話、聞いたことがないぞ」

「というより、マシンガンのような分隊支援火器を用いる戦術人形が護衛って何から護衛するんでしょうね。最前線に出るのでもなければいくらなんでもあの火力は過剰かと思えます。彼は大して疑問に

思っていないようでしたが」

「護衛、つてのはAATをなるべくソーガと一緒に行動させる為の口実だったりして」

「まさか」

考え込むROにポツリとSOPⅡが呟く。冗談でしょ、とM4は言葉を漏らす。ペルシカは内心舌を巻いていた。クルーガーはSOPⅡが予想した通りの言動を病院で見せていたからだ。勿論、単純にその為だけという訳でもないだろうが。

「ペルシカ、彼はそんなに重要な人間なの？特にこれといった技能もない普通の人に見えなかったけど」

「うん、普通の人間だよ。過去から来たつてのを除けば」

「なら、なんでグリフィンはソーガにここまで目をかけるんだ？明らかに割りに合わんだろ」

「さーね。きっとクルーガーには何かしらの考えがあるんでしょ、私にはよく分からないけど」

ARR15とM16の問い掛けにペルシカはあっさりとうそう答え、でもねと口には出さず心の中で続ける。

『彼の人形に対する思考。環境変化、苦痛に対する異様な程の順応性。そして先日の戦闘中の映像、そしてハイエンドモデル相手との会話にも現れていた、極限状態における彼の決断力と意志の硬さ。もしかすると、その特異性は通常時ではなく……？』

## 一般人・イン・メイビーセーフテイ7

「来たか」

「よつす、クルーガーさん」

「お、お待ちせしました!」

数分後、I. O. P. 本社の玄関前に止められた大型の車の側で待つガタイの良い髭面の男にソウガとAATが近寄る。運転席側にいたドライバーらしき初老の男性が、社長に対してさんづけをしながらもかなりフランクな挨拶を返すソウガに目を見張る。親子ほども年の差があるだろうにそれはないだろう、とでも言いたげな様子だ。

「ご苦労、AAT―52。ソーガも無事義肢を取り付け終えているようだな」

「ほんといさつき終わったとこだぞ。ペルシカも来るの早いなとか言ってたし」

「特に急いでいるという訳ではないのだが、こっちの所用が当初の予定より早く済んだので……一足先に来たという訳だ。さ、一先ずは君を配属先へと送ろう、二人とも車に乗りたま……む?」

苦笑いのソウガにクルーガーは頬の傷痕を撫でながら返す。二人に乗車を指示したところで、クルーガーの胸元のポケットからピピピと大きなアラーム音が辺りに鳴り響く。取り出した端末の画面を一瞬確認してからクルーガーは通話ボタンに指を触れる。

「失礼……私だ、どうした。うむ、今二人と会ったところだ。……ああ、アレか、少しは役に立ったか。ふむ……わかった、来次第受け取る。……む?ふむ、後で見っておこう。それでは」

「何かあったのか?」

通話を終え、端末をしまったクルーガーにソウガが問い掛ける。AATは既に車へと乗り込んでおり、青年も半身を突っ込んだ体勢となっていた。先程ソウガ達も出てきた玄関口の方に視線を向けながら口を開く。

「何、大した事ではない。先日I. O. P. に貸し出していた物を丁度良いから返すとのペルシカからの連絡だ」



「へえー。なんかこないだの話聞いてる感じだとむしろI. O. P. がグリフィンに貸与する方が多そうだったけど、逆もあるんだな」

「今回貸したのは少々特殊だな。まあ君にとっては見覚えのあるものかもしれないが」

「え、俺の私物？なんか役に立ちそうなものあったか？」

「と言うわけでもないが……む、来たようだな」

困惑する青年を尻目にクルーガーが呟くと、玄関の向こうから白衣を纏い眼鏡を掛けたいかにも研究者然とした見た目の男が、何かが乗せられた台車を押しながらゆっくりと近付いてきた。その台車の上の物を見て、思わずソウガは眉を顰める。

「……あの時の盾？」

カーキ色の分厚い大盾。四十年以上も後の時代に突如送られ、何も分からぬままに戦場送りにされた際に装備させられた代物。その圧倒的な防御力で、文字通り最後までソウガの盾となったそれが今、裏返された状態でゴロゴロと音を立てて車のすぐ側まで運ばれてきたのだった。

「お待たせしましたクルーガー社長。数日ほど解析しましたが、やはり正規軍の装備は一筋縄ではいきませんね。それなりの日数を要します」

「ふむ……まあ仕方ない。あのペルシカも手こずっているようだったからな」

「ですが、この盾と彼の戦闘映像を元に新たな銃種の戦術人形の研究・開発が決まりました」

「ほう？」

「え、俺？」

自分の方を見ながら発された言葉に思わずソウガは聞き返す。この流れで何故自分の名前が出てくるのか流石に彼には理解出来なかった。

「はい。現在グリフィンが開発している戦術人形のうち、部隊の盾役

となりうるのはSMG……サブマシンガンです。これらはその機動力を駆使して敵の攻撃を引き付け避ける、いわばニンジャ的ポジションのもの。今回新たに決まったのは、盾と装甲を身に纏って敵の弾丸を防ぎきるナイトポジションの銃種となります」

「ニンジャにナイトつてどこかで聞き覚えのあるジョブ名だなおい」「ふむ、それは中々面白そうだな。期待しているぞ」

「お任せ下さい。流星にこの盾と同等の防御性能とまではいかないでしょうが、代わりに取り回しを良くし複数の標的を攻撃出来るようにする案も出ております」

「スルーかちくしょう」

ソウガの突っ込みは気にも留められる事はなく、クルーガーと研究員は握手をする。そして台車の上の盾を見たクルーガーは、

「ソウガ。試しにその義肢でこれを持ってみてくれ」  
「へ?」

いまだに乗り掛けたままの姿だったソウガに声を掛けた。

「ペルシカから聞いている性能であれば、この重装盾もその義肢で持ち上げる事が可能な筈だが」

「いやまあ、確かにそうかも知れねーけどさ……本当に大丈夫なのか?こないだの戦闘の時はパワードスーツを装備してた状態だったから持てたとは思うけどさ、流星に義肢の補正のみで持ってたのは想像がつかんというか」

「物は試しと言うじゃないですか。実際にスペック通りの性能を發揮出来るかどうか、こちらとしても見てみたいですね」

「え」、あんたら自分達で試してないの?」

「そりゃまあ、ソーガさんに色々試してもらっていたくらいですし」

研究員の言葉を聞いたソウガの表情がどんどん曇っていく。まさか今自分が取り付けられている義肢それもちゃんと試験された代物でないとは思っていなかったのだろう。視線が不安げに左腕と盾とを行き来する。

「……それならいつそ聞かないでおいの方が心安らかにいられた気が

する」

「それならば一度ここで試しておいた方が良からう。日常生活でその盾よりも重たい物を一人で持つこと等まずあるまいし、駄目なら駄目で再調整してもらえばいい。君の義肢性能に関してはI・O・P.に一任している、性能が未達であるならばペルシカを通せばいい」

「ええ、勿論I・O・P. はアフターケアも万全です！顧客の要求には可能な限りお応えしますよー」

「なにその営業コメント……ったく、一応持つてみるか」

クルーガーと研究員の言葉に押されるように、ソウガは盾の取っ手に左手をかける。

そして、

「……うわ、軽っ。思ってたより全然重さ感じないんだけど」

「軽々と持てたものだな」

「おー、これは想定以上ですね」

「ほんとにこれで二割？設定間違えてない？マジで大丈夫なの？」

あっさり持てた事で、逆に色々と疑念が沸いたソウガだった。

## 一般人・イン・メイビーセーフティ8

「マジ何なんだよI. O. P. の奴ら、ほんと人の事を実験台か何かにしか見てないんじゃないか？ しかも想定以上の出力とか大丈夫なのか」「ま、まあ気を宥めてよソーガ……ちゃんと話通りの性能が発揮出来ている事は分かったんだしね？ それになんかあつたときは優先的に対応してくれるって言ってたし大丈夫だよ……多分」

揺れる車の中。苦情を述べる青年を、少女が必死で宥めていた。

「なんかその際にまた色々と要求されそうなんだけど。つーか人形製造してる会社なんだから、自前で試験用の人形を作って事前にそいつで試せよって言いたい」

「人間用と人形用では厳密に言えば違うからな。人形に人間用の義肢をつけても多少なりの確認は出来るだろうが、実際に人間に付けた時の反応とはまた差があるだろう……多分」

「二人して小声で多分とか言うのやめてくれね？」

「だってあのI. O. P. だし（だからな）」

「オウフ……クルーガーさん、そんな会社と提携して大丈夫なんか」

返却された盾を車に積み込み、クルーガーの言う目的地向かう道中。ソウガはいまだに先程の件に対して納得がいつていないのかぶつぶつ文句を呟いていた。

車の中は運転席と助手席を除くと、後ろの席は最後部と中央の座席が向かい合うような形になっており、最後部にソウガとAATが隣り合って座り、クルーガーと対面するような状態となっていた。

「まあ通常業務に関してはちゃんとしている会社である事は保証しよう。ペルシカのいる161abを筆頭とした技術部門や開発部門が中々キワモノであるだけで」

「それ会社としては割りと致命的じゃね？」

全く、と呟きながらソウガは窓の外へと目を向ける。葉の全く付いていない枯れ木がぽつぽつと立っている道路を車はひた走っていた。

「そいや結局聞くの忘れてたけどさ、俺ってどこに勤める事になるの？」

「色々考えてはみたのだがな、一先ずはT地区の基地にて指揮官見習いという事で仮採用の形を取る。そこで一定期間様子を見て、正式採用するか別の業務をあてるかを考慮する。AAT-52は基本的に君の補佐をしてもらうつもりだ……勿論、有事の際には出撃となるが」

「指揮官見習いはまだ良いけどよ。T地区の基地って、俺が最初連れてこられたあそこか……？」

ソウガの表情が明らかに嫌そうな物へと変わる。彼がそこにいたのは精々数時間程度であっただろうが、少なくともその間彼にとってそこでの経験は良いモノでは無かっただろう。故にクルーガーも、T地区基地にソウガを連れていくか否かが最後まで悩みの種だった。

「うむ。勿論君がああ基地に対して良い感情を抱いていない事は分かる。だが、あれはあの基地の前指揮官が独断で行った事で他の要員や人形達には罪はない。それを理解して欲しい」

「うん、それは本当だよ。私が単独出撃させられた時だって、皆心配してくれたしね」

「……俺には、それが本当か分かる術は無いからさ。クルーガーさんやAATの言葉が本当だと思いたいよ」

どこか含みのある笑顔を見せたソウガだったが、気になった事があるのか表情を改める。

「前からちよくちよくT地区T地区って聞くけどさ、どういうところなんだ？ 国名とか地名、とかねーのか？」

「そう言えば話していなかったな。第三次世界大戦とコーラップス汚染によって世界の枠組みが崩壊している状況で、管理の都合上アルファベットで各地区を区分けしている。」

T地区は他の地区に比べて比較的狭く、地区唯一の市街地があるT01地区、基地があるT02地区を含め5つの地区を纏めてT地区と呼称している。T地区自体は鉄血人形の数が多という訳ではないが、激戦区たるS地区と隣り合っているからな。場合によっては敗走した人形達が流れ込んでくる場合もある」

「うげ……あんまり穏やかな場所じゃなさそう。つーか基地の目と鼻の先でこないだ戦闘させられたんだけど、現状結構押されてるんじゃないの?」

「その可能性は高いだろうな。当然すぐ君に指揮を執れとは言わないが、場合によっては実戦が眼前の敵の掃討という事もありうるだろう」

クルーガーの言葉にソウガの中で人形達に指示を出す自分の姿が一瞬思い浮かぶ。だがそれはやがて何故か人形達と共に戦場を駆け姿に変わり、青年は慌てて想像をかき消すと次の質問を述べる。

「な、なるほどな。あとさ、そのT地区の前指揮官とやらは結局どうなったんだ?俺を戦場に叩き込んだ以外にも色々やらかしてたみたいだけどさ。前って事は辞めさせられたんだろ?」

「勿論彼奴は指揮官権限を剥奪の上、現在グリフィン本部にて拘留、尋問中だ。」

何か理由でもあるのか中々全部の情報を吐こうとしないが、彼奴の持っていた通信機器を解析したところかなり怪しいやり取りを複数回行っていた事が分かった。今後その通信履歴や内容を調査する予定だ」

「さいでつか。そんなしぶとく隠してもしようがないだろーに、何考えてんだか」

ふん、と鼻を鳴らしながらクルーガーは腕を組む。彼がそこまで言う辺り前指揮官はまだまだ何かヤバそうな事を隠しているのをソウガも感じ取った。本当にろくでもない奴だったな、と呆れたソウガはまた外へと視線を向ける。

「あの、クルーガー社長。質問しても良いでしょうか?」

「何かね」

外の景色を眺めるソウガの横で、AATはおずおすと小さく手を上げる。

「先日、病院で私以外にも行方不明になっている人形がいるって言うてましたよね。それは……今しがた話に出た、あいつが何か隠してい

る件に繋がっているんですか？」

「確証はない。が、可能性は高いだろう。彼の基地のデータを洗い出したところ、AAT-52……君が単独出撃させられた後に行動記録が途中で途切れている人形が何体かいた。それは先程の話にあった通信履歴の時期とかなり近い。絶対とは言い切れんが、何かしら絡んでいる線が濃厚だな」

「……そうですか」

クルーガーの言葉に、AATは小さな手を強く握り締める。自分以外にも前指揮官の手によって危機に晒されている仲間がいることが許せないのだろう、目を伏せながら歯を食いしばっているのがソウガにも見てとれた。そんな少女の頭に、青年はゆっくりと手を乗せた。

「ソーガ？」

「もしAATの仲間の行方が分かったらさ、全力で助けに行こう。俺はまだ指揮官になるって決まった訳じゃねえけどさ、例えば指揮官になれなくなったら、力を貸すよ」

「でも……ソーガには、関係ない事なのに」

「何言ってるんだ。これからAAT達と一緒に基地で過ごすんだ、関係ないなんて事は無いだろう？俺はAATの仲間であり味方だ、困った事があつたら何でも頼ってくれよ」

「それは、ソーガもだよ。むしろソーガの方がこの先大変な筈だよ。学ぶ事もたくさんあるし、色々な判断を下す事になるかもだし」

困ったようにAATは笑う。目の前の青年は前指揮官の謀略によつて左腕を失う羽目になり、しかもまるでその前指揮官の尻拭いさせられるかのように見習いとはいえT地区の指揮官を命じられたというのに、自分の事よりも人形の事を気にかけているのだ。少女にとつても流石にお人好しと言う他無かった。

「君達がどうなるかは今後の状況によりけりだ。場合によっては君らの手も借りる事となるだろうが、基本的にはグリフィン本部で片をつけるつもりだ。ソーガ、君はまず自分の事を考えなさい」

「……ん、了解」

「さ、間もなく基地につく。降りる準備をするぞ」

クルーガーが言葉を掛けた通り、眼前には大きく無骨な建物が……  
AATには懐かしく、ソウガにはやや忌々しげな様相が見えてきたの  
だった。



## 一般人・イン・メイビーセーフティ9

「うーん、ほんと久々に帰ってこれたよ……皆元気かなあ」

「まさかまたここに来るとはなあ。戦場に送り込まれた直後はともかく、切り捨てられたって分かった時は俺にとってある種最大の脅威でしかなかったし」

「まあそう言ってくれるな。これからは暫くここが君の家みたいなものだ、慣れてくれねば困る」

「そりや分かってっけどさ」

ため息混じりにガリガリと頭を搔きながら二人に遅れてソウガも車から降り、トランクから盾を下ろす。頭では理解しようとしているものの、あの強烈な経験は青年の中で深く刻まれてしまい簡単に覆せるものではなくなっていた。

「大丈夫だよソーガ！何かあったら私が何とかするから！」

「お、おうよ」

ふんす、と鼻息を鳴らしながら両手を胸の前で握り締めるAATにやや引きつつも青年は頷き、ふとそこで側のクルーガーを見やる。

「そう言えばかなり今更だけどさ。流石に他者の面前では敬語使った方がいいよな？」

「本当に今更レベルだよねそれ」

「流石に君自身の評判に関わるだろうからな、使っておくに越した事はないだろうが……ソーガ、君は敬語を使えるのか？」

「そりやまあ、普通程度には」

疑いの目を向けるクルーガーに、ソウガは軽く咳払いをする。

「先程は失礼致しましたクルーガー社長。私も社会人です、きちんと覚悟を決めて臨みます。では、大変恐縮ですが内部の案内をお願い出来ますか？」

「ほう……」

「うわ、似合わないね」

「うるせい！これでも七年は会社勤めしてんだ、これくらいなら出来るわ！それにクルーガー社長も、確か一番最初病院でお会いした際に

少しだけですが敬語でお話をした気がするんですけど!」

AATのツツコミに思わずソウガも声を張り上げる。青年にとってあまり、どころかほとんど良い思い出のない会社員生活ではあったが、人並みに敬語を使えるようになったのは数少ない利点だったようだ。

「それぐらい出来れば言葉遣いは問題無いだろう。まあそこまで固くなくても大丈夫ですさえ出来れば良いだろうがな。あと、別に他者の前でなければ言葉遣いは特に気にはしない」

「ふう、了解」

「一応言っとくけど私には敬語いらないからね?」

「……そんなに似合わんか?」

重ねてAATにそんな事を言われ、流石のソウガも頬をひくつかせる。だが、彼女には特段青年を揶揄するつもりはなかったようだ。

「だって、私にとってソーガは命の恩人であって、私はソーガの専属人形なんだもん。ご主人様みたいなもんだよ?」

「命の恩人にご主人様、って……俺はそんなつもりは」

「うん、無いのは知ってるよ」

怪訝な表情のソウガに、AATはニコリと笑いかける。

「ほんとなら私がソーガに敬語とか使ったりするべきだと思っけどさ、きつと嫌がるでしょ。だから私相手だったら普通の言葉遣いでいいよ?」

「……そっか。サンキューな」

「その代わりに私もタメ口でお話させてね!」

「……それは別に全然良いけどよ、締まらんなお前」

「二人とも、そろそろ行くぞ」

「あ、すみません!」

「りょーかいっつと」

このままでは一向に話が進まない気配を察したのか、クルーガーが先導して基地へと入っていく。それに続く形で、AATとソウガも建物の中に入った。

「一先ずソーガ、君には現在代行でこの基地の管理を行っている者に会ってもらおう。その者への情報の引き継ぎ等は既に行っている」

「代行……って、後任の指揮官が決まっている訳じゃないのか？」

無機質なコンクリート張りの廊下を歩きながらソーガが質問をぶつける。途中数人ほど清掃員姿の作業者達とすれ違ったが、社長たるクルーガーがいるからか彼に挨拶はするものの、青年には一瞥をくれるだけで特に声を掛けられることも無かった。

「うむ……現状、グリフィンとしてはS地区の方に経験者を割いていな。可能であれば指揮経験豊富な人材をここにも充てたかったが」  
「あー、ぶっちゃけ今んとこそんな余裕はないと。だから俺を指揮官見習いにして養成し、ゆくゆくは正式にここの指揮官として採用しようって事か……え、待ってそれ割りと責任重大じゃね？俺そんな覚悟出来ていねえよ」

思わぬ重責の発覚にソーガは頭を抱える。指揮官見習いという立ち位置に軽くOKを出していたが、最終的にはこの基地において最大の権限を持つ立場に据えられるという事なのだ。流石の青年もそこまでの考えは及ばなかったようだ。

「故に見習いとしたのだ。最初からそのような大きな権限をずぶの素人に持たせる程こちらでも能無しではないし、いきなりその責を君に負わせるのは酷すぎる。それに指揮もしたことの無い人間が、鉄血ハイエンドの運用する部隊相手に戦術人形達を指示したところで……結果は目に見えているからな」

「そりゃまあな。って、鉄血ハイエンドってなんだ？人形とはまた別の存在がいるのか？」

やや窘めるような口振りのクルーガーの言葉に胸を撫で下ろした所で、ソーガの中で聞き覚えのない単語に疑問点が浮上する。

「いや、人形は人形なのだがな。鉄血の人形達の上位個体……通称ハイエンドモデルと呼ばれる人形が何種類か存在していてな。それっらは量産型を遥かに凌駕する戦闘能力を持つだけでなく、量産型人形に対して高い指揮能力を持つ非常に厄介な存在だ」

「ハイエンド、モデル……」

クルーガーから説明を受けて思わず呟いたソウガの脳裏に、一体の人形の姿が浮かぶ。

エプロンドレスとヘッドドレスを纏い、頭部の左右に団子状に髪を結ったその姿。

エプロンを捲ったかと思えば、その下から現れる四本のアームに銃。

冷たく酷薄な笑みを浮かべ、彼を己の側へと誘おうとしたその言葉。

「……っ、ぐう……い！」

突如、青年の肩が、腕が、鈍い痛みを発する。義肢を接続している肩口だけではない、痛覚の存在しない腕が、肘が、掌が。

弾丸で貫かれた場所を思い出させるが如く、痛みは弱まる事も強まる事もなく青年を苛む。

「そ、ソーガ!？」

「っ、だ、いじょうぶ。ちよつと、肩が痛いだけだ」

ソウガは額に汗を浮かべながらも、青年を気遣うAATに何とか笑みを返す。その様子を黙ってみていたクルーガーだったが、やや目を瞑った後に口を開く。

「ソウガ、君の想像は正しい。君があの場合で邂逅した鉄血人形は、正しくハイエンドモデルだ。個体名は代理人、<sup>エージェント</sup>鉄血の中でも最上位クラスの実力者だ。グリフィンも奴には幾度も辛酸を嘗めさせられている」

「……エージェント、か」

クルーガーの告げた名を、ソウガは噛み締める。自分が戦った鉄血の部隊を指揮したと思われると同時に、己の腕を破壊した存在。

「出来れば、二度と会いたくはないもんだな。今度は普通に殺されそうだし」

苦笑いと同時に、青年はそう小さく呟いた。

## 一般人・イン・メイビーセーフティ10

「どうぞ」

「入るぞ」

「……待てよ、この部屋って、確か」

暫く基地の中を歩き続けた後、とある部屋の前で立ち止まるとクルーガーはドアをノックする。ドアや廊下の見た目に何となく既視感をソウガが感じている間に、中から女性の声で返事が返ってきた。それを確認し、クルーガーを先頭にソウガとAATは部屋へと入っていく。

「お疲れ様です、クルーガーさん」

「うむ、ご苦労」

「うぎえあー……やっぱあの部屋か」

「どしたの、ソーガ？」

「いや、何でもない……まあ個人的にちよつと、な」

ややひきつった表情のソウガを心配そうにAATが見つめるが、ソウガは軽く首を振り少女に返す。何という事はない、この部屋は正に青年が前指揮官に戦場送りを命じられたその場所だった。まともに良い印象を抱いていない青年にとっては、この部屋は勘弁してほしいところだったろう。

部屋の中には、多数の資料を机上に並べて何かを確認している鼠色の髪をシュシュで束ねた片眼鏡の女性と、パソコン相手ににらめっこをしているオレンジの髪をこちらは赤いリボンで縛り、サングラスを頭に乘せた少女の二人がいた。

「ソーガ、紹介する。こちらはヘリアントス上級代行官、彼女が先程の話にあったこの基地の現在の代理責任者だ」

「初めまして、ヘリアントスだ。呼びにくいだろうからヘリアンとも呼んでくれればいい。貴官がソーガ・タケーチだな、話は聞いている。噂とは大分違った風体だが……いや何でもない、よろしく頼む」「こちらこそよろしくお願ひします、ヘリアントスさん。……あの、失礼ですが噂とは一体？」

厳しめな表情を少し崩しながら握手を求めるヘリアンに応じつつ、ソウガは質問をする。どこか、そして何故か、目の前の女性は青年を見て安心したように肩の力を抜いたように見えたからだ。

「何、大したことのない与太話だ、気にすることは無い。軍人や傭兵ならともかく鉄血人形の部隊と交戦して生存した民間人の記録がほとんど無い中で、戦闘経験一切皆無の一般人が鉄血ハイエンドモデル相手に生き延びたともなれば、尾緒の付いた話は出回っても仕方ないからな」

「そ、それは聞きたいような、あまり聞きたくないような」

「あ、私知ってますよそれ！」

と、そこで今度はオレンジ色の髪の少女が顔を上げる。ソウガをちらりと見た後に、思い出すように視線を虚空へと彷徨わせる。

「例えば弾丸を弾くほどに強靱な肉体の持ち主だったとか、腕がマシンガンになってて鉄血人形を全て薙ぎ倒したとか、空から降下した瞬間に周りの物を全て吹き飛ばしたとか！」

「一体どんな化け物みたいな人間が来るのかと戦々恐々としていたが、まあ普通の人間のように良かったよ」

「いや、それもどこからどう見ても一般人じゃないですよね？」

「どうかそんな人間がいると思ってたんですか」

「相当な重量の装甲鎧を纏つての降下、鉄血人形の攻撃の悉くを弾き返したその盾、廃墟から持ち出したAAT-52のマシンガン……なるほど、それぞれ微妙に事実が混ざってはいるな」

「うんうん、ちゃんと私の武器を使つて倒せたんだね、良かった良かった」

軽く笑いながら少女のともんでも噂について解説したクルーガーと何故か胸を張つてどや顔をしているAATに、勘弁してくれよとソウガは項垂れる。ただ装備を使つて戦つていただけのはずが、どこをどう取り違えればそんな有り得ない人間兵器が生まれるというのか、青年は俄には信じられなかった。

そしてそんな人間が来ると割りと真面目に考えていたらしいヘリ

アンの事はもつと信じられなかった。

「あ、あははは。あ、私はカーリーナって言います。後方幕僚を担当します……えーっと、簡単に言うと言指揮官様を補佐する参謀とも思っ  
て下さい。気軽にカーリンって呼んでください、よろしくお願いします  
指揮官様！」

「あ、こちらこそよろしく。えっと、私はまだ指揮官見習いでまだ正式  
に決まった訳ではないので、普通に名前と呼んでいただいて構いませ  
んよ。むしろその方が気楽ですのぞ」

苦笑いしつつ手を差し出した少女に握手しながらソウガは注文を  
つける。ただでさえ指揮官という全く経験のない上官ポジションで  
慣れないのに見習いの段階で様付けは勘弁してくれよ、と内心青年は  
呟いた。

「ありや、そうなんですか。ならソーガさん、でしたっけ？良かった  
合ってた、ソーガさんも敬語じゃなくて良いですよ。聞いた話だと私  
より年上のようにすし」

「とは言いますが、カーリーナさんの方が先輩ですからね。現状は立場  
もカーリーナさんの方が上ですし、最初はこの口調でやらせてくださ  
い」

肩を竦めながらカーリーナの提案を退けるソウガに、カーリーナは可愛  
らしく頬を膨らませる。

「むうー、話には聞いていましたけどかなりの頑固者なんすね。そ  
んな人にはシヨップで融通なんてしてあげませんよーだ！」

「シヨップ？」

「カーリーナは補給物資の管理も担当している。その流れで、基地の人  
間に様々な品の販売を担当しているんだ」

「日用品から嗜好品、趣味の発掘に夜の御供までお任せあれ！という  
訳でソーガさん、何か買いますか!？」

「いきなりだなおい……。まあ確かに、私は着の身着のままにいる訳  
ですし、それはとても有難いで、す……。って、ちよつと待って」

ヘリアンの解説に胸を張るカーリーナに引き気味ながら、財布を取り

出したソウガの動きが固まる。

「どうかしたか？中身は調べた後に必ずそのまま戻すようにと指示をしていた筈だが、まさか抜かれているのか？」

「あー、いや、そのー……中身は無事、なんですけども」

顔を剣呑な物に変えたクルーガーに否定しつつ、青年はかなり言いづらそうに言葉を続けた。

「えーと、今って2061年って言うてましたよね」

「そうだな」

「自分、一応クレジットカードを持つてはいるんですけども、そのですね、期限が……」

「なるほど、私達からしたら遙か昔に切れているから使えない、と」

「まあそもそも日本が消滅している時点でその会社も消えているから、どのみち駄目なんですけどね」

ヘリアンの言葉に皮肉気味に笑いながら返すソウガに、カリーナは首を傾げながら問いかける。

「それでも、財布の中にはお札も何枚か見えていましたよね？」

「まあ確かに現金も持つてはいますよ？持つてますけど……日本が滅んでる現在、日本円って、そもそも通貨として認められていますか？」

「あつ」

「あー、その」

「……ソーガ。その、非常に言いにくいのだが」

既に諦め気味の青年の問い掛けに、三人の表情が曇る。どう言ったものか、と考えあぐねる彼等を尻目に。

「うん、使えるはずないよね」

「そりやそうだよねチクシヨー!!」

あつさりとAATがトドメを刺した。



## 一般人・イン・メイビーセーフテイー

「ぐはあ……言葉が通じるから一縷の望みを賭けたけどやっぱり駄目だったかー」

「仕方ないよソーガ。生きてたつてだけでも充分じゃない？」

「そりやそうなんだけどさ。一応これでも金だけはそれなりに持ってたんだよなあ、忙しすぎて使うことがあんま無かったから。まあその貯めてた銀行もオシヤカだろうからどうしようもないんだけどさ……一から稼ぎ直した」

深々とため息をつくソウガの肩をAATが軽く撫でる。唐突に有り金が全て無くなる、それも奪われた訳でも無くした訳でも使い込んだ訳でもないという理不尽な消え方には、流石の三人も閉口した。

「ま、すぐに入り用になる訳じゃないから暫くは我慢だ。ここであくせく働いてお給金貰えるように頑張る他ないだろ。という訳でカリーナさん、シヨップとやらはまた別の機会にお願いします」

「いやまあ、所持金0でももんね、仕方ないですよアハハ」

「その同情が胸に突き刺さる」

気を遣うカリーナの様子に遠い目をするソウガを横目で見つつ、クルーガーはヘリアンに声を掛ける。

「済まないがこの後会議があるので私はこれで失礼する、後は頼むぞヘリアン」

「分かりましたクルーガーさん、お気をつけて」

「うむ……つと、そうだった。ソーガ、これを君に」

部屋から退出しようとした身体を翻して青年に近付くと、クルーガーは胸のポケットから板状の紺色の物体を取り出す。

それは、ソウガにとつて見慣れた代物だった。

「それって、スマホ……それも私のですか？しかし、お金と同じでそれを使い物にならないのでは」

「何、中身のOSをぶっすり入れ換えて通信基地局から何から現状に合わせて一から設定し直してやれば旧世代の機体でも問題なく使えるようになる。ついでに私の連絡先も登録しておいた、何かあれば連

絡するといい……その時に出れるかはさておきな」

「はあ、ありがとうございます。にしても話だけきくとかなり無茶苦茶な事してる気がするんですけど」

「君のいた時代からどれだけ経っていると思ってるのかね。この程度、専門屋に頼めば一時間程度で済ませてくれるぞ」

「何それすげえ……つとと、技術の進歩は凄いですね」

自分のいた時代との違いを今更ながら痛感しつつ、ソウガはクルーガーからガワだけは自分のスマホを受けとる。青年自身分かったつもりではいたが、身近な物の方がやはりその違いを感じやすいようだ。

ボタンを押して真つ暗だった画面を点灯させると、全く見覚えのないトップ画面やアプリケーションがออกมาししていた。一瞬ソウガは固まりはしたものの、ヤバい代物を目の前の社長が態々分かりやすく入れるだろうか、と思いきや直し消灯してポケットにしまう。

「ふつ、その技術革新の最先端たる存在が君のすぐ横にいたのだがね……それではな」

そう呟くと、今度こそクルーガーは背を向け部屋から出ていった。そのクルーガーが言及したAAT-52本人は気付いていないのか、小首を傾げながら横の青年に尋ねる。

「何の事だろう?」

「いやいや、お前の事だよAAT。最も、社長の口振りだと戦術人形全般の事を指しているんだろうけどさ。さて、と」

肩を竦めつつAATに告げると、ソウガはヘリアンへと向き直る。「とりあえずこれからどうするのでしょうか。基地内を挨拶回りした方が宜しいでしょうか?」

「いや、君の容姿等々のデータは既にこの基地の全員にインストールしてある。態々そんな事を行う必要はない、精々すれ違ったら挨拶する程度で構わない」

「は、はあ……ですがって、んん?」

自分の提案をアツサリと却下されたソウガは、いくらなんでも最低

限のコミュニケーションを取るべきだろうと反論しようとした。だが、ヘリアンの言葉の中に引つ掛かるものを感じとり眉を顰める。

「どうした、何か不満でも?」

「不満というより……その、全員にインストールって仰いましたか?」  
「そうだが?……ああなるほど、この基地について深くは聞かされていないのだな」

これは失礼した、とヘリアンは表情を改めてから口を開く。

「今現在、このT地区基地に常駐している人間は私とカーリーナの二名。君を含めれば三名になるな」

「え?で、でもさつき道中に清掃員が何人かいましたけど」

「最後まで聞け。『人間』は我々三人だけだが、それ以外は全員『人形』だ」

「……マジかよ。いやすみません、そうなんですか。ああ、だから先程インストールと」

衝撃的な発言に思わずソウガの口から素の感想が漏れる。確かに先程クルーガーと一緒にいた際にすれ違った人達の様子に若干の違和感をソウガは感じ取っていたが、これがその正体だった訳である。

既に青年のデータはインストールしてあるから、完全に部外者たるソウガとすれ違ってても特にリアクションを起こす必要は無かったのだ。

「ビックリしましたか?そもそもこの基地は元々前任の指揮官の時代はその指揮官以外全員人形でしたからね。全く、いくらこのご時世人の手が足りないからって態々人間の配属を減らすなんて理解出来ませんよ!」

「いや、あの男ならやるだろうなと思いました。人間嫌いなのか知らないですが、いくら不審者だからと言って初対面の人間を戦場送りにするくらいですし。……他の人達の事もそうやって処理してきたんですかね」

「いや、流石に君にしでかしたような事を正規の従業員に対してしたら即刻バレるだろう。まあ奴の事だ、好き勝手をする為に自分の箱庭

たる基地を素直に命令を聞き反抗する事もない従順な人形で固めておきたかった、といった所だろう」

カリーナとヘリアンの言葉に、確かにあいつならやりかねんとソウガは嘆息する。クルーガーの話を聞く限り自分やAATの件以外にもやらかしているようだし、敢えて己以外の人間の数を0にしてやりたい放題やっていた事は容易にソウガにも想像がついた。

「というか、流石に戦場送りにされたのは私だけでしたか」

「むしろ戦闘能力の無いただの一般人を戦場送りにした事に私達は驚愕しましたよ」

「まさかそんな事までするとは思っていなかったからな。無論、全部吐かせたら奴には相応の刑が待っているだろう。いや、奴にはその咎を負わせなければならぬ」

厳しい表情で断言したヘリアンに頷きつつ、だけどソウガはAATを見つめる。

「まあそれでも、あいつに送り出された事でAATに会えたのは唯一感謝してますよ。そうで無かったら私は誰も信じられなかったし、この子の銃が無ければ間違いなく死んでいましたから」

「うん。私もソーガのおかげで助けられて、こうやって戻ってこれたよ」

ニツ、とソウガとAATは笑いあう。その様子を見ていたカリーナとヘリアンは思わず顔を見合わせた。

「顛末は少し聞いていましたけど、そんな事があつたんですね」

「……フツ。人生、何があるか分からんな」

## 一般人・イン・メイビーセーフティ12

何はともあれ、とヘリアンはソウガの方を向く。

「これから何をするか、の話だったな。クルーガーさんから聞いているとは思うがソーガ、君は現在指揮官見習いという立場だ。実際に正規指揮官として採用するかはどうかはある程度のタイミングで試験を行って見定めるが、それまでの期間はその為の学びをしよう」  
「で、そのソーガさんの勉強の先生になるのが！この私、後方幕僚たるキャリアナです！」

「年頃の子が胸を張るんじゃないやありません」

「……………ジー」

えっへん、とキャリアナが発育の良い胸を張る。年下が先生かーそれは想像してなかったわー等と呑気な事を考えていたソウガだったが、目の前の少女から目線を反らした先の光景を見るとそれはどうなのかと思考を止める。

ちなみに横でなにやらAATが凝視しているような気がしたが、青年はスルーすることにした。

「先生、ですか。しかしこの状況を見ると、結構大変な様子ですけど……むしろ勉強なんかより先に私も手伝いに入った方がよろしいのでは？」

ソウガは目線を机の上に向ける。雑多に散らばった書類の内容は数字だらけでパツと見ただけでは難解ではあるものの、少なくともこの基地の運用絡みについての物である事は青年にも理解できた。

「その気持ちはありがたいがな、君が気にする事ではない。それにこれでもかなり纏まってきた方なんだ」

「最初はメチャメチャでしたけどね。ほんとどんな管理をしてたのかと」

「あー」

腕を組みながらため息をつくキャリアナの様子に、間違いなく前指揮官絡みだなどソウガは察する。余程雑な運営をしていたのだろう、ヘリアンも全くだと大きく頷く。

「まあ後は私だけでも何とか出来るところまでには辿り着いた。だから君は君自身の事を考えてくれればいい。むしろ、この前線基地に現状指揮官がいない事の方が大事なのだからな」

ヘリアンがソウガにそう告げたところで、机に備え付けられていた電話がけたたましい着信音を鳴り散らす。なんだ？と訝しげに呟きながらヘリアンが受話器を手に取り耳に当てる。

「こちらT地区基地……ああ、君か。ヘリアンだ。驚いたか？何、少しな。しかしどうしたんだ？」

電話の相手は知り合いだったようで、ヘリアンの顔が僅かにほころぶ。しかし会話が續くなかで、その表情が段々と険しい物へとその色を変えていく。

「……申し訳ないが、現状では君の要求に応じるのは難しいと言わざるを得ない。勿論そちらの状況は把握しているが、T地区の保持戦力では貸し出せる程の余裕はないんだ。すまないな」

そこで通話を終え、受話器を戻すとヘリアンはふう、と息を吐く。その顔色はお世辞にもよいとは言えないものだった。

「こちらは報告詐称の確認及び実戦力の確認、あちらは戦域拡大による戦力不足……か、やれやれ」

「救援の要請ですか？」

カリーナの問い掛けにヘリアンは頷く。

「別地区の指揮官からだ。厳密に言えばこの基地で管理している戦術人形の一時貸し出しを請われたんだ。だが、現在のこの基地の保有戦力では基地の防衛を行う以上の余裕はない。書類の数値が正しければ本来はもつと余裕があったはずなんだが、な」

「そんなところまで適当な管理していたんですか!?あのク……前任者は」

「やたら人形の解体指示とか出してたのはメモリにあるけど……ね」

思わず暴言を吐きかけたソウガだったが、すんでの所で思いとどまる。これから指揮官として学んでいく立場の青年ではあるが、流石にこの現状における戦術人形の重要性は身に染みている。それが戦術

人形を主の戦力として据えているこの会社グリフィンであれば尚更だ。AATも、苦々しげに呟く。

「彼らの言い分も分かる。この頃、幹部や役員の中にさっさと戦線を拡げて戦果を挙げる、等と言いつく者がいてな。だが鉄血もそう易々と退いてくれる筈もない。地区にもよるが、戦況はシーソーゲームの状態だ」

「そこはいつの時代も同じですか。現場の事も知らずに理想論ばかり積み上げられても困りますよね」

「全くだ。クルーガーさんはその点軍人上がりで話が分かる方だからな、ある程度抑えてくれてはいるが、それもいつまで保つ事か」

やれやれと息をつきつつ、ヘリアンはソウガへ視線を向ける。

「いずれにせよ君の今の役目は、指揮官としての知識・技能を修得し、この基地で指揮にあたってもらう事だ。期待している。カーリーナ、ソーガの事は頼んだぞ。AAT-52はクルーガーさんから聞いているとは思いますが、ソーガの補佐を宜しく頼む」

「分かりました、期待に添えるよう精進します」

「了解です！」

「お任せ下さいヘリアンさん！それではソーガさん、案内するのでついてきて下さい」

三者三様にヘリアンへ答えると、カーリーナが先導するように部屋を出る。次いで、ソウガとAATも部屋を後にした。

「……過去から来た人間、か。その辺の若者と大して変わらんように思えるが、クルーガーさんは何を期待しているのだろうか」

一人になったヘリアンは小さく呟くと、軽く首を回してから資料の束との格闘を再開するのだった。

「なんだったらツケでも良いですよ！利子は十一でどうでしょう!？」

「うわ、悪質な金貸しみたいな事言ってる」

「勘弁してくださいカーリーナさん、こっちは物価も何も分からないんですよ」

「だから今のうちに買ってもらいたいんですよ！」

「鬼ですか貴女は!？」

食い気味に詰め寄ってくるカリリーナにAATと共にドン引きしつつ、ソウガは歩を進めていた。目をギラギラと輝かせるその様は、その姿だけみれば金の亡者以外には見えないだろう。

「少しだけ!ほんの少し買うだけでもいいですから!」

「何ですかその先つちよ理論の亜種みたいなねだり方は……ん?」

「あつ、皆!」

瞳に?マークすら浮かんでいそうなカリリーナから視線を外すと、前方から五人ほどが近付いてくるのにソウガは気付く。その全員がどこか見覚えのあることに気付いた青年は誰だっけ?と記憶を手繰り寄せている間に、同じく気付いたAATがその五人へと駆け寄る。

「お、AATじゃないか!戻ってきていたのか!」

「うん、今さっき来たところだよ!」

「そうだったの。社長から今日戻ってくるとは聞いていたけれど、時間は未定って聞いていたから……でも、良かった」

「助けに行けず、本当に申し訳ありませんでした」

「大丈夫だよ、仕方のない事だったしね。それよりも……」

そのやってきた五人もAATに気付くと、それぞれ笑顔を浮かべてAATを迎え入れた。会話を弾ませるその姿を見て、そこで青年はその五人がああ戰場へ送られた日に見た戦術人形達であることを思い出したのだった。

「丁度後方支援から帰って来たところだったんですね。ナイスタイミングです」

「見覚えがあると思ったら……そっか、彼女らもここの戦術人形だったんだ」

「はい、何れもこの基地が誇る最高クラスの性能を持つ人形です。エース部隊たる第一部隊ですね」

「そうなんですネ……でも良かった、本当良かった」

「どうしました?」

良かった、と何度も呟くソウガの顔をカリリーナは訝しげに見上げる。その青年の表情は、どこか安堵しているかのようだった。



「いや、ね。AATがこの基地の人形と話しているのを見るのは初めてでしたから。自分が心配する事では無いとは思っていましたが、彼女がちゃんどこの基地の一員として受け止められていたのかな、って。あの指揮官の事もあったし、もしかして……とか、考えていたんです。杞憂で本当に良かった。AATに帰ってくる場所があつて、良かったです」

「ソーガさん……」

どこか、羨ましそうに。それでも、本当に嬉しそうに。ソウガは、話に花を咲かせるAATを眺めていた。